

---

# 電送機兵サイクロプス

NEO,s

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電送機兵サイクロプス

### 【Nコード】

N5649E

### 【作者名】

NEO's

### 【あらすじ】

「あんちきしょう。いきなり玄関に来て徴兵ですって言われてもわかるわけねーだろ」遠隔操作型のロボットが開発された日、世界が大きく変わり始めた。

## プロローグ1

俺は今戦場にいる。

俺の隣にいる傭兵仲間は誰とも、何処の国出身なのかも解らないような奴らで、まともな会話すら成り立たない。

大きな繁華街の中央道路、空爆でスクラップになったバスを盾代わりに前方でバリケードを張った敵の部隊と交戦中。

そして、一人、また一人と仲間が殺られて行く。

そんな中で怒声を張った掛声が俺の耳へと飛び込んできた。

「伏せろ！」

引き締まった隊長の掛声だ。

隊長の掛声で舞台が動く。そして一斉に隊員達はアリのように低い姿勢で構えた。

その直後、音速の銃弾は俺達の頭上の空気を切り裂き烈空の彼方へと姿を消していく。

だが、そんな隊長の掛け声を聞いても伏せない奴が居た。いつまでたっても自分の身を隠さないその傭兵は崩れかけたバスの小窓から敵への銃撃を止めず、仲間達の必死の静止も振り払い俄然の敵へと照準を合わせたままたちつくしていた。

まるで戦場の空気が読めて無い、自分の置かれている立場を把握していない。

そして案の定狙撃された。

味方のヘルメットは爆炎に巻き込まれたが如く空中を舞い、それだけで頭を打ち抜かれたという事を他の隊員達へ伝えていた。やがてヘルメットが完全に地面へと落ちきる刹那、乾き切った甲高い銃声が俺達の耳へと入って来た。

「バカが無駄死にしゃがって」

思わず口にしてしまう一言。

「仕方ないさ、今は戦争中、目的の達成だけを考えろ」

「このままだと皆なさっきのスナイパーに狙撃されてしまいますね」  
すでに何も言う事の出来なくなつた仲間の亡骸を見て俺は隊長へ  
言つた

「道の選択を間違つたか……」

少し間を起き隊長がまた喋り出した。

「その角を左に入つてビルの隙間に入る、みんな着いて来い！」

隊長の声を聞いて隊員達は一斉に歩道の左側を見た。

運良く瓦礫のバリケードは左側のビル同士の隙間まで延びており、  
屈んだ状態で進んで行けば、比較的安全な通路となつていた。

やがて隊長が先陣を切つて動き出す。俺達も隊長の後を追う、敵  
になるべく気がつかれないようにできる限りゆつくりと、前へ、進  
んで行く。

今残っている隊員の数は隊長を入れて五人、上陸直後八人居た隊  
員達は激戦のさなか数を減らしていき、今の現状を表していた。

俺達の任務は敵の衛星施設を破壊する事。正面の道路を突つ切つ  
て進んで行けば一番早く目的の場所に到着できるのだが、中央突破  
は予想通り敵からの手痛い歓迎を受けることとなつた。

たぶん作戦を変更しても状況は変わらないだろう。

そんな事を考えていた矢先の事だ。敵兵の一人が俺達の隠密行動  
に気が付き他の仲間へと支持を出した。

そして、俺達同様にビルを一つ分超えた向かい側の道路へと移動  
を開始している。

敵がゾロゾロと行進する足音が聞こえた、三、四、五人。足音だ  
けで人数を把握する。

足音を確認してから、暫くして。細い通路へと入ろうとした瞬間  
に細目で敵のバリケードがあつた方向も確認する。瞬間的に視線を  
移し、今残っている敵の残存兵力を確認して頭の中で計算した。

バリケードの方向にも二人ほど待機していたのでこのフィールド

内ではすでに五対七、更に何処かにスナイパーも隠れているのだらう。この状況やはり不利だ。

結局の処、戦争なんて数で勝敗がすでに決まっているのだから、不利だと思ったのなら逃だすのが一番利口なやり方なのに。

暫くビルの隙間、狭い路地を小走りで蟻の行進をしていた時。路地を半分程進んだ辺りで前方の隊長から指示が出た。

「よし、止まれ！」

急に前進していた隊長が止まったために、俺は隊長に激突しそうになる。

「どうしたんですか？ 急に」

「今から引き返し敵の裏を取りに行く、その方が確実だ」

俺は、その新しい作戦を聞いた瞬間、既に頭の中で賛成していた。このまま引き返せば五対二。

上手く立ち回りを組めばほぼ無傷で敵を倒せるはずだ。

他の隊員達もその作戦に賛成したらしい、戦闘は入れ替わり俺は後ろから二番目という位置で、前方の見方の背中を見ながらまた歩き始めた。

この狭い路地はプラスチックで作られたゴミ箱やら、ダンボールやらが乱雑に地面に転がっている、足場を確保するのも一苦勞といった状況だ。

路地を小走りで走る途中、自分の服がビルのコンクリートに擦れてマツチをこすり付けた時の様な摩擦音を上げた。

暫くして、先ほどの中央道路を確認する事が出来た、更に瓦礫と化したバスも視界へと入って来る。

やがて、俺達は先ほどの激戦区、中央道路へと引き返して来た。瓦礫の隙間からなるべく気がつかれない様に顔を出し、周囲の様子を伺う。少しでも物音を立てて向い側のバリケードの様子を伺った。「あいつら呑気に煙草吸ってやがるな」

隊長は半ば呆れた口調で俺達へと言った

「残りの一人はナイフで遊んでますね」

戦場という緊張感をまるで把握していない、そんなあいつ等に制裁とばかり俺は銃器の照準を合わせた。

そして引き金を引こうとした瞬間だ、聞きなれない言葉を他の隊員達が一斉に発していた、否、意味は分かる「爆発するぞ！」という意味だ。

他の三人の隊員達も手榴弾を片手に敵のバリケード目掛け、一斉に放り投げていた。手榴弾は綺麗なアーチ状の方物線を描き、地面へと落下する。そして一秒とたたずに軽快な爆音を轟かせて向い側のバリケードの瓦礫を吹き飛ばした。

本来ならこれで敵さんがやられてくれれば儲け物なのだが、そんな都合たぶん無いだろう。

それ所か今の爆発音を聞いて、向かい側へと移動していた敵の兵隊達が気付いて戻って来るに違いない。

## プロローグ2

俺の体はすでに動いていた、「このままではまた数で押される」  
そう思い、一度来た道をまた引き返す羽目になった。今度はこつそりなんて言つてられない、できるだけ早く路地へと隠れるんだ。

生憎隊長も俺と同じ意見だったらしい、俺より先に路地を進んでいた

「不味い事をしたなー、あれじゃ兵力を分散させた意味がないじゃないか」

俺の前方を走る隊長は呆れ顔で悪態を垂れた。

俺が路地へと隠れた直後の事だ。後ろ側の中央道路、バスの方から爆発音が聞こえた、手榴弾のお返しを食らったらしい。

反射的に後ろを見る俺の姿に気が付き隊長が言った

「気にするな、今は戦争中、目的の達成が絶対だ。そのためにはどんな犠牲が出たって後ろを振り返っちゃいけない、振り返って良いのは戦争が終わった時だけだ」

隊長の戦争理念を聞きながら、隊長と俺は前方の出口、道路目指して全速力で走って行く。服が擦れる音や、ダンボールを踏みつけ音。そんなのが気にならないくらいに早く足を前へと出していた。

やがて路地から道路へと移動していたために明るい光源が俺の全視界に入り、俺は一瞬足を踏み留める事になる。

そして、出遅れる俺にお構いなしと言った具合に俺の前方の隊長はすでに道路へと足を踏み出していた、光源に怯んでいる俺へと支持を出す、隊長が何かを言おうとした瞬間。

先程と同じ用に聞きなれたスナイパーライフルの乾いた銃声が俺の耳へと伝わってきた。その後、隊長は静かに両足の膝を付くとそのまま動かなくなった。

「まさか！ 体長が殺られるなんて」

前方で起きたありえない状況を俺は必死に理解しようとしていた。

そして俺はそのまま動く事が出来なくなってしまった。

引き返すべきか、そんな事を心の中で考えている最中。前方の道路から、大地を強く蹴って走る足音が聞こえた。

「ちきしょう、気付かれた！」

俺は小声でつぶやくと、今来た道をまた引き返す決意をした。

石の用に固まった後ろ脚を何とか動かすと、体を180度反転させるよう体を捻った。だが、その直後。前方の道路から敵の姿が視界へと入って来る。

姿を現わした敵兵は俺の姿を確認すると躊躇する事無く銃器を構えた。

俺もその姿を確認して銃器を構える。だが後退姿勢を取っていたために、構えるのに手間取ってしまう。

次の瞬間俺はアサルトライフルから発射された銃弾という波に押され、冷たい地面へと勢いよく叩きつけられた。

徐々に俺の視界が真っ暗になっていく。俺はこの何処とも知れない戦場で、ビルの隙間、路地という一本道で息絶えてしまうのだらう。

そして、完全に視界が真っ暗になったのを俺は確認し終えてから、パソコンのキーボード左端の「Tab」キーを押した。

ディスプレイに表示されている真っ暗な画面に今残っている敵見方の兵力を確認する事が出来た。

敵の数は残り六人、そして見方はと言うと残り二人になっている。どうやら中央道路側の敵兵士と華麗な爆撃戦を繰り広げていた見方は奇しくも一人兵員を欠いたものの、向かい側のバリケードに隠れていた敵兵士を倒す事が出来たらしい。

俺も中央道路の戦闘に参加しておけば良かったか。

そんな事を考えていると、今までブラックでしか表示されていなかったスクリーンは三色色素を融合させて鮮やかな色彩をまた映し出した。



映し出したのは見方の姿、三人称視点で元気に動き回る姿を確認する事が出来る。

「Enter」キーを押せば死んだ奴ら同士で会話をする事も可能だ。

暫く見方の画面で立ち回りを観察していると先にリタイヤした隊長からチャット連絡が入ってきた。

ID

島根の隊長 - - - - :「おしかったねーb」

Seidou - - - - :「まあ次のゲームがありますからねw」

島根の隊長 - - - - :「敵のスナイパーが優秀すぎるんだよw」

無敵超人Z - - - - :「w」 最初に撃たれた奴

鷹の爪 - - - - :「うわーん」 分散した時に味方の投げた手榴弾をくらった奴

敗者のチャット場という事もあり結構荒れ果てている。

俺はディスプレイを置いてあるパソコンラックに肘をついて、口元を手で覆い勝負の行方を見守っていた。

そして、敗者の部屋へと次々に敵見方がまわす送り込まれて来る。全世界による対戦のため、チャットの通じる奴通じない奴がいる。比較的日本人の多いこのゲームでも外人が入って来れば。その荒れようは凄まじく半ば収集がつかなくなっていた。

そんな中アナウンが入り、勝負の行方を告げた

「レッドチームの勝利！」

俺の口元が微かににやけた、なぜなら、レッドチームは俺の居た舞台だからだ。

中央道路を進んでいた見方が敵の裏取りに成功したらしい。勝敗

がついた事により今まで混沌としていた敗者のチャット場に純粹な活気が湧き上がってきていた、次のゲームへの意気込みという活気だ。

### プロローグ3

勝敗がついた事によりゲームルームからロビーへと移動する奴らももちろん出て来る、そして俺達の純粋な活気を邪魔するように、ゲーム特有の邪魔者も姿を現した。

Kouji様が入室しました。

Kouji：「んっごいいいいいいwww」

Kouji様が退出しました。

まあこういった事はよくある事、ログ荒らしなんて……。

Kouji様が入室しました。

島根の隊長：「ウゼッ」

Kanji：「お前ら弱すぎwww」

島根の隊長：「厨かよ」

Seidou：「相手にしてもきりがないですよ」

島根の隊長：「そだね」

そう、これは現実の話ではない、「FPS」と言われる一人称視点で繰り広げられるゲームの話だ。

「FPS」の中でも戦争物、特殊部隊物の人気が高く。俺達が今までやっていゲームもその一つなのだ。中でも俺達が今まで戦っていたゲームは一番人気なのさ！

ネットを繋ぐ事で世界中のランカー達と対戦をする事が出来る中で。

今起きた戦争は、決して現実ではない。

三年位前の話だったと思う、アメリカは突然イランを空爆した。ニュースによる前降りなどの報道は一切なく、いきなりイランの核施設への空爆を開始したのだ。

その事実は今でも世界中に波紋を呼び、その事実をゲーム会社が取り上げて、10年後の世界を舞台にしたゲームを作成した。

リアルで戦争なんてやってられないけど、ゲームとなれば話は別だ。「FPS」は俺の生活の一部となり、俺の良いストレス発散材料になっている。

敵を上手く倒せた場合に限るんだけどね……。

「さてもう一勝負といこうか！」

Seidou:「隊長、頭数も揃ったんでそろそろ始めない」

島根の隊長 :「うい、了解」

## 世界情勢 1

「630円になります」

駅前の近くにあるスーパーで、レジ係の女性は夕食の材料費の代金を俺へと告げた。

俺は二つ折りの財布から千円札をブツキラボウに抜き出してレジ横のトレーの中へ投げ出すと、レジ係の女性は軽く会釈をしてから会計を済ませ釣り銭を渡した。

その後、俺は今日使うであろう夕食の材料をビニール袋一杯に詰め込んでスーパーを後にした。

スーパーの出入口に設けられている両開きの自動ドアが低音混じりにガサツな機械音を上げて開く。そして片足を一步外へ踏み出して外へと出た。

「はぁ……」

無機質な溜め息が流れた。

俺は、東京の大学に通う大学生だ。実家から離れて学校の僚で一人暮らしをしている。今日はというと先ほどのゲームを切り上げて今晚の材料費をスーパーで買い終えた所だ。

アメリカがイランを空爆した後世界情勢はかなり混沌としている。表向きは核施設への先制攻撃だとされているが、世界の見方は大分違うようだ。

だからと言って世界戦争なんて起きるわけも無い、世界が第二次世界大戦のような過ちを繰返すはずは無く。退屈な毎日の暇つぶしをゲームという仮想世界で過している。

でも最近と思う、もし戦争が起きていたならこの退屈から抜け出せるのではないかと。愚かな頭で考えるのだ。

空爆以降の生活も実感できる範囲で少しだけ変わった。原油価格が高騰したせいで、ガソリンの代金も当たり前の用に値を張り上げ、今ではリッターあたりの代金

が180円を超えている、それに伴い原油を使用している加工物も二、三十円程値段を上げた。

一人暮らしの俺としては厳しい限りだ……。いやっ厳し過ぎる！ガソリンがかなりの高級品になったせいで俺はバイクという相棒を捨てる羽目になった、厳密に言えば捨てるではないのだが、実家の駐輪場に雨曝しで外に放り出しているのだから捨ててあるの何一つ変わらないさ。

そのせいで寮から大学までの道のりも今は歩きで通っている。まあ大学三年ともなれば1年の半年が休みになっていてのだから、歩きで通うのもあまり苦にはならないのだけど。

「まあ賛沢は言ってられないか」

ガソリンなんか買っていたら生活が成り立たなくなる、機械の飯か、自分の飯かと聞かれたらやはり自分の飯が大事に決まっている！ガソリンなんてその内安くなるんだから、今無理をする必要なんてないさつ……。

そんな事を考えながら俺は宿舍までの道のりをスーパーの袋を片手に持ってトボトボと歩いていった。スーパーまでの道のりは対した事は無いのだけど、一つだけ厄介な問題がある。陸橋の無い踏み切りだ！

都心の踏み切りはこれまた厄介で、一度ケタタマシク鐘を打ち鳴らしたが最後、次に鐘を何時、休めるかわかったものじゃない。

そんな不安を他所に案の定、俺の目の前数メートルの距離にある踏み切りは甲高い鐘の音を鳴らして、道を斜断するという意思を周囲の人へと高らかに呼びかけていた。

良くある事。

むろん、この距離から走って行けば間に合う。

そして、俺は走り慣れてない両足を全速力で回した。だが、走っ

たのは不味かった。

運動不慣れな俺の両足は絡み合い、夕食の材料を抱えたまま空中へと舞うと、スーパーのレジ袋同様俺は地面へとダイブした。体申擦り剥いた。

そして、うつ伏せで倒れこんでいる状態から顔を上げ、踏み切りの方向を見ると既に虎縞模様の踏み切りは両腕を閉じ、俺の対岸への侵入を固く拒んでいた。

「兄ちゃん、大丈夫かい？」

「ええ、一応大丈夫です」

親切心か、好奇心か。俺に声をかけて来たのは、同じく踏切横断を逃したタクシードライバーだ。

「ここの踏切長いんだよねー。ホント困っちゃうよ」

「まったくですね……」

「兄ちゃん、大学生かい？」

「そうですけど……」

「大変だねー」

「何がですか？」

「ニュースはちゃんと確認しないと、酷い目に遭うよ」

話ながら起き上がると、タクシードライバーは安心したのか、車の窓ガラスを閉めてしまった。

## 世界情勢2

そんな事よりも前方にあるレジ袋だ！

この調子だと先ほど買った卵は全滅だろう。勿体ない事をしたな  
ー。俺は心のなかで先ほど慌てて走った事を後悔した。

俺の目の前をガタゴトと音を上げて電車が走り去っていく。俺の  
横を軽快なエンジン音響かせた車が積み重なっていく。

そして俺は地ベタに張り付いている。

その後、擦りむいた傷が痛みだす前に、何とか起き上がった俺は、  
地面に落ちているスーパ－の袋を持ち上げると、中身を確認した。  
そして落胆した。

案の定全滅だった……。

そう言えば最近良く電気自動車のCMをテレビで見掛けるように  
なった、流行のアニメの合間にも必ず流れるのだから間違い無い、  
きつと自動車業界もガソリンの打撃を受けているんだ。そうか！  
そんな背景があつたんだな！！

流石に不味いと思つたのだろう自動車会社各社は拳って電気自動  
車の開発に乗り出した。電気自動車の値段も今のガソリン自動車の  
二割増しくらいなのだという。

初めの内は電気駆動を七割、補助用のガソリン駆動を三割という  
ハイブリッド式のシステムで推移するらしい。

気になる電気スタンドだが、車購入時に駐車場に設置され、充電  
時間は人間の一般的な睡眠時間と同じ約七時間、朝の快適な目覚め  
と共に愛車も満腹になっている算段だ。

気になる走行距離だが、電力駆動のみの場合最高で100キ  
ロメートルを走行する事ができるとか。長距離利用の場合以外だっ  
たら現状のシステムで十分実用できるのだろう。

更に最近では電車の利用客も倍増した、ガソリン系の運搬システ



ムが減退してきたからなのか環境問題のせいなのか特に自動車は最近の若者に受けが悪いのだという。

車には渋滞があるが、電車なら確実な時間に目的地に到着できると聞くが、果たして本当だろうか……。

電車が過ぎ去った後、暫くして、飛び込み阻止警備員と化していた踏み切りは両腕を開き、暫く電車が通らない事を周囲へと知らせた。

俺は歪に潰れたスーパーの袋を、渋々手に持つと、足早に踏み切りを渡たる。そして俺が渡り終えてから直、踏み切りが甲高い音を上げ後ろで鳴った。

## 世界情勢2（後書き）

「電送機兵サイクロプス」を読んでいただきありがとうございます  
前作を読んでくれた方には申し訳ないのですが、今回は続編というわけではないのです

前作「サイクロプス」の一時修正版が「電送機兵サイクロプス」続編を期待していた方は大変申し訳ないもう少し待っていてください

（．．．）b

作者の紹介ページからブログへアクセスする事が出来ます  
作品の世界観やなんかの紹介ページです

## 大統領執務室にて

同日、午後の事である。

ホワイトハウス内、大統領執務室へと向かう廊下をマーキス中将は、神妙な面持ちで歩いた。顔の表情は幾分固く、笑み一つ零れる事の無い面構えで。

歴史を称えた重圧感のある扉を力任せに二回ほど裏手で叩いた。執務室で待ち構えるのは一国の主であるが、周囲には人影一つ見当たらない。

本来なら、中将与互角に、体格の整ったシークレットサービスが待ち構えているはずなのだが。

「どうぞ、入ってちょうだい」

ノックの音が響いてから直ぐの事である。

執務室の主が言ったのであろう、突き刺さるような高い声が廊下へと返ってきた。

執務室内に居る主の声を確認し終えると、マーキス中将は扉を開ける事となる。長い兵役生活で鍛えられたその体躯で重圧感のある扉に手をかけてから「失礼します」と一言吐くと、そつと扉を中へ押した。

大統領執務室へ入ると、部屋の両隅にシークレットサービスの姿を伺う事ができた。シワーつ無い綺麗に締まった黒のスーツに、カメラの閃光で怯まない為に黒のサングラスをかけていた。

だが、おかしい。

シークレットサービス数が普段より明らかに少ないのだ。

不審に思いながらもマーキス中将は、大統領執務室中央の椅子に腰を掛ける部屋の主へと声を掛けた。

そこには、意外にも還暦を過ぎた女性が座っていた。

「キアリー大統領に報告です。先日、例のシステムが完成しました。

翌日にも日本の首都、東京で運用実験を開始する予定であります」

その言葉を聞いても椅子に深く凭れる、大統領は微動打にしなかった。

「あら、思ったよりも早く完成したのね。私が任期を終える前に完成するとは思わなかったわ」

「私としましても実行段階まで持っていけるシステムだとは思ってはおりませんでした」

「それで、演習実験から実戦投入まではどれくらいの時間が掛るのかしら？」

「今月中に、日本全国の自衛軍と共同演習を行い、実戦投入は来年以降になると思われます。」

机の上で両手を組んで構えるキアリー大統領。

マークス中将の吐いた「来年」と言う言葉を聞いて幾分顔を引きつかせた。

執務室内に重たい空気が立ち込めたが、直ぐに顔の表情を戻した大統領は又喋り始めた。

「そうね、今回のサイクロプス計画には大分期待しているわ」

「それは、私としても同じ意見であります。今回の計画が実行に移れば我軍隊は世界を出し抜き、また一流国家へ返り咲く事が出来るのですから」

「そうよ、先代の大統領はやってくれたわね。環境の事をまるで考えず、自分の任期間近でイラン空爆だなんて。後を任される人の事も考えて欲しかったわ」

気がつけば大統領は女性特有の甲高い声を荒げていた。

マークス中将は半ば興奮気味の大統領が放つ空気を察し、返答に

困る素振りを見せた。

「彼には彼の思惑があったのでしよう」

「この何処が、思惑よ。自分の国を三流に落とす事の何処に思惑があるっていうのよ！」

「落ち着いてください、大統領」

「まあいいわ、どうせあなたに聞いたとしても答えは出ないのだから。予定通りサイクロプスシステムの運用に移ってちょうだい」

マークス中將は大統領の返答を聞くと、一張羅の軍服をなびかせて、腕を直角に曲げた。その後水平になった掌を額へと付けた。

「ハッ、かしこまりましたキアリー大統領」

その後、軍隊式の敬礼を終えたマークス中將は、足早に大統領執務室を後にした。

## 日本某所

（（日本某所）

そこには、自衛軍が極秘に作った研究施設がある。

都心から少し離れた田舎の山奥だというのに、地下300メートルという途方も無い深くに建造された施設。その規模は途方も無くデカイ。

そして、その実験施設の一室では一人の科学者と助手の女性が会話をしていた。科学者はイスに沈むように深く腰を掛け、助手は立ったままの姿勢で片手を机に付いていた。

机に手を付いている助手は少しズレ落ちた細めのメガネを指で調節すると、暗い表情で科学者へと質問している。

「教授、結局AIの搭載までは行きませんでしたが大丈夫でしょうか？」

前方にあるディスプレイ、ブラックスクリーンに緑色で羅列された、奇怪なパラメーターを眺める一人の科学者は、助手の発言を黙って聞いていた。

科学者の年齢は五十代前半だと思われる。助手の年齢は大体二十代くらいか。

電気の半分消えた研究施設の一室で、暫くパラメーターを眺めていた科学者は作業が一段落ついたのだろっ、先ほど助手が放った質問へと答えを返した。

「まあいいさね、今回の一件でAIは使えないにせよ、それ以上の性能を持つ者を使えるのだから、何も問題はない。」

少しの間が流れ、科学者はまた喋りだした。  
少し陽気に、腕を広げて。

「むしろ良すぎるくらいじゃないかね。AIのレベルなんてたかが知れているだろ。所詮人間には叶わないよ」

「そうでしょうか。私は思うのです……このようなシステムに人間を起用するなど、馬鹿げていると……」

助手の真横で構える科学者の耳が少しだけ動いたのを確認できた。  
それは一瞬だった。

科学者が助手の言葉に同様しているのは明らかだった。

だが、その同様に隠すようにまた、科学者は助手へ向けて淡々と話し始めた。

「化学の発展には犠牲は付き物だよ、それがわからない内は君もまだまだ化学者とはいえないね」

「こんな形でこのシステムを、彼らを使いたくはありませんでした。もつと別の方法があったと思います……ます……」

助手が放つ歯切れの悪い口ぶりからは覇気がまるで感じられず、助手の無念な感情は科学者へとヒシヒシと伝わっていった。

その後少しの会話の後、アシスタントは実験施設の出入口にある押し戸式の片扉を開けると。

その勢いのまま、外へ足を一歩踏み出した。

助手が一歩踏み出した直後の事だ、後ろのパソコンデスクに座る科学者は無機質な口調で助手を引き止めた。

「私はもう君の教授じゃないんだ、同業者として名前で呼んでもらいたいんだがね」

助手も無機質な口調を習って返事を返した。

その口調は科学者に負けず劣らずといった感じの淡々とした物で、

完全に仕事の仲間の会話である。

「そうですね、それじゃ失礼しました高島さん」

「ああ、期待しているよ鈴木君」

科学者が助手へと軽い挨拶を終えると、後ろの方で扉がそつと締まる音がした。

研究室には科学者が一人だけ残っている。

「若いっていいのは良い物だね。私の学生の頃はあんな態度ゆるされなかった」

イスに深くもたれPCの画面を眺めながら。奇怪に、乱雑に、ディスプレイの上段から下段へと流れるパラメーターをぼんやりと眺めながら。

そして、ボソボソと呟いた。

「使えるものだったら私だって平和利用のために使いたかったさ」  
「それよりも明日の演説はどうしたものか……」



## 自宅にて - 1

俺が家に帰った時には既に時計の針は六時をさしていた。

俺は、その針に驚き慌てながらテレビの電源を入れる事となる。

本当なら十分前に家に帰るはずだったのに全力でコケて踏み切りにバカにされた分、予定より帰るのが遅くなったんだ。

テレビを付けると、時代遅れのブラウン管は映写時のノイズ音と共に徐々に映像を写し始めた。完全に映像が映り終えたのを確認してから、アニメ専用チャンネルへと切り替える。

そして、映し出された映像を見て俺は少しばかりホツとした。流行為のアニメ『不滅勇者ジャンクキング』は、まだオープニングに差し掛かったばかりで、これから入るCMの時間を使って俺はパソコンの電源を入れるだけの余裕を確保する事ができたからだ。

それと同時進行で予約録画機能の壊れたビデオデッキを操作する。赤い丸ポッチがビデオデッキの左隅に表示され、晴れて録画完了となるのだ。

パソコンの電源を入れた事により、俺の後ろの方で、OSの画面へと以降した可愛いパソコンが、俺のパスワードを今か今かと待っている。

だがまだ入力はいらない！

暫くパソコンをそのまま放置しなくてはならない。

なぜなら、先ほどスーパーで買った品を冷蔵庫へと閉まれないければいけないからだ。

潰れたスーパーのレジ袋を広げると、黄色い水溜りにヒタヒタになった野菜達が俺の救出を待っているのが伺えた。

そして、慎重に野菜を取り出す。まず始めにジャガイモからだ。バラ売りで買った野菜達を見て悔しさがにじみ返って来たが、今

はこらえるんだ。

ジャガイモの後、ニンジンと続けて救出し、流し台へと放り投げると一枚のステンレスで出来た流し台はベコっという弾みの良い音を上げて野菜達を受け入れた。

その直後の事だ、ジーンズのポケットに入っている携帯電話が激しく振動したのだ。

普段から携帯電話はマナーモードに設定している。

正直、着信音なんて迷惑なもんだし、一々設定するのが面倒臭い！それに電話かメールかも、今は、携帯のバイブレーションのリズムで大体わかるものだ。

今回の振動のしかたメールだ！

少しワクワクしながら貝の様に二つ折になった携帯電話を勢いよく広げると。久々に送られてきたメールの主を確認した。

差出人は島根の隊長からだった……。

島根の隊長（以下島根）

島根の隊長とは長いネットゲーム仲間だ、知り合って四年位になるだろうか。

特に軍事関係物には目がないらしい。俺も軍事関係に興味を持っている事もあり、良く一緒にネットゲームをするようになった。

今やっているネットゲームも島根が言い出した物だ。

仮想の戦争世界を良く二人で走り回ったものだ。

島根は良く仕切りたがるので仲間が望んでいない指示をしょっちゅう出していた。

最近ではクラン（チーム）を作ろうかという話も上がっていたくらいだ。

だからと言って直接メールを遣り取りする仲というわけでもない。いや、メールのやり取りをする必要がなかったと言った方が良かった。

ろっ。

パソコンにインストールされた高性能メッセージャーで島根の方から勝手に話し掛けて来るのだからワザワザ携帯電話を使う必要が無かったんだ。

とは言えメールの内容が気にならないわけでもない。

件名に表示されている『人生オワタ』というタイトルと共にニッコ笑いながら両手を広げた顔文字には興味をそそる物がある。

問は言え、冷蔵庫の前で携帯電話を眺めながら電波世界の友人が送ってきたメールの件名を茫然自筆と眺めていたって何も始まらない。ここは勇気、勢いが肝心なんだ。

俺は、ゴクリと唾を飲むと携帯電話の中心にある確定ボタンを押した。

夏でもないというのに俺の額からは一筋の汗が流れた。

そして、携帯の内容がディスプレイ全体に表示されたのだ。

『今、ポストの中確認したら赤紙入ってたんだが。マンドクセ……。お前家どうよ？』

俺の頭の中で「？」がグルグルと回っている。

こいつは何を言っているんだ？　そもそも赤紙って何なんだ……。

俺は頭中の「？」を重く抱えたままメールを返信するか幾分悩んだが。

部屋の奥からはテレビ番組の主演である「ガラタキング」と「自称悪役」の掛け合いが盛大に繰り広げられていた事もあった。

その掛け合いの声と共に、携帯電話を畳むと、大慌てでジーンズへと仕舞い込み自分の部屋へ戻る事となった。

台所の流し台では今も直、野菜達が泳いでいるがそんな事は関係無い。

三十分後に戻って調理をしてやれば良いのだから……。たぶん、今日の飯は巨大な卵焼きになるとは思うが。

## 自宅にて - 2

寛ぎながら見ていたアニメは中間のCMに差し掛かったという事もあり、いよいよパソコンのパスワードに手をかける事になる。

パスワードを入れると何時も通りの軽快な音がスピーカーから流れてきた。

瞬く間にパソコンはネットへと繋がれ。

ネットの中の友人である、島根が俺のパソコンへメッセージを送ってきた。

俺は渋々、送られてきたメッセージを確認した。

島根「おい、メール見たんか!!」

やはり島根の話題はメールの事だ。

今の島根にとっては送られて来た赤紙が相当重要なのだろう。感情の読み取れない相手に深い溜息をつきながら、一文字で造った文章をメッセンジャーに送信する。

正道「ん」

島根「メール見たんか？」

正道「ん？」

二回目の「ん」という文字を入れた辺りでネットの向こうの島根が煙たそうに顔文字を書いてきた。

そして、俺はアニメの続きを放棄する決意をした。

残りの展開は非常に気になるが録画してあるのでたぶん問題はないだろう。最悪ネット上で探せば事足りる。

それよりも今は友、長年の友情を優先するべきだ。

パソコンデッキの窪みに押し込んであるイスを後ろに引いてから、気ダルそうに腰をかけると、ネットの中の親友と本格的にチャット

を開始した。

正道「メールの内容はちゃんと確認したよ。返信なくて悪かった」

島根「俺の青春をかえせー！ 日本政府は人権を何だと思ってるんだよ」

正道「そういえば赤紙って何？」

俺は島根にとって無知な発言をしたらしい。

島根は俺の発言を聞いて少し驚いた顔文字を書いてきた。

もちろん俺も赤紙が何かは知っているさ、戦争の時に使用されたあれだ。でもそんな現実離れた事が起こるはずはない。

島根「それは徴兵令だろ、そんな事も知らないのか」

正道「えっ、ん？ 徴兵！？ 遂に脳みそまでやられたのか」

島根「[http://www.\\*\\*\\*\\*\\*.news](http://www.*****.news)  
ソース」

島根「そういえばお前何県？」

正道「出身は茨城で今東京に住んでるよ。前に言わなかったっけ？」

島根「あゝそだっけ？ ちなみに俺は北海道だから駐屯地は別の場所になるな」

正道「ほむ？」

島根「それじゃ、親とかに連絡しなきゃいけないから次は戦場でね」

島根様がオフライン状態になりました

一頻りの嵐が過ぎ去っていった。

俺は、暫く島根の残したチャットログを茫然と眺める事しかできなかった。

眺めてある事に気が付く。本来なら直ぐに確認するのに、今回は

かりはその作業を怠っていたのだ。

「ソース！」気がつけば叫んでいた。島根の残したニュースサイトのソースが俺の目に飛びこんでくる。

たぶん戦争ゲーム好きなあいつの事だ、きっと特別なイベントに浮かれているに違いない。

俺は意を決してリンク先を確認する事にした。自分が唾を飲み込む音が聞える。

俺の後ろではテレビのCMが開けたらしい、アニメの続きが放送されていた。

軽快な口ぶりでヒーローが悪役を叩いて行く。

パソコンの画面上にはニュースの内容が全体にデカデカと表示されていた。

内容を確認して俺は絶句した。固まってしまった……。

しばらく何も考えられなくなり、思わずニュースの内容を復唱する。

「国会が自衛隊の格上げを容認。徴兵令を発令」

ニュースの日付を確認すると、発表されたのは今日の午後、時間は四時と表示されていたので、今から二時間前に発表された事になる。発表はそれよりも早いか、ニュースになるのに時間がかかるはずだ。

そんな事をパソコンの前で顎を撫でながら考えていた時だ。俺の後ろで締めの大技を繰り出そうとしていたヒーローの声が急に止んだ。

その異常な出来事に驚き俺は大慌てで後ろへと振り向いた。

テレビの中のヒーローは消え、画面中央には二人の人間の姿が写り込んでいる……。無論アニメではない。

一人の女性キャスターは見覚えがある、最近花形と注目されている。

る柳川キャスターだ。

でもその横に座っている黒スーツの男性にはまるで見覚えがなかった。

テレビの不足の事態に面を食らっていると柳川キャスターの一言で緊急番組は始まった。

「番組の途中ですが緊急のニュースが入ったのでお知らせします」

その言葉を皮切りに、二人は座ったまま深々と一礼すると柳川キャスターの一言で緊急のニュース番組が始まった。

この時間『不滅勇者ジャンクキング』は、ゴールデン前だということに視聴率は毎回30%を超える超人気アニメ、故にこの緊急放送を視聴している人は相当な数になっているだろう。



### 自宅にて - 3

「いやー大変な事になりましたね、古河さん」

「柳川さん、大変な事じゃないんですよ」

黒スーツの男性は古河と言うらしい、皺一つない黒のスーツにギリギリとした赤いネクタイが特徴的だった。多分このニュース番組が徴兵について重要な手掛かりを教えてくれるだろう。そう思うと気がつけば食い入る様にテレビの画面を見つめていた。

「いきなり徴兵制度だなんて日本政府は一体何を考えているのか。私には皆目見当もつきませんな」古賀は少し御立腹な様子で柳川へと話を返した。

「一説にはアメリカからの莫大な資金援助があったという情報が入ってきていますが、それについて何か心当たりはありませんか？」

アナウンサー柳川はフランク姿勢ですらつと質問した。

「ええ伺っていますとも、私の長い軍事ジャーナリスト人生でもこういう事は初めてですよ。アメリカの財政だって相当厳しいはずなのに」

柳川キャスターが古賀の苛立ちを悟ったのだろう。場の空気を必至に伺っていた。

多分この男にとって軍事ジャーナリストとしてのプライドを傷付けられた事が相当応えているのだろう。それとも不足の事態を予測できなかった事で自分が許せなくなっているのか……。

そんな古賀の姿を見て柳川がそつと言った

「古賀さん、少し話を変えましょう」

「ええ、いいですとも。私が答えられる事でしたら何でも」

「ここら辺の場の空気を読む力がキャスターの力の見せ所という事か。」

「では質問します、何故今になって自衛隊を軍へと変更したのでしよう？ この徴兵制度の意味するものはなんだと思いますか？」

「それもただの徴兵制度では無いと言うですよね？ なぜこれほどまで年齢の制限幅が広いのでしょうか？」

柳川キャスターのクリアパスが軍事ジャーナリスト古賀へと飛ばされた。そして古賀は軽く咳き込むと先程とは変わって別人の用に真剣な眼差しでテレビの先の視聴者へ訴え始めた。

「皆さん気になっているのは軍への昇格以上に徴兵制度に関してだと思しますので、これを中心に話して行きましょう」

古賀はそう言って重い口を開くと、淡々と話を進めて行った

「まず初めに、日本が、今まで、徴兵制度を採用しなかった事が不思議でありませんでした。日本は世界でも有数の軍事大

国に囲まれているというのに、自国を守るための防衛手段無いと言って良いのですから」

「それは、アメリカなどの軍事大国が後ろ盾してしてくれたからではないのでしょうか？」

「ええ、表向きはそれで間違いないと思いますよ……」

椅子に座りながらテレビを見詰えていると俺の前方、玄関の方から物音が聞こえてきた。

人の足音とかそんなものじゃない、何かが落下する音だ。玄関の扉にはポストがあるはず、音からして何かが入れられたのだろうが、新聞の夕刊は取っていない、取っていたとしても時間が遅すぎる。テレビの内容も気にはなるが、不審な配達物落下物の正体も気になつていた。テレビの音声なんて玄関まで聞こえてくるもんで、話の内容に耳をそばだたせながら玄関の方へと歩いて行く。

やがて玄関のポストに辿り着くと俺は不審な配達物の正体を確認する事にした。本来だったら宿舎に設けられている入口先のポスト群に配達されるはずなのに、今日に限っては直接玄関のポストへと配達されたのだ。

やがてポストを空けると、俺の足元に分厚い重量感が落ちてきた。それは透明なビニールで包まれていたので、一目で赤い本だという事がわかった。

足元に落ちた本を徐に拾い上げる。

……本を持つ手が小刻みに震えていた。  
そして、口が勝手に動く。

「自衛軍入隊案内」

気が付けば呟いていた。

リビングの方からテレビの会話が耳元へと伝わってくる。

「それも一つの可能性でしょう。まあ、世界への牽制、高まるアジア不審への抑止力といった所でしょう」

「では戦争は起こらないと考えですね？」

「ええ、私の意見ですが、それは考え難いと思っています」

アジア不審？ 戦争？ 俺はショックの余り玄関で硬直してしまつた。そのために重要な会話を逃していたみたいだ。

アジア不審は聞いた事がある、大学の講義でやったぞ。原油の高騰で各国はエネルギーの確保に躍起になっているんだっけ。それは

軍事力で大国を潰しても構わないという意気込みで、アジア圏の軍事力は急激に拡大しているとか……。

次第に手の震えは納まり、体温の抜けた冷たい手で、ビニール袋を破ると。赤紙の内容を確認する事にした。

赤紙とは言えないほどの分厚い本を手に持ち一ページずつ慎重に捲っていく。

最初のページには募集要項と書かれており。柳川キャスターの言った通りに対象年齢幅が広がった。

## 自宅にて - 4

今回徴兵の対象となるのは「現在大学その他に在学している高校卒業資格を持つ男女」と書かれていたが。女性の場合は一部例外も発生するらしい。

こんな事をして企業は大丈夫なのだろうか？ そんな事を考えながらページを捲ると、二ページ目と三ページ目には軍隊区分の説明書きがされている。

軍隊の区分は（陸・海・空）と存在しており、各大学の所属学部によって配属される駐屯地が変わって来るらしい。

そして、その事を次のページから始まる対象学校表で確認してくれという事だ。

俺は赤紙の説明書きの通りに対象学校表が書いてあるページを広げる。

その時、赤紙が分厚くつくられている理由を知った。

次のページには東京の大学、そして学部すべてが「あいいうえお順」に羅列されており。玄関という薄暗いスペースの中で字の細かさに目をやられていた。

このまま玄関で学校表を眺めていても埒が明かないと悟った俺は、赤紙を手を持ちながらリビングへと移動する。

その後、本格的に自分の大学、そして学部が何処の軍隊に所属しているのかを確認する事にした。

できる事なら陸軍は遠慮しておきたいものだ。ひとたび戦争ともなれば前線で体を張らなければいけない分けで……。それに、訓練も厳しそうだ。

俺はリビングへと戻ると、ビデオデッキの録画を止めて、テレビもろとも電源を切ると、そのままの勢いでリビング中央にある四脚

テーブルに赤紙を乱暴に置いてから自分の大学を確認し始めた。  
大学・短大・専門の数なんて東京都内だけでも500以上存在しているわけで、自分の大学を見つけ出すのに少ばかりの時間がかかった。

暫くして、自分の大学の名前が目に入ってきた、慌てながら隅の配属先を確認した俺は……落胆した。

配属先は案の定「陸軍」と表記されているじゃないか。

一気に憂鬱になった俺は、もう一度自分の配属先を確認する「自衛軍陸上部隊・特殊科」

ある一文字に目が釘付けとなった。そう、「特殊科」という文字だ。よくよく確認してみると特殊科は俺の学校以外にもポツポツと表記されてあるみたいだ。海軍にも空軍にも書かれている。

例外的に陸軍にのみ存在するという分ではないのだ。

俺は特殊科という言葉が気になり、赤紙内を散策してみたがやはり詳しい説明は書かれていなかった。

そして、もう一度対象学校表を広げてみる、良く観察してみている事に気がついた。

この特殊科にはある法則があつたのだ。特殊科が付く大学は全て、情報系統や通信系統に強い大学で、体育会系や文系の名門大には驚く事に表記されて無いのだ。

「何で俺の三流大学に……」

その後も気にはなつたものの、いくら調べても埒が明かない。

そのまま、ページを捲りながら赤紙を読み進めて行き最後のページへと差し掛かっていた。

最後のページにはスケジュールが書かれていた。

そして、またしても俺は目を疑った。そして思わず声を出していた。

「明日っ！」

徴兵の開始日を確認してみる、確かに同じ年の同じ月、そして翌日の日付でスケジュールが組まれているじゃないか！

スケジュールの始めは六時四五分から開始されていて、俺の平均起床時間よりも五時間も早い……。

無理やりなスケジュールを見た俺の心の中で、ある閃きのものが通過して行く。

「そうだ、バツクレよう」

そんな事を呟きながらスケジュールを読み進めて行く、一番下に注意事項と書かれている部分でまた目が止まった。

目が止まった先の注意事項を読んで俺は先ほどの閃き、呟いた事を後悔していた。

「もし、開始日に部屋にいなかった場合全国指名手配になります」

その他にも色々と書かれていたのだけれど、今の俺にとってはその一言がやけに痛かった。精神的にその言葉は人間の行動を強力に制限していたのだから。

もし実家に帰った場合も全国指名手配になるのだろうか。たぶん今の日本ならやりかねないだろう。こんな急激に軍備を増強し始めてるんだから。

だが俺には未だに府に落ちない点がある、開始が六時四五分なのは良いとして何処に行けば良いんだ？ 寝坊した場合も指名手配になるのか？

そんな幾つもの疑問を、最後の一分が綺麗に& a m p ; # 2 5 6 2 0 ; き消してくれた。

「明日の朝、迎えに行きます」

こんな狂った連中が……明日来るのか……。

急に疲れが噴き出して来た俺は、気がつけば部屋の隅にあるベツトで枕に顔を埋め込んでいた。

いつもと変わらぬパソコンの起動音をベツトに寝そべりながら聞いていた。

そういえば島根は何処の部隊に所属するんだ？

あいつ北海道って言ってたよな。

俺はてつきり島根県民だとばかり思いこんでいた。だから出身地だって聞かなかったんだ。

あつ……まだ、買い物袋からタマネギ出して無いや。

まあ良いか、明日でも……。

気が付けば部屋には一人分のイビキだけが木霊していた。



## 徴兵開始！ - 1

「私を恨むのならお門違いも良い所、恨むのなら脆弱な自分たちの国家を恨みたまえ」

降りしきる閃光の中、俺はイスに座っていた。

折りたたみ式のパイプイスに座る事なんて大学の卒入学式以来だ。他にも俺の周りには大勢の学生がいる、大型のホール内で俺は丁度ホールの中央辺りに座っていた。

ホール、俺の前方には壇上がある、その上には演台が設けられていた。

そして、その演台に両手を突いて、一人の軍服を着た褐色の肌の軍人がマイクへと大声で怒鳴り込んでいる。

外見からして日本人じゃないだろう。褐色の肌をしているというのに英語を使う事もない。悠長な日本語で一万人以上いる学生を圧倒しているのだ。

まあ今の現状を話す前にまず今朝方起きた奇々怪々な出来事を先に話すべきか。

今朝……。

案の定……。

俺の部屋に奴らがやってきた。

宿舎、俺の部屋、玄関から鳴り響く呼び鈴の音に起こされた。

その前にも一度起きているか。親かの電話で一度起きている。だから今日も二度寝って事になるか。

電話を出たとたんに質問攻めだ。聞きたいのは俺の方だっているのに……。

朝の早い時間に鳴り響く、呼び鈴の音はケタタマシく、俺の安眠を妨げる事になった。

寝ぼけ眼で布団から起き上がると、二つ折りの携帯電話を勢い欲広げ今の時間を確認した。

時計はすでに六時半を回っていた。

そして携帯電話の画面上を見てある事に気がついた……。

昨日までは全力で三本立っていたアンテナが今は一つも立っていないのだ。

「圏外……」

ベットの前で慌てふためいていると、呼び鈴のチャイムがもう一度鳴った。

仕方なく圏外になった携帯を玄関の方へ放り投げると、俺は玄関の方へ呼び鈴を鳴らした主を確認するべく移動する事にした。

玄関へ歩いていく。

玄関の扉の向こうから聞こえて来る声に、耳を欹てながら。

声の主は多分男だろう。二人くらいか、何を話してるんだろう。

「ここも駄目みたいですね」

「仕方ないな、扉をぶち破ぞ」

「あっ……」

「どうした？」

「あっやっべー、ハンマーさっきの部屋に置いてきちゃいましたよ」

「何やってるんだ、お前は……早く取ってこい！」

「了、了解しました」

「ハンマー？ ブチ破る？」

俺の部屋の前で一体何が起きてるんだ！

不振な訪問者に慌てふためきながら、玄関の除き穴で外の様子を伺った。

「あつ！ 軍隊？」

部屋の外では、濁った緑色の帽子に迷彩服を着た人影が腕を組んで呆然と立ち尽くしている。

その光景のせいで鮮明に昨日の記憶が蘇って来る。

多分外の自衛軍は呼びかけに応じない為、不審に思い扉をブチ破るべく、仲間にハンマーなる代物を取りにいかせたのだろう。

そんな事させてたまるか。

結局弁償するのは俺なんだろ！

俺は扉を勢い良く開けると、自衛軍の隊員は驚き、その拍子に俺と目が合った。

その直後、目の前の自衛官の真横から声が聞こえてくる。

先ほどの声、聞き覚えのある声だ。

「ハンマー持って来ましたよー、准尉ー」

その声の主はフラフラと俺の目の前まで来ると、大きな溜息をついた。

その溜息の理由が俺には痛いほどわかる……。

そんな事を考えていると目の前で仁王立ちしながら腕を組む、上官らしき男が哀れそうな目付きで部下を見つめながら言った。

「ハンマー…… 必要ないみたいだ」

「ですよー」

少しの間を挟んで、目の前の光景に啞然とする俺へ自衛軍の挨拶が始まった。

「先程は失礼。本日入隊だと聞き迎えに来た次第だ」

「徴兵にきたんですよね」

気が付けばその声に押されて少し頭を下げると、目の前の自衛官達へと質問を返していた。

「ええ、もちろんですとも」

「お前は黙ってる!」

鈍い音が鳴る……。

部下が出しゃばった事が気に食わなかったのだろう、上官は部下目掛けて勢い良く強烈な肘打ちをお見舞いしたのだ。

その衝撃と共に部下の口から濁った声が玄関へ響き渡った。

「度々の非礼を許してくれ。これから軍の重要施設へ案内する、詳しい話は然るべき時にするでしょう」

上官は淡々と喋った。

俺の目の前で今先ほど漫才じみた光景を演じていたというのに、上官の目はまるで笑っていない。

そして、その上官の足元には悶絶する部下の姿がある。

多分この部下の要領の悪さからしてみるに、入隊して間もないのだろう。

「もし、もしですけど……、従わなかった場合どうなるんですか？」  
「あまり良い判断だとは思いませんな」

凄く微妙な空気だった、なんと言うか冷たい感じだ。俺の後ろのフィギュア棚にあるロボット達でさえ凍て付きそうな嫌な空気だ。

「時に正道真一、隣の部屋がここから見えますが。どんな状況ですか？」

「えっ？ どんなつて……」

俺は、上官の一言に誘われて玄関にあるサンダルを履くと、少しだけ外の様子を伺った。

丁度隣の部屋が見えるくらいまで身を乗り出して外の様子を伺ってみる。

上官が言った通り、俺の視界に隣の部屋が姿を現した。そして言葉が失った。

本来なら玄関に取り付けてある物が無いのだ。そう扉が無い！

俺の驚く様を見て上官がまた声を掛ける。

「愚としか言いようがありませんな、あれ程警告をしたというのに。まあ逃がしはしませんよ、軍の情報網は脆弱な警察のソレとは比べ物にはなりませんから」

そう言つと上官は得意げな高笑いを上げた。

「次期捕まるでしょう」

初めから期待なんかしていなかった。志願兵でも良いものを一足飛びに徴兵令だなんて馬鹿げてるじゃないか。開始前から折れていた心からは反骨精神など生まれる訳もなく、気がつけば彼らの誘導に従っていた。

「いやー、君みたいな若者ばかりだと私共も助かりますよ」

「僕は完全に殴られ損ですけどね」

先ほどまで地面で悶絶していた部下が不服そうに上官へと言葉を

吐  
い  
た。

## 徴兵開始！ - 2

そして上官と部下の会話を眺めながら、横目で刳り貫かれたお隣さんの家を確認する。

確かこの部屋には女性が住んでいたはずだ、日陰暮らしの俺に面識が有る訳ではないが、大学で少し見かけた事がある、だから俺は覚えてる。

俺のお隣さんは確か女性のはずだ

やはり女性には今回の徴兵令は堪えたのだろっ、昨日の夜はどんな思いで過ごしていたのだろうか？

色々な思いが俺の頭の中を過ぎ去って行く……。

半ば護送される囚人の様な俺へ、上官が話しかけてきた。

「時に正道、家族への連絡は済ましてあるかね？」

土壇場で変な事を聞くものだと思いながら俺はその質問へと返事を返した。

「ええ一応、昨日の夜に連絡は済ましてありますが……何か？」

こういう不足の場面では親の方がアタフタするもので、昨日の夜だって夢遊ライフを楽しんでいた俺を電話で起こしてくれたんだ。

そして、電話に出た途端に質問の嵐。気がつけば音信普通、俺が質問したいっちゅうねん。

「まあこんな事を言うのもアレですが。一度戦争が起きれば前線に出ている兵士の身の安全は保障されませんからな。連絡は出来る時に済ませておかないと」

「戦争するんですか？」

上官の不意な言葉へ自然と返していた。

それに驚いているのは俺だけじゃない、上官の隣にいる部下も同じく目を丸くしていた。

「うむ、失礼。それも一つの可能性だという話だ」

「脅かさないでくださいよー」

部下が溜息交じりに呟いた。

俺も少し胸を撫で下ろしていた。だが先ほどの言葉はやはり引かかる、こんな場面で可能性の話をするなんて。

それに可能性も確立の問題になってくる、この状況で話をするという事はやはり確立は高いのだろうか？

正直戦争なんてあまり考えたくない。

俺の日常なんて、ネットゲームをやって飯食って、好きな口ボア二メが見ればそれで十分だったのに。いきなり徴兵、更に戦争なんて事になったら絶望だ……。

宿舍を少し出た道路には一台のバスが待機していた。

そのバスを取り囲むように無数の装甲車が駐車している。

そして、俺はというと自衛官に誘導されるがまま今バスの乗車口に居た。

中を覗いて唖然とした。結構知っている顔も居る中、女性の姿も確認する事ができたからだ。

やはり今回の徴兵令には特別な何かがあるんじゃないのか？ 戦

場で女性がどれほど活躍できるっていうんだ。

グチャグチャの思考でこの先の事を考えていると、俺の後ろ、道路の方から先ほどの隊員の喋り声が聞こえて来た。



「ここでの徴兵活動は以上であります」

「うむ、ご苦労。お前は先に戻っている」

先程までおどけていた部下だというのに、ビシッと決まった敬礼を上官の前で見せていた。

その敬礼へ返すように上官も負けず劣らず綺麗な姿勢で敬礼をしていた。

上官は部下が装甲車へと乗り込むのを見送ると。バスの方へと小走りで行って来るなり、バスに飛び乗ると。

まだ乗車口付近に俺が居るというのに、御構い無しといった具合に演説を開始した。

「私は航空自衛隊……。軍の榊生准尉<sup>サカキショウ</sup>だ、第一特殊部隊に所属している。今後縁のある者は度々面識が出てくるだろう。今回は君達のような若きホープに出会えて光栄に思っている。この中から少しでも特殊部隊へ入隊する兵が出てくる事を祈るばかりだ」

急に始まった榊という自衛官の演説にみんな目を丸くしていた。それに言っている事も少し変だ。俺たちはこのバスに乗っている時点で特殊部隊に入隊している事になっているんじゃないのか？

陸上自衛軍の召集のはずなのに航空自衛軍が関与してくるんだ……。いや今自衛隊と言ったか？全く謎だらけだ。

「おい、ちょっと待てよ。いきなり何吹いてやがんだ？勝手に人の日程、目茶苦茶にしゃがって。シャバであつたらただじゃおかねーぞ」

榊の言葉を退ける様に座席奥からも下劣な叫びが飛んできた。見るからにヤンキーだ。あんな奴、俺の大学にいたのか？

そして、そんなヤンキーの発言を皮切りに四方八方から榊准尉目掛けてブーイングが飛び込んできた。

次第にコールは大きくなっていく。

「おい、帰れよ！」

「お願い、私を連れて行かないで」

「今日はデートの約束があっただぞ、どうしてくれるんだ」

混沌としたバス内で今までじつと堪えていた榊が大きな声を張り上げた

「以上で私からの激励は仕舞いだ、諸君の検討を祈る」

その後榊はバスの運転手の肩に軽く手を置いてから一言

「私が降りたら扉を閉めてくれ」と言うと、何事も無かったかのようにバスを降りていった。

降りて行ったのは構わない。でもこの状況をどうしてくれるんだ？ 一人座席にも座らずに榊の隣で啞然と立っていた俺はどうなる？ まるで榊に媚を売っていたみたいじゃないか。

その証拠に他の学生の目が異様に痛い。

そんな俺へ追い討ちを掛ける様にバスの運転手が言った。

「きみ、早く座ってくれないと困るよ。先頭の車に置いてかれちゃうよー」

俺はバスの運転手に言われて慌てて席を探した。そして一番奥の方へ歩いて行くと適当な席を見つけて座った。

俺が座った直後、後ろの方で先程榊へと吹っつけたヤンキーの舌打ちが聞こえた。さらに冷たい視線が俺へと浴びせられ、俺は自分の座席で小さくなる事しかできなかった。

バスの運転手は俺が座ったのを確認してから喋り始めた

「施設までの道のりは二時間くらいを想定しています、途中パーキングエリアなどには立ち寄らないので悪しからず」

呑気な運転手の低い声がバス内を包み込み、やがてバスは走り出した。

道路は装甲車に占拠され、物々しい光景が当たり一面に広がっていた。

目的地を告げずに出発したバスは俺達の絶望を乗せ永遠とも思える運行を開始した。

## 秘密基地へ行こう - 1

バスが走り出してから既に二時間近く、早い起床が聞いて気が付けば眠っていた、蛇の鎌首のように直角に曲がりの頭を擡げると、俺は慌てて外を見た。

既に周りには道路など無く、鬱蒼と生い茂る山道を疾走している。何んてアウトドアなバス何だ……。獣道程の幅しかない細い山道だというのにまるで、怯む事無く一定のスピードを保っていた。

時折枝葉に擦れ、ガサガサと音を立てながら。砂利を踏んで前後に揺れながら進んで居た為に、俺以外の寝ている連中も音、振動に驚くと、寝ぼけ眼を擦りながらゆっくりと起き上がった。

外を見回した所で基地など何処にも無い。それ所か、切り立った断崖の目の前で急にバスは停車してしまった。

バスの運転手は運転席に設けられている無線機を手に取ると何やら連絡を取っている様子、もしかして道に迷ってしまったのだろうか……。

「シグナル・オールグリーン。周辺に不審者並びに不審物の類無し。乗客も健康そのものだ、何も問題無い、正面の入口を開けてくれなにか？」

「通信信号の到達を確認、通信傍受の痕跡は無し。了解した入口のロックを解除する」

電子音が途切れた直後、地の底から響きわたる様な地響きと共に正面からオレンジ色の光源がバス内へと差し込んできた。光源に一瞬奪われた視力が徐々に回復していく。

やがて、差し込む光源へ視線の先を移すと俺は目を疑った。今まで構えていた絶壁はそこに無く、俺の目の前に姿を現した光景は、大きく口を開けたトンネルだ。

どうやら、絶壁は一般人、あるいはテロリスト達に対するカモフラージュの様だ。とはいえ、ここまでして隠す必要があるのか？俺のイメージで言えば駐屯地なんてもの、そこら辺の住宅街にポツンとある施設で、一見してみれば特殊な専門学校とまるで変わらないのに。

「感謝する。これより秘密施設への移送を開始する」

「了解、検討を祈る」

「こちらこそ了解した、中の通路は入り組んでいる上に道が狭い、なるべく慎重に運転するよ」

俺の前方ではバスの運転手が未だ、無線での連絡を取り合っていた。

そして、連絡が終了したのだろう。バスは永遠とも思える絶望への運行を開始した。

暫くの間は直進が続く、周りが思いの外静かな為、漏れ聞こえた無線の内容によれば中の通路は相当入り組んでいると言っていたはずなのだが、なんて事はない。トンネルはバス一台が余裕で通れる程の広さを保ちながら、目的地へとオレンジの光源が誘っていた。

やがて俺達の前に姿を現したのは……行き止まりだ……。

唯の行き止まりではない、赤く光る誘導灯を持つ自衛官が二人行き止まりの前に立っていた。多分彼らが先ほど同様に観客の肝を抜くマジックを見せてくれるのだらうけど。

「学生50名移送を頼まれているはずなんだが」

「あー、ちよっとまってくださいね、今確認します」

運転手に一言告げつと、誘導灯を持つ自衛官の一人が行き止まりの影へと消えて行った。良く周辺を見渡すと、隅っこに扉があるのが確認できた。頭上に照明があるとはいえ、発光量の少ないオレンジの照明では隅々を注意深く観察するには少し役不足だ。

「ナンバープレートの照合が終了した。これからエレベーターを起動する、しばし待て」

俺はこの耳で確かに聞いた、エレベーターという単語を。

これから何が起こるのか間ったく分らない。

今俺達は巨大なトンネルの中に居る、という事は山の中だ、俺の見解が正しいのなら、これからエレベーターを使い山の頂上を目指すのではなかるうか。

俺が、無駄な当たりを付けている最中にも作業は進み、気が付けば二人居た自衛官の姿はそこには無かった。どうやらもう一人も扉の奥へ進んで行った様だ。

やがて、赤い光が一定間隔でバスを包む、けたたましいサイレンの音が周辺に鳴り響くと、バスの退路を巨大なシャッターが塞いだ。四方を壁に囲まれた事と、サイレンの音に赤い回転灯。人間の防衛本能を攪る細工に、少しばかりバス内がザワメキだった。

そして、俺達の不安を他所に、動きだしたバスの地面が沈みだした。どうやらエレベーターが起動したのだろう。

俺の思惑を余所に地下へと進みだすエレベーターは、まるで地獄の淵の様に、俺の心を尚不安にさせた。

## 秘密基地へ行こう - 2

5分近くゆっくりと下降を続けていたエレベータはやがて止まり、今まで薄暗いオレンジの照明から、辺りを覆い尽くす白の照明へと変わった。

前方の二重シャッターが十字を描く様に開くと、その先にはまた道路が広がっていた。とは言え結局のところ空などない、またトンネル続きなのだ。

「どうなってるんだ、ここ？」

「僕の見解が正しいのならココは地下ですね」

「そんなのは分ってるんだよ、東京からそう離れてない山奥の地下に巨大な道路。自衛隊は何時から秘密基地を造ってたんだ？」

バス内は地下にある巨大な道路の話で持ち切りだ、そこら中からヒソヒソ話が聞こえてくる。そんな中で俺は乗車の際の「コマの影響で周りからまるで相手にされないわけなのだが……」。

「この道路少し狭くないか？」

「本当に通れるの？」

思いのほかトンネルは狭く、片側一車線の道路は、バス一台が完全に場を塞いでしまえば、他の車とすれ違う幅すらなかった。時折通路の壁に車体を擦らせながらもバスは徐行気味のスピードで着実に前進して行く。

「おい、何だあれ……」

「ここって……地下だよな」

前方に座る学生達が一斉にザワメキだした、それと同時に中間に座る学生まで、身を投げ出して前方の様子を伺い始めたので、前方の様子がまるで伺えない。

バスのスピードは精々20キロそこそこ、まだ十分も走っていないというのに、もう駐屯地にでもついたというのか？ そんなバカな話あったたまるか……ここは地下なんだぞ、こんな地下深くに建物があつてたまるかよ……。

混乱する乗客を余所に、暫く狭いトンネルを進むバスは地下、巨大施設の駐車場らしき場所で止まった。周辺には俺達が乗ってきたバスと同じ型のバスが何台も止まり。前方には巨大な建物が聳え建っていた。



（三年前）

（三年前）

そこは地下、研究施設内の応接室と言った具合で、二人の男は神妙な面持ちで向かい合い座っていた。

一人は小柄で白髪交じりのボサボサとした頭に白衣を着た日本人。その対岸の席で構えるのは、褐色の肌に軍服を身に纏った男が一人だが日本軍の軍服では無い。

軍人は机に自分が持参した資料を散らかすと、自前の渋く、低い声で、白衣の男へと声を掛けた。

「私はアメリカ陸軍所属マークス中將だ」

「そうかね、マークス中將今日はよろしく頼むとするよ」

「早速、本題に移りますが、先日話した案件は受け入れてくれるのでしょうか？」

すべてはこの軍人の一言から始まった。

「君は確かマークスと言ったね。私は軍事の経験がないから何とも言えないが、この機械達をどうするつもりだね？」

「高島さんは知っていますか、兵士一人が戦場で命を落とすたびにどれだけの資金がかかるか」

「そんな事、私は考えた事もないよ、そもそも日本は第二次世界大戦以降、戦争とは無縁の国だったからね。……無縁にさせられていたと言っべきかな」

高島の言葉を聞いて少しばかり溜息を付くと、マークスは話を続けた。

「階級や地位によって異なるが、最低でも一千万はくだらない」

「それは、また、大層な金額だ。私の退職金より高そうだね」

軽口を叩く高島に対して、マークスの目が少しばかり鋭くなった。

「ああ、すまない」

高島はその鋭い視線に多少なりと、たじろぎはした物の、直ぐ話の方向を元に戻した。

「構わないよ、私にこの施設を任せてくれるのならね。三年後に千台は作ってみせようじゃないか」

「あなたの口からこうも安々と、容認が出るとは思いませんでしたよ。日本人は平和主義者が多いと聞いていたので」

「ロボット開発は幼い頃からの夢だね……」

夢を語る高島の表情はそれ程明るいものでは無かった。

「それに千台ですか、これも凄い」

「唯、問題があるな」

「それはどういった問題で？」

「電力の供給方法、それに操作方式だ。搭乗型は理想じゃないし……」

「電力の供給方法はこちらで検討中の物があるので問題無い。操作方式は出来る事なら人工知能を積んで自律させよと大統領からの御達しだが……」

「人工知能だつて！」

高島は、マーキスの口から出た言葉を聞くと、声を荒げ、目を丸くした。

「私はロボットは作れても人口知能は作れないよ。……専門が丸で違うじゃないか」

「ああ、それはあくまでも理想だ。無理にとは言っていない」  
「そうか、なら良いがね」

暫く話込んでいた二人ではあったが、高島がマーキスの要望に答える形で話し合いの幕は呆気なく閉じる事となった。

マーキスは持参した資料を畳こむと、椅子から立ちあがった。

「今回は大統領に良い報告が出来そうだ」

席を立つマーキスへ向けて、高島は今とばかりに声を掛けた。

「マーキス中将、最後に一つ良いかね？ 軍人としての君に聞きたいのだ」

「なんですか？」

「兵器は何故生まれるんだね？」

高島の意味深な発言に、マーキスは無表情なまま、軽く溜息を付いた。

「それは、戦争抑止力のためではないか」

「ははっ、それは君達の本心じゃないだろ？」

高島は薄ら笑いを浮かべながら、マーキスへ言葉を返した

「高島さんがどんな答えを望んでいるかは知らないが。時に兵器は経済の潤滑油になる事もあるのですよ」

「大統領に報告しなくてはならないので、私はこれで失礼するが、

高島さんはどうなさいますかな？」

「この施設を少し見て行くよ、明日からココで働くかもしれないからね。施設の名前はなんて言ったかな？」

「メルトダウンだ」

「実にアメリカらしい発想だね」

「御託はまた聞きますよ。時間が無いですので、多忙なので私は」

重量感漂う木の扉はその後ゆっくりと閉まった。

ただ一人施設内へと残された男は、応接室にある地上へと繋がる唯一の電話へと手をかけると、慎重に番号を入力した。暫く流れるコールの音の間、ゆっくりと呼吸を整える。やがて、電話の先で女性の声が響いていた。

## 壇上の二人

この施設の名前は『メルトダウン』というらしい、自慢げに話す自衛官達の立ち話に少しばかり耳を傾けたただで色々と情報が零れ落ちてくる。施設内に日本の自衛軍以外にも外人が多いのはアメリカの御偉いさんが態々完成した施設を視察に来ているためとか。

そんな、俺はパイプ椅子に座りこれから顔を出すであろうその御偉いさんの登場を、茫然自失、見守っていた。

自衛官もアメリカの兵隊も肩に物騒なライフルをぶら下げて、鋭い視線を俺達学生へと送っていた。多分下手に動けば直ぐに射殺されてしまうだろう……日本は一体いつからこんな軍事国家になってしまったんだ。

駐車場に止まってから、自衛官に施設内へと誘導された。ほぼ流れ作業的にこなす彼らに抵抗しようとする兵など誰一人と現れる事無く、ダラダラ、誘導されるがまま一列になって、施設内奥のホールへと案内される事になったのだ。

施設の周辺には木々が等間隔で植えられ、地下で日の光など皆無だというのに、葉は青々と生い茂っていた為に、一見して軍の施設など到底考えられない外見だ。

外見に騙されるなどは良く聞く言葉だが、これをどう説明すれば良いのか？ 円計上に聳え立つビルの大きさは凡そ三十メートル。周辺にはグラウンド、更にテニスコートに温室のプールまであるじゃないか……、きっと何処かに体育館もあるのだろう。物騒な面持ちの自衛官やアメリカ兵さえいなければ。出来の良い大学ですんなり話を通るというのに。

施設内に案内されてから直ぐというものの、強烈な二スの匂いが俺の鼻を刺激した。ペンキを塗り替えてからそれほど時間が経過していないのだろう、その事が俺に急ごしらえの施設であるという印象を植え付けさせる事になった。

自衛官に誘導されるがまま、ホール内へ入った俺は目を丸くして啞然とする事となる。

「おいお前、出入り口で止まるな。後が支えるだろ」

「あつ、すみません」

渋滞を予想して吐き出された激が、俺を努突いた。

その事に慌て、急いで前方の列に追い付くと、また誘導されるがまま歩を進めた。

ホールは大きさは思いのほか広く、きっと東京中の電腦系大学から学生が集められてきたであろうホールの席にはギッシリと人で埋め尽くされていた。

周辺からはヒソヒソ話、メソメソ話が聞こえてくる。

実に不気味な雰囲気だ……。

「それじゃ、ここ、横の列15人座ってください」

施設内フル活用で誘導する自衛官の一人が急に人数を数え始めた。肩を軽く叩きながら、頭の中で人数を確認している。

「それじゃ、灰色のシャツの君まで。ココの列に座ってね」

「あつ、僕までですか？」

「そう、君まで！ いそいでね。時間無いから」

自衛官に言われるがまま、前日に作られたであろうパイプ椅子の座席へと俺は座る事となった。座ってから天井を見上げると、まる

で映画館の上映される前の様に天井のライトはオレンジ色の光を一斉に放ち、俺達を包み込んでいる。

俺が列の最後という事もあり、案内された席は中央の通路に隣接していた。

暫くして、全ての席が学生で埋まったのだろう。先程まで誘導していた自衛官達は何所かえ消え複数あつた出入り口はすべて封鎖された。

各出入り口を厳重に守るように、二人組で構える兵隊達は、全員、肩から物騒なライフルを構えている。

だからといってホール内が静かとは限らない。自衛官達の目を盗むように運良く同期の学生や友人と出くわした学生等の話声は未だ止む事がない。

心の弱い学生はあまりにも突発的に起きた出来事に泣きじゃくり。心の優しい学生はそれを宥めるか、慰める作業に追われ。

短気な学生はこの状況に対する鬱憤を晴らすべく八つ当たりを止めなかった。

ホールの正面には壇上がある。壇上には演台が設けてあり、マイクも設置されている事から、この先誰かが演台で演説を繰り広げるのであるう事が容易に伺えた。

それ以上に気になる事に、壇上の隅っこには黒い布で覆われた二メートルくらいの置物が設けてあつたのだ。

本来好奇心旺盛な方ではないのだが、この状況に対し、徐に前方に置かれ隠されている、超物な置物には十分目を魅かれた。

極秘に研究開発した兵器とか……。

流石にそれは無いか。普通なら横に長くなるはずだ。

## 壇上の二人 - 2

暫くして、壇上から足音がした。鳴り方からして一人ではない、複数の足音だ。だからといって大人数でもない、何と云うか少人数、多分二人だ。

足音が徐々に大きくなっていく。

案の定姿を現した二人の足音は特徴的で、地を蹴って音を響かせる皮靴に変わり、ペタペタと惚気た音を出しながらサンダルが後を着けて行く。

そして、足音に皆も気がついたのだろう。今まで周辺から聞こえてきた話声は一斉に止み、一点から聞こえてくる足音を直視していた。

その集約された視線の先に姿を現したのは、皺一つ無い軍服を華麗に靡かせながら、颯爽と姿を現した褐色の肌の軍人だ。その後を小柄の男性が付いてくる、サンダルの弱々しい足音はこの人のものだったのだろう。ボサボサした天然パーマに皺くちな白衣を靡かせながら軍人の後ろに構えて止まった。

皆、両極端に構える二人を息を飲んで見守っていた。

きつと彼らが、俺達を施設へ運んだ経緯を詳しく説明してくれるのだろう……。

「諸君、おはよう。初めましてと言うべきか。私の名前はマークス！ マークス中将だ」

気が付けば褐色の肌の軍人は、演台に設けられているマイクを手に取り、高々と自分の名前を呼びあげた。

その声たるや、マイクを前にしても手加減する気配を見せない大きな声のせいで、俺は自分の耳を慌てて両手で塞ぐ羽目になった。



「マーキス、マイクを使ってるんだ、そんなに強い口調にしたいくても良いと思うんだがね」

「ああ、すまない」

「見てみる、君が大声を上げるものだから、対反の学生は顔を顰めてるじゃないか」

後で構える白衣の男性に半ば怒られながらマーキスという男はまたマイクを手にとった。

マーキス中將が多分アメリカの御偉いさんなのだろう、大声で披露した悠長な日本語のトーンを少しばかり落とすと、また喋り始めた。

先程あった出来事に詫びを入れる二人、それ程若くはない。二人の年齢は大体五十代といった所。小柄な科学者風の男性なんか髪の毛の半分以上が白髪にやられているじゃないか。

「さて、ようこそメルトダウンへ。まず初めに言っておく、ここは軍の最重要機密施設だ、君達がいくら外で口外しようとも全てかき消される」

さて、どうして俺みたいな一般学生が、こんな軍の秘密施設に案内されたのか、俺の心の不安は募るばかりだ。

「諸君は日本国家に売られ、ココに運ばれて来た事を肝に銘じてもらいたい」

トーンを落としたせいか、先ほどより聞きやすくなった、マーキスの断定口調がヒシヒシと突き刺さってくる。俺達の動揺を誘っているとは思えない一言でさえ顔色一つ変えずに言い退けた。

「この国は腐敗しきっている。国会なき国家に、汚職を何とも思わない政治家達。我が崇高なる国家が資金を投じればこの通り、つまり君達は自国に売られたのだよ」

ざわめき返るホール内の空気を感じ取っても直、マーキスの演説が止まる事はなかった。

「私を怨まないでくれよ、私を怨むのは御門違いも良い所！ 恨む

のならば自国の政治家達を怨みたまえ。金に目が眩んだ愚か者をな」  
マーキスと名乗る軍人がい日本を罵倒していたとき、ホール内の  
何所かから、声が上がった。

結構大きな声だ。

「好き勝手言っくな！」

当たり前と言えば、当たり前。

この状況下で今まで野次が出なかった事がおかしいくらいだ。武力による抑止力があるとは言え、それは時に儚く崩れさる事がある。人は常に自由に向かって走る生き物なのだから。

ただ、本心は違う……。

皆、銃器を構える兵隊達が少し騒いだけで射撃をして来るとは誰一人思っていないのだ。

いやはや、平和ボケとは怖いものである。

「お前達がやっている事はれっきとした犯罪だ！」

「人権侵害って言葉を知らないのか！」

一度膨れ上がれば、決壊するダムのように、少しの隙間から飛び出た野次は瞬く間に周りを巻き込み、気が付けば収拾がつかなくなっていた。

出入り口付近で慌てふためく兵隊達を余所に、檀上に立つマーキスは毅然とした態度で、事態の行く末を見守っていた。

暫く自衛官達が事態をどう収集付けるのか伺ったものの。深く溜息をついたマーキスは、自分の腰に腕を回した。

次に彼が、腰に回した腕を見せた時、ホールの天井を付く程にピーンと張った手には、黒光りする何かが握られていた。

そして、徐に引き金を引くと、ホール内に雷鳴と見紛う程の轟音を轟かせた。続けざまに二発発砲した為に、轟音に驚いた学生達は、

騒ぐのも忘れ、混乱のあまり、自分の座席周辺で放心状態になっていた。

「諸君は自分たちの置かれている立場を分っていない、理解していない。君達が日本国家に売られた時点で君達の命は我々

軍が管理する事になった、戦場で野垂れ死にたくなければ素直に耳を貸す事だ！」

拳銃を発砲してからというもの、誰一人としてマーキスの演説を遮ろうとする勇敢な戦士は出現しなくなった。

それを良い事にマーキスは淡々と日本人を罵倒した揚句、そのまま自分の演説は終わるのだという。

「さて、諸君が静かにしてくれて御蔭で私から説明する事もこれで終わる事となった、これより先、施設の説明と具体的に何をやってもらうのかは、高島が説明してくれるだろう」

そう言つと、マーキスは、今まで自分の後ろで微動だにしなかった、白衣の男性を演台へと向かい入れた。

「先程はマーキスが過ぎた事を言った、先に私からお詫びするとして。すまなかった」

白衣を着た科学者風の男は、マーキスに向かい入れられるがまま、演台に立つと、自分の声をマイクへと響かせた。丁度良い声量の聞き取りやすい声で、先程過ぎた行動を取ったマーキスに対する謝罪の為に、彼は深々と頭を下げている。

どうやらやっと真面な人間が顔を出して来たみたいだ。今まで張り詰めていた緊張の糸が少しばかり解れて来るのを感じた。

「さて君達はこの施設が何の施設かわかるかな？」

質問したいのは俺達の方だというのに、周辺を煽るような質問は返って逆効果になるのではないか？ 俺の不安を余所に、今まで静かにしていた学生達がまた少しばかり騒ぎ始めた。マークスが演台から離れ、後ろに下がった事も影響していると思うが。

「まあ、無理も無い話だね。先日決定したばかりの法案に無理矢理付き合わされて、秘密施設、答えを出せる学生を私は見てみたよ」

「おい、いい加減にしてくれないか？」

「そうよ、さつきからまるで核心に迫ってないじゃない」

科学者風の男は、少しばかり咳込むと、マークス同様に自分の腰に腕を回した。先ほどの光景に多少なりともトラウマを覚えている学生達は一齐に静まりかえる。その中には銃声を恐れるあまりに、頭を抱え、しゃがみ込む学生の姿も見受けられた。

そして、高島が次に取り上げたのは、黒光りこそしていた物の、拳銃とは明らかに似て非なる物だ。それを自分の口付近まで近付けると、何やら吹き込んでいる様子。

唯、マイクの影響もあり、内容は丸聞こえなのだが……。

「あー、聞こえるかね？ 私だ、例の物を動かすから準備をしてくれ」

何やら吹き込み終えた科学者風の男は、続いてマークスへと支持を出していた

「マークス、そいつから布を取り払ってくれないか？ サイクロプスを動かすからね」

高島に言われるがままマークスは、今まで檀上の隅っこに置かれていた超物へと近寄った、そして黒い布に手を掛けると、勢い良く布を取り払った。ヒラヒラと木の葉が地面に落ちるように空中を靡く布の合間から、超物の全貌が伺えた。

やがて黒い布は地面へと完全に落ちきると、ホール内のざわめきは一層高まり、その光景を檀上の高島は満足げな笑みを浮かべ見守っていた。

周りが声を上げて驚くのも無理もない。布が落ちた事で俺の目の前に現れた置物は人の形をしていたのだから。不気味な風貌を漂わせ、立ち竦む人型に、皆、幾許かの恐れを感じているのだから。

それに、拳銃の発砲事件の後では無理もない話だ。

俺達を睨みつける様に立つ人型を使つて高島はこれから何かをするのだろう。

銀色に輝く骨組だけのスリムなボディに無数のゴム製チューブを何本も張り巡らせて作られた人型、頭部には透き通った緑色の大きなレンズが一つだけつけられていた。人とは大きく掛け離れた頭、まさに高島の言った「サイクロプス」という言葉が相応しいだろう。

### 壇上の二人 - 3

俺はその人型と壇上の二人を暫く見つめていたが、やがて、高島の笑みの理由を理解した。

今まで、まるで動く気配を見せなかった人型は、腕を起点として、動作を開始する。

壇上のアレはロボットなのか……。

ロボットだとしたら……起動性能はどれくらいなのか……。

冷静に状況に順応しようとする俺を余所に、周りはやはり冷静ではいらなかった様だ。

今まで大きな置物と思わされていた、人型が、急に動き出せばだれだって驚くものだ。恐怖に怯え悲鳴を上げる物や、あからさまなおたく風の男は歓喜の叫びを上げていた。

二極化するホール内の空気を余所に、サイクロプスはゆっくり前進すると、壇上脇に設けられている階段を一步步確実に降りていった。

一步步つぎこちない歩行で、ホールの中央通路へと歩み寄ると、前方を向いて止まる。

「あー、それじゃあ予定通りに。例のプログラムを頼むよ」

高島がトランシーバを使って、また何処かへ連絡を取っている様だ。この人型、ニメートルはあるが明らかに搭乗型のロボットではない。横の厚さがまず薄い、それに加え、人で言えば骨と筋肉だけ故に、腹部はスカスカ、後ろの演台が腹部から伺う事さえできる。

高島がトランシーバでの指示を出し終えたのだろっ、トランシーバをまた腰にしまうと。壇上真下の人型は徐々に行動を開始した。

一步步確実に動く中央通路の人型は、バランス良く左右の腕を振り子の様に動かし始めると、徐々に歩幅と動作速度を速くしてい

った。中央通路からちょうど出入口までの距離は約100メートル、気が付けば、陸上を走るアスリートの様に一直線の通路を全力で走っていた。

機械で造られているというのに、その速さは一目見ただけで、人類が敵う相手では無い事を俺達へと知らせた。

やがて中央通路を半分まで走った辺りで、烈風に靡く一片の羽の様に空中へと飛び上がった人型は、やがて空中で一回転、回り終えると華麗に着地した。

優雅な飛翔に目を奪われたホール内の学生達は、皆息を呑み一言も喋ろうとする者はいなかった。

日常とは大いに掛け離れた光景に啞然としているのだろう。

「どうだね？ 私とアメリカ軍とが協力して開発した極秘戦術兵器、サイクロプスの凄さは」

悪魔に魂を抜かれたが如くに固まる一同に、声高らかに壇上の科学者は吠えた。

「これが今の日本の実力だ、機械兵士とでも言うかね？ 特殊カーボンでコーティングされた骨格に二百四十もの人口筋肉を張り巡らせて作られた、この機械兵士の運動能力は実に人の3倍以上、外装を付ける事により得られる耐久力は銃弾十萬発を食らったとしても壊れる事はない」

「こんな物を見せて……、どうしようって言うんですか……」

自慢げに話す高島の話を守るように最前列の一人が高島へと質問した、高島はその問が大きな波となり襲ってくるのを回避すべく、素早く質問に応じる事となった。

マークスよりは場慣れしているみたいだ。

「良い質問だね、君達にはテストパイロットになってもらうよ。これから試験を受けてもらい適正を判断した上で入隊させるかを決める」

「他にも私に聞きたい事がある人は今の内に聞いておくと良い」

高島は大きな声で周りへの質疑を促した、話を円滑に進める措置だと思ったのだろう。とは言え事態はそう簡単には進まない、下手な質問をすれば何が返ってくるかわからないのだから。

そんな中で、一人の少年が手を挙げた、前列の学生だ。マイクを親切に渡してくれるアシスタントもないわけで、後列の人間が大きな声をだしたとしてもちゃんと届くか分からない、そういった面を見れば前列の人間は質問を投げかけやすい環境ではあるが……。

「も……、もし。テストに合格できなければ家に帰れるんですか？」  
「うむ、こういった発言が出てくるのも想定範囲内ではあるがね。まず、結論から言えつてしまえば採用でも不採用でも君達は家には帰れないよ」

落胆する少年を余所に、今度は一人の少女が手を挙げた。

「これから、試験をやるみたいですけど、何をやるんですか？」

高島に指名され、自分の席で起立し喋る少女の声は実に聞き取りやすかった。それに、この追い詰められた状況だというのに、活路を切り開こうとする姿勢には素直に好感がもてる。

「うむ、良い質問だ。だが私の口からは何も言えない、極秘事項にしておいてくれと横の軍に言われてるからね」

だが、高島の口は思いのほか固く、試験についての情報はあまり期待できそうになかった。それどころか、高島の後ろに立つマークスは「試験」という言葉に対して陰気な笑いを上げていたのだからこのテストには恐らくそれなりの裏があるのだろう。



「テストについては何も言えないがね。一つだけココに来た学生達には共通点がある。それは、皆電脳系の大学に通っているという事だ。君達のゲーム脳を大いに使わせてもらおうよ」

そう言うのと、今度は高島が笑った。

「ゲームⅡゲーム」なのだろうか？

だとすると試験はPCを使ってゲームをする事なのか？

困惑する学生達に向けて高島はまた喋り出した。

「採用でも不採用でも家に帰る事は出来ないが、こちら側が採用した場合、それ相応のメリットはある」

科学者の言ったメリットという言葉に耳が動く。

「もしもの話だがね。本当に戦争になった場合君達の生身での介入は免除される事になっているよ。不採用の場合は各駐屯地に移送され、最悪戦争に介入する羽目になる」

裏を返せば不採用になった場合、生身で戦場に立てって事じゃないか

「さて、他に質問は？ 質問はないかね」

伸びやかな声で高島はまたもや質問を促していた、その声に答えるように数人の学生が手を上げ始めた。きつと二人の学生が無事に席に着いた事で、この男は自分達にとって無害であると認識したのだろう。

\*

高島質疑はその後も長く時間を取られ、続けられる事となった。「生身での介入は免除される」という発言から派生したのだろう」

「どうやって操作してるんですか？」という質問が飛び出て来た。この質問に対して高島の答えはこうだ。

「このロボットは完全な無線操作方式で遠隔操作している。私の前方に立つ彼も例外ではない、彼も遠隔操作だ。パイロット諸君はここから少し離れたコクピット施設でこのサイクロプスを操作してもらうよ」

また「動力源は」という質問もあった、確かにそうだ。バッテリー用のランドセルも見当たらなければ、動力源を詰め込めそうな腹部はガラ空き、胸部のスペースだけでは駆動時間に制限がでるだろう。

「このサイクロプスが画期的なのは、運動能力が人の三倍などではない。そんなもの幾らでも作り出せる。真に力を注いだ場所、それは電力の供給方法だ、現行の機械はバッテリーを詰め込まなければ動くことさえできない。だがサイクロプスは違う、空高く宇宙に打ち上げられた人工衛星が宇宙空間で造り出した電力を、電磁波に乗せて地上の機兵達に供給する。これによって、サイクロプスは無限の駆動時間を得る事ができるのだ」

その後も数多い質問に高島は快く答える事になったが、時間を気にする素振りも見せていた。

腕に巻いてある、金色の時計に目をやると「後は自衛官が渡す施設内の配布資料をみてくれるかね」と言って、演説を絞めた。

## 電送機兵サイクロプス

「電送機兵サイクロプス」機体の操作方法及び存在意義。

サイクロプスの動力源は電力である。それは高島の質疑の時間に自分で説明した事だ。

そして、サイクロプスの駆動方法は空気である。全速力で走るにも、腕の先の十本の指を動かすのも全て空気で動く。空気を送り込む事で伸縮するゴム繊維を使い、人間の筋肉の動きを再現する、その全てを可能にする、メインポンプは胸部に埋め込まれている。

まず初めに電力の供給が開始されると、メインのポンプが作動し空気を生成、その後動作に必要な部位に空気が送りこまれる仕組みとなっている。それにより従来の油圧駆動型ロボットではありえない柔軟性と瞬発力を生み出す事が出来るのだ。

ただ、現段階ではまだ実用に向けての実験段階であるため、クリアしなければならない課題もいくつかある。

クリア課題の一つとして上げる事に、地下での活動について、サイクロプスは関与する事が出来ない。現行ロボットは衛星からの電送でのみ駆動する仕組み故に、地下、あるいはドーム状で覆われた建物の中では衛星からの電力供給が滞るため十分に活動する事が出来ない。

更に、ゴム繊維を可動部に使用しているため、耐熱性能はそれほど高くはない、火炎放射機などの重火器を使用されれば一溜りもないだろう。

以上がサイクロプスの弱点である。

直、今回君達が見たサイクロプスは小型のバッテリー使用で動くタイプ、駆動時間は凡そ十分といった所。

更に、演習施設内でのみ電力供給がなされる演習機も施設内に存在する。

以上

サイクロプ

ス配布資料より

檀上から高島とマークスが姿を消して直ぐの事、試験が開始された、一回自衛官が人の名前を呼ぶ度に、四人の若者が姿を消していった。俺はと言うと、その時間を利用して、皆に配布されたであるう、パンフレットに目を通していた処だ。

「正道進一前へ出る」

俺はその言葉を聞いて、大きく返事をする、俺の名前を呼んだ自衛官の元へと歩を進めた。

何としても、生身で戦場に行く事だけは回避しなければ習い、まだ俺は青春を謳歌していない。どうせ家に帰れないのなら、この施設に残ってやる！

気が付けば俺の中に異様な熱意があるのを感じられた。昔からロボットは好きだ、軍隊だってそれほど嫌いなわけではない、だからといって「戦争をやりますか」と、聞かれて「はい」と、答えるほど呆けているわけでもない。この施設内に運ばれた学生の中で戦争を肯定する人間はきつと一人としていないだろう。

「それじゃあ、みんな集まったみたいなので、行くでしょう。私が先頭を歩くので、皆、私の後ろについてくるように」

屈強な肉体を持つ自衛官は、大きく歯切れの良い声が特徴的だった。気が付けば皆そんな感じが、朝一人だけ例外はあったが、きつと新兵だったのだろう。

「おっさん、これから試験やるみたいやが、いったい何やらされるんかくらい説明してくれてもいんじゃないか？」

「そうですよ、急に運ばれて抜き打ちテストなんて理不尽じゃないですか」

自衛官が先導しようとした時、俺の前に居た連中二人が、自衛官へと質問を投げかけた。半ば囚人の護送風景ではあるが、だからといって、今の今まで、俺達が何をさせられるのかは知らされていないのだ。

「ふむ、確かにそうだ、私の口から説明したい所ではあるが、生憎テスト内容は機密事項。私の口から簡単に口外する事は出来ない」

「なんや、使えんのう」

自衛官の意見は最もである。癖のある口調で、長身の男は悪態を垂れていた。

もう一人、背の小さい、丸メガネの少年も話していたはずだが。返ってきた言葉が期待したものとは違うせいで、かなり落胆した表情をみせた。

俺と一緒にテストを受ける奴にもう一人、黒いフードの少年が居た。黒いフードの影響で陰気に見えるが、実際はまったくわからない。耳にイヤホンを付け、今流行りのMP3プレイヤーでなにやら

音楽を聞いているみたいだが……。

ほの暗い地下施設で……

俺達四人はこれからテストを受ける、内容も知らされていない。出来る事なら内容くらいは知りたいものだが、先導する自衛官の口は思いのほか固かった。

そして、激動のホールに背を向け薄暗い通路を自衛官に先導されるまま歩いて行くと、前方にオレンジ色のエレベーターがあるのが確認できた。

「何や、上にも登るんか？」

「それは違う、これから下に行くんだ」

どうやらこの施設内にはまだ地下があるらしい……。

俺だけじゃない、皆驚きの表情を隠せなかった、ここまで潜って更に地下だ。深くへ潜れば潜る程、心の中の不安が増大していく様だ。

その後、暫くして。エレベーターが俺達の居る階へと到着した。徐々に開くエレベーターに半ば強引に押し詰められると、自衛官は地下の三階のボタンを押した。

「ずいぶん潜るんやな？」

「ああ、そうだ」

「つれないのう。ろくに世間話もできへんのか」

関西弁は軽く舌打ちすると、次のターゲットを探す素振りを見せた。

「あんさんは、大学でなにやってたんや？」

「ん？ 俺ですか？」

「お前しかおらんやろ。俯き顔の丸メガネに、陰気な黒フード、無愛想な自衛官、他に誰に喋れちゅうんや」

どんよりした空気の中、下へと降下するエレベーターの中で若干お喋りな長身は俺に声を掛けてきた。

「俺は大学でプログラム関係勉強してたけど……」

今となつては何の為に目指していたのか分からないプログラマーの儚き夢。それは、宿舎に籠る生活を送り、ゲームに没頭するという現実からの逃避行で遭えなく幕を閉じた。もしもう一度チャンスがあるのなら、徴兵期間が終了した時にでも目指してみようか。

「わいわなー、地質調査を大学で専攻してたんや。やっと単位も取れて、就職先も決まった。そして来年からは社会人やっちゅうのに、この有様や」

「……僕だつて同じ様なですよ」

今まで俯き顔だった、丸いメガネの少年が会話へと参加した。目に涙を溜めていたために、少年の無念さがヒシヒシと伝わってくる。

「今年から夢のキャンパスライフだったのに、こんな事になって……」

「おら、私語は慎め。地下三階だ、着いたぞ」

俺達の些細な思いで話は、自衛官に一喝され儚く幕を閉じた。

気が付けば、エレベーターは口を開け、その先には仄暗い通路が大きく広がっていた。

通路の中心をオレンジのラインが左右に分ち、等間隔に番号の振



られた重圧感漂う扉が並んでいた。一、二、三と続く扉。廊下の照明が暗いせいで、通路の一番奥が見えない。

俺の視界からは三番と扉に書かれた部屋を視界に入れるのがやっとだった。実際何番までこの部屋はあり、仄暗い廊下は何処まで続いているのだろうか……。

エレベーターから足を踏み出す事を危惧する俺達を余所に、頑丈なブーツの音を響かせながら、自衛官は廊下を突き進んだ。

「ぼさつと立ってるな、早く降りてこい」

そう言う、自衛官は三番の扉の前で俺達に声をかけていた。という事は三番の部屋で何かをやるのか？

渋々エレベーターを降りた俺達は、やっと自衛官の後ろに追い付いた。俺の居る位置からは、「六番」と書かれた扉を確認する事ができた。が、やはり、通路はまだ続いているようだ。

「君達にはこれから、三番演習場で採用試験を受けてもらいます」

自衛官は俺達にそう告げると、扉横にある赤いボタンを押した。その動作と連動するように、頑丈な鉄で造られた扉が徐々に開いて行く、完全に開き切った先を見て俺は啞然とした。

演習場、それは本来、兵士達が訓練をするために造られる、仮想の戦場の事だ。敵を模した的があったり、凸凹に作られた荒れ果てた荒野だったりするのが普通だ。

だが俺達の目の前に姿を現したのは、そんな広々とした世界ではない。

直径二メートル程、黒い卵型の大きく得体のしれない機械が十五台あるだけで、とても演習場というには程遠い代物だ。

それに、コクピットにはデカデカと数字が振られているではないか。

1を最初として15が最後か。

そんな中で、数人がこの卵型の機械を弄っていたが、自衛官とは異なる服装をしていた為に軍に雇われた技術者である事は用意に想像できる。

「あつ、お疲れ様です」

技術者の一人が自衛官に挨拶すると、他の機械を弄っていた技術者達も集まってきた。

「次の試験者ですね」

「そうだ、時間も結構押してるから早めに始めてくれるかい？」

「大丈夫ですよ、今調整終わった処なんで」

何やら、自衛官達と技術者が話している。本当にこの演習場で試験をやるのか……。

何をやらされるのかまるで想像がつかない……。

「じゃあ、灰色シャツの君前に来てくれるかな」

「俺ですか！」

この状況下で、徐に俺は技術者に呼ばれた。特に、拒む理由もなく、遭えなく俺は技術者の前に入る事になった。

「ここにある機械、全部サイクロプスのコクピットだから」

「えっ、もしかして俺がアレを動かすんですか！」

「そうなるねー。これからチームを組んで模擬戦をやってもらうんで」

一番と番号の振られたコクピットへと、俺を誘導する技術者は。コクピットの前に止まると、コクピットのハッチを開け、俺の腕を

掴み中へと放りこんだ。

「それじゃあ頑張ってね」

一言、俺に軽口を叩く技術者は、既にハッチの開閉用レバーに手を掛けていた。

なんて、手際が良いんだ……。

「ちょっと待ってください、操作方法だつて説明されて無いのに。いきなり操縦なんて出来るわけないだろ」

度重なる理不尽な行いに気が付けば、自分の口調が強くなっているのに気がついた。

元来、忍耐強い方ではあるが、ここまでされて、黙っている俺ではない。

開閉用レバーに手を掛けたまま、目を丸くする技術者は、俺の言葉を聞いて急に笑い出した。

技術者の予想外の行動に、今度は俺の目が丸くなった。

俺は少しも面白い事を言った覚えはないのだが……。

「あゝ、高島さん、説明しなかったんだ。昨日は俺達集めてリハールやってたくせに」

「え、あつ？ ん？」

「ごめん、ごめん。一通りの操作方法是自衛官からもらった配布資料に書いてあると思うから、それ見てね」

阿呆面で、必死に話しを理解しようとする俺に対して最後の「資料に書いてある」という言葉は痛恨の助けとなる。試験が開始するまでに少しばかり時間があるのなら、資料を見て操作方法だけでも飲み込もう。

「それじゃ、検討を祈ってるよ」

「ありがとうございます」

その後、俺をコクピットに押し込んだ技術者は、開閉用レバーを操作したのだろう。コクピットハッチは電動シャッターながらの重量感ある音を響かせると、俺を完全に外から孤立させた。

技術者は資料に全て書いてある、だからそれを見てもらえれば分かったと言った。だが現状を見てみる。俺は小窓一つ無い黒卵の中だ。光一つ差し込まない真っ暗闇の中で、地が読める人間が居るんだったら俺に教えてくれ！ 今直ぐに……。

俺は、辛うじてコクピットのイスに腰を掛けている。光一つ差し込まないコクピットの中で、これから始まるであろう試験を待っているのだ。

## TSC 始動

コクピットの中に入ってから既に十分程の時間が流れただろう。未だ真つ暗闇の中、俺は自分の周辺に何があるのかは大分把握する事ができた。

技術者が俺を押しこんだ時に見えたのだが、座席正面には確かディスプレイがあったと思。

そして、真下にはキーボードがあった。結局今の所分かるのはそれだけだ。キーボードの左右に何か複数ボタンが配置してあったと思うが、俺の知識では何に使う物なのかまるで理解できなかった。更に時間が流れただろう、俺の頭上でアナウンスが流れ始めた。どうやらスピーカーは座席の真上に設置されているみたいだ。

「それでは、これから皆さんには試験を受けてもらいます。初めに操作説明、続きまして試験のルール説明、最後に実戦という流れになっています」

大層無愛想な女性の声で流れるアナウンスが、これから試験が始される事を俺に告知した。

他の三人も俺同様にコクピットに座らされているのだろうか……。

「では初めにサイクロプスの操作説明からです。以降サイクロプスの名称はTSCと略しますので、間違わないようにしてください」

スピーカーの音源が歯切れ悪く一旦途切れると、甲高いチャイム音がコクピット内に流れてきた。

「テスト・ソルジャー・サイクロプス。TSCの操作方法は私から説明するかね」

次にアナウンスが入った時俺が聞いた声は、先程ホール内で聞いた声だ、印象に残る籠った声は間違える筈も無い、声の主は科学者……。高島だ。

高島がアナウンスを変ったのと同時に、今までまるで反応を示さなかった座席正面のディスプレイが急に動き出した。

駆動音も上げずに動き出したディスプレイに多少驚きはしたが、問題無い、これで少しばかりの光源を確保する事が出来る。

真っ暗だった画面は一面ブルーを押し出し、俺を真っ暗闇から救い出してくれた。

光源としては若干頼りないが、今は文句を言っている暇はない。是で、自分の手元に何があるのかちゃんと確認する事が出来るのだから。

「直、今現在コクピット内は暗闇だと思う。コクピットの照明スイッチは頭上にあるはずなので各自確認してくれるかね」

次に会った時、こいつらただじゃおかねー

そういった情報はもつと早く教えて欲しいものだ。俺はコクピット内で中腰の姿勢を取ると、照明のスイッチを手探りで探した。

案の定、俺の頭上に小さなボタンがあり、それを押す事で、蛍光灯の照明がコクピット内に降り注いだ。気が付けば何処となく懐かしい明かりだ。

これで気兼ねなくサイクロプスの資料を読む事が出来る。

高島のアナウンスの合間を縫って広げた資料には、コクピット内のボタン配置が明確に記されていた。

## T S C 操作説明

### T S C 操作説明

T S Cの基本操作はキーボードの左右に配置された、操作パネルで行われる。

まず左手の操作だ、基本的に左手はT S Cの移動にのみ使用される。

小指 パネルボタンを押している状態のみ歩き それ以外は常に駆け足である

薬指 左へ移動 中指と組み合わせる事で左前に前進する

中指 前進・後退

人差し指 右へ移動 中指と組み合わせる事で右に前進する

親指 跳躍

直、この操作方法はF P S、あるいはT P Sといわれるゲームジャンルに酷似しているが、あくまでも行われる試験は現実に起こっている事である。

壁などにT S Cが激突した場合転倒する恐れがある。T S Cが転倒した場合、バランス確保から起き上がるまでに多少の時間が掛る、更に転倒中は起き上がるまでに一切の操作を受け付けないので気を付けるように。

続いて右手側にある操作パネルの説明である

小指 仲間との通信 パネルボタンを押している間のみ有効

薬指 各種グレネードの使用

中指 兵装固有行動 スナイパーライフルなどが兵装の場合ス

コープを覗き込む

人差し指 トリガーボタン 兵装の使用・射撃など

親指 兵装の変更   メイン・サブの切り替え  
直、視点の移動、照準を定めるなどの行動は、パネル中央のトラックボールで行う。

俺は一通りの操作方法を確認すると、自衛官からもらった資料を閉じた。

丁度高島もアナウンスによる操作説明を終えたみたいだ。結構大雑把に、しかも早口で説明していたため、資料無しでは到底内容全てを理解できそうにない。

「それじゃね、次に君達のプロファイルを作成するよ」

高島はまた喋り始めると、操作説明が第二段階に移った事を俺達にしらせた。それにしてもプロファイルって……。

「プロファイルっていつでも深く考えないでくれるかね。簡単な射撃の癖をTSCにインプットするだけだから」

射撃の癖？ 高島がアナウンスを一度切ると、今までブルーで表示されていた前方のスクリーンが急に切り替った。

映し出された光景は今まで見た事が無い平野で、左右が壁に覆われていた。だが、ココがどういった場所なのかは容易に想像ができた。

甲高いチャイム音がまたコクピット内に鳴り響くと、映し出された画面には白と黒の縞模が描かれた、人を模した的が横一列に並んでいた。

「これから君達には、この的を打ち抜いてもらうよ。私が合図したら、トリガーボタンを押してくれるかね」



やはりそうだ、今コクピットに映し出されたこの映像、間違い無い、TSCが映し出している映像。

俺は、暫し、日本の最新技術に好奇心に駆られていた。早く操作してみた、人としての探究心が心の底から湧き出てくる感覚を感じた。

「それじゃ初めてくれるかね」

高島のその合図と共に、左右から激しい銃声が響き渡った。丸で雷が大地を走るような騒音に、俺は慌てて、自分のトリガーボタンを押した。リズム良く三点バーストで射撃を開始する、俺のTSCは、碌にリコイルコントロールもしないために、的の遙か上を撃ち続けていた。

慌ててトラックボールを転がすと、照準が徐々に下がり、何発かの銃弾が的に当たると、縞模様には虚しく地面へと倒れた。

辺りを包む、大演奏会は、TSCの弾切れで遭えなく終了した。

「さて、私から説明する事は異常だ。次に試験のルール説明だがね」

少し甘かった、人を殺すかもしれない兵器に少しでも浮かれた自分が情けない

銃声にはどうやら人を恐怖に陥れる潜在的效果があるようだ。トリガーボタンに手をかける俺の手には恐怖から汗がベツトリこびり付き、足の膝が面白いくらい笑っていた。

だからといって、ここで立ち竦むわけにはいかない。試験に落ちれば生身で前線、それだけはさげなければならない。生きて家に帰るために。

高島が通信を切ってから、暫くして、またコクピット内にチャイム音が放たれた。このアナウンスで試験の全貌が愈々わかるわけだ

が。

「さて、諸君。高島に変わりテスト内容は私自ら直々に話すとしてよう」

威圧感のる、低い声、間違い無い、今アナウンスを流しているのはマーキス中将だ！

「一度しか言わないので良く聞くように」

よりによってこの声をまた聞く羽目になるとは、出来る事ならもう二度と聞きたくない声をまた聞く羽目になるとは。しかもじつくり聞く羽目になるとは、今日は人生始って以来の厄日だ。

「諸君にこれから取り組んでもらうテストはチームデスマッチ。単純に機体を動かし、相手側よりも先に敵を殲滅すれば勝ち。いたってシンプルなルールだ」

チームデスマッチ、って事は単独で試験を受けるわけではないのか。

「諸君のチームメイトは同じ演習施設に居る四人だ。それに加え今回は諸君の戦闘をサポートするリーダーを一人加える事になっている、まあ隊長になるわけだが、くれぐれも口答えをしないように」

今までの理不尽が嘘のように、試験はそれなりに考えられているものだった。自分一人が個別に試験を受けた場合何処まで動かせるか分からない、下手をすれば碌な操作もできず試験が終了していたかもしれない。

「五対五で行われるチームデスマッチだが、試合は三回行われる。が、三本先取ではない。三回目のラウンドが終了した時点でテストは終了するものとする」

これで、試験前に模擬戦が組まれていたなら他にいう事はないのだが、そこまで贅沢も言ってられないか。戦闘に長けたリーダーを貸してくれるだけでもありがたい。

「直、リーダーのみグレネードの使用が許可されている。諸君はライフル一本で頑張りたまえ」

「爆弾を仲間に当てて共倒れされても困るからな」

どうやら、戦闘スタイルはライフル一本という淡泊なものでリーダーの命令通りに動かせれば良い様だ。

マーキスがルールを説明し始めてから、暫くして、今まで射撃場を映し出していたディスプレイの映像が急に変わった。

次に映し出された映像は、大きくドーム状で、五メートル程の四角い物体が正面に乱雑に置かれていた。

「諸君にはココで戦ってもらう。これが演習場本来の姿だ」

演習場が映し出されると同時に、ディスプレイには訳も分からない、パラメータが存在していた。

「直、私のこの発言を最後に、ブザーが鳴る。そのブザー音が戦闘の合図だ、聞き逃さないよう注意してくれたまえ」

歯切れの悪い、マイクの電源が切れる音が、俺の頭上で鳴った。次にブザーが鳴った時、俺は機体を動かして、戦わなければならぬ。相手はいつたい誰なんだ？ それ以上に、ディスプレイに表示

されたパラメータが気になった俺は、一度畳んだ資料をもう一度手に取った。

## ミッションプラン！

試合数は三回、先取戦ではないので三試合終了時点で試験終了となる。

―試合の制限時間は十分。

勝利条件は制限時間内に敵を全滅させるか、終了後見方の人数が多い方を勝利とする。

機体の耐久力は試験の為体力を作成に最大値を100とする。

敵側からの射撃ダメージは、腕及び足25胴体45頭部80とする。

なおグレネードの類は敵味方なくダメージを与えるため、チームキルを防止するという名目上隊長機以外は実装されていないものとする。

コクピット内には音声通信装置が存在する。

通信装置を利用し仲間とのコミュニケーションを図って戦闘を遂行する事。

リーダーは画面の左上に存在する、味方の位置と地形を把握するのに便利だ。

仲間が戦闘で倒れた場合、画面右上に表示される。

直、誰に倒されたかは表示されないものとする。

今回の戦闘場所は演習ステージとする。

天井までの高さは20メートル。

広さは半径100メートル。

乱雑に配置された障害物の名称はキューブと言う。直径5メートル四方のコンクリート壁で造られた物だ。

キューブを上手く使い戦況を有利に進めていければ良い。

試合開始！

頭の中を尽き抜けて行くようなブザー音と共に試合は開始された。それと同時に演習用のサイクロプスは駆動可能な状態へと移行する。

試験が開始された直後、俺はコクピット内のトラックボールを操作していた。

すると、ディスプレイ内中央に存在するクロスヘアを中心に視点が移動しているのを確認する事ができた。

視点の操作系を確認してから、運動操作の確認へと入る。確認する内容は正常に動くかどうか、ジャンプや全身などの基本的な捜査系統だ。

どんな手を使ってでもこの試験に合格しなければならない、前線送りなんて御免だ。そう言った感情が俺の中に存在するので、おのずと操作系統の確認にも熱が入る。

その俺と一緒に戦う仲間を確認する、俺が奇妙に動いていたのが気になったのだろう。三台のサイクロプスが俺の方を不審に見つめていた。

機械なので見つめているという表現自体当てはまらないが……。肩のところに先ほどのコクピットの型番が書いてあった。

横からTSC302と304。それと、TSC000だ。

隊長機は違う場所で操縦をしているのだろう、俺達のいた演習施設に000のナンバーを持つコクピットは存在しなかったはずだ。

そんな事を考えていると音声通信が俺のコクピット内に飛び込んできた。それと同時にディスプレイ内に特殊なアイコンと通信相手のナンバーが表示される。

「ばさつと立ってないで、さっさと行くよ！」

その通信と共に一斉に三台のサイクロプスは隊長機の方を向い

た。

音声で良く分かる、女性特有の高い声で俺達へと通信を送っている。

声の主、隊長が女性という事もあり、先程までの強い意気込みは消え、多少の不安が心の底から込み上げてきた。

とはいえ、このまま突っ立ってるわけには行かないのだ、今は出来る限り前向きに事を運ばねばならない、なるべく良い印象を与えねばならない。

確か通信用のボタンは右手小指だったはず、説明には出ていなかったが操作説明中に見ていた資料にそんな事が書いてあったはずだ。マイクが何処にあるか分からないが俺は一応右手小指のボタンを押してかコクピット無いで孤独に発言した。

「どうやって攻めますか？」

半ばヤケクソ気味に答える俺の頭の中では、昔見た戦争映画が脳の中で再生されていた。

飛び交う銃弾の雨の中、目的地まで進む兵士達。爆撃で腹の肉が裂けたり、スナイパーに頭を狙撃されたり。

自分がアレになるのはやはり御免だ！

そんな思いだけが、この馬鹿げた戦争ゲームへの参加を表明させたのだ。

他の三人も同じ気持ちである事を祈るばかり。

暫くして、隊長機から通信が返ってきた。

「とりあえず付いて来て、ここに居たら、撃破されちゃうから」  
「了解や！」

俺の他にもう一人から通信が入った。

その音声通信の声は先ほどの関西人風の男のものだった、取り合

えず彼もやる気なのだろう。

通信ナンバーTSC304、関西人は四号機に乗っているのか。その合図と共に隊長機の後を迫るようにして、一列になる形で4台のサイクロプスが移動を開始した。

移動途中、気になる事が一つだけあったので通信を入れる事にした。

「隊長、TSC302が先ほどから動いてないのですが」

「ほっときなさいよ、一々構ってられないわ。私のボーナスが掛つてるんだから」

「なんや、ボーナスって。ワイらそないな物のために戦わされとるんか！ 笑けるわ」

「御金は大切な、学生の君達も社会に出たらわかるわよ」

「この軍隊徴兵も十分社会だと思っんですけど……」

隊長の以降もあり二号機をそのまま置いて行く事になった。

そして、先ほどの通信に参加していたのは俺と四号機の関西人、三号機は俺達の後を付いて来てはいるものの会話を傍聴している形となる。

喋れないのか……。

まあ傍聴、傍観はこういったゲームにはつきものなので対して気にはならないが……。誰が動かしているのかは気になる。丸メガネか？ それとも黒フードなのか？

一番初めにコクピットに押し込まれたのでまるで情報が無いのだ。

「四号機さん、三号機に乗ってる人って誰かわかりますか？」

「一応知つとるぞ、小柄の丸メガネやったと思うが。それと二号機は黒いフードの陰気なガキやったで」

つまり、フードが動いていないって事になるのだろう。そんな情



報が何の役に立つのかは分らないが一応収集しておいて損はないはずだ。

次は敵の情報が欲しいな。

入り組んだキューブの森を移動しながら俺は隊長機へと連絡を入れた。

「あのー、できれば敵の情報が欲しいんですけど、隊長わかります？」

「そうやな、アメリカの演習も兼ねとるって言ってたんや、武装が同じって事はないやろ」

どうやら四号機も同じ事を考えていたらしい。

「ですよ、アメリカ軍が日本のショボイライフルなんて使うとは思えないし」

俺たちの間に答えるように隊長機から通信が入った

「ごめんね、私、軍隊に詳しくなくって。今これ動かしているのも臨時だから」

「なんや臨時なんか、臨時の隊長さん大丈夫なんか？ さっきも金がどうとか言っとったし」

「御金は御金、演習は演習。たぶん此方側の武装と大差無いと思うわ」

「武装系統が同じである事を祈るまでですね。グレネード使えないのも意味分らないし」

「そうや、そうや、これ系統のゲームやったらグレネード三種揃ってワンセットが普通。それをライフル一本ってどんだけケチやねん」

「これはゲームじゃないの、演習よケチとか言わない」

ライフル一本は恐ろしく心細かった。

向こう側が演習だと言う以上、米軍の武装が同じとは限らない。さらに手加減をしてくれるとも限らない。

とはいえ、マーキスという軍人が言っていたように、隊長以外がサブ武器を使えないとしたなら多少は楽になる。

それに今回隊長は臨時だといっていたが、動き方からしてサイクロプスを動かすのに多少慣れているみたいだ。

どちらにしろ一度戦闘が始まってみないとわからない状況に変わりは無いのだが。

「それにしてもこのサイクロプスとやらの操作モチーフがFPSと同じなのは驚きやな」

「そうですね、直観的に動かせるのはかなり良いです」

「おつ、俺以外にもFPSを知つとる奴がいとは驚きやー」

「いやいや、今は世界的に浸透してきてますって」

演習という形であれ戦場である事には変わりはない、そんな俺達の会話に花が咲きそうになった頃、隊長から通信が入って来た。

「私語はつつしみなさい、今物音がしたわ」

シレっとした口調で隊長から連絡が入った。そして、隊長の物音という言葉は一瞬で俺に緊張感を与えた。

「なんや聞こえとったんか、それより物音ってなんや」

「ええ、全部聞いてたは。たぶん物音は足音ね」

「どこら辺から聞こえたかわかりますか」

「話声に紛れてたから位置まではわからないわ。敵の足音だと思うけど、リズムからして歩いてるみたいね」

このステージ内は無音といって良いくらい音がしない。

先ほどからする音といえば、味方機の歩く足音と、陽気な関西弁くらいなもの。

しかも足音は金属同士がすれ合うようにかなりの騒音で、俺達の位置から聞こえたという事は敵側も俺達の足音に気が付いている可能性がある。

「ねえ、私語してた罰として一号機君ちょっと見てきてくれないかな？」

状況を考察している最中に隊長機から俺宛に名指した通信が入って来た。そしてその通信内容に対して返事を返す。

「嫌ですよ、敵のレベルもわからないですよ？」

「一号機君の言う通りやで、こういう時は隊長が体張るもんとかやうんか？」

「だって、怖いじゃない！ あつ、こういう場合ってあれよね。隊長命令っていうのかな？」

隊長の無茶苦茶な発言が宙を舞った、そんな発言に、通路のど真ん中で啞然としていた。

そして、そんな発言でも分かる、隊長は素人だ……。

本当ならそういった発言には反論するべきなのだろうが、今は作戦中、利口に振舞うべきだ。

それに見て来るだけなら少し覗いて帰って来れば良いのだから比較的安全か……。

「わかりました隊長命令ですね、今ちよつと見て来ますから、静かにしててくださいよ」

渋々と隊長命令を受け入れた俺は、キューブとキューブの隙間から辺りを覗き込むようにして見回す事にした。

音の方角を確かめ、ジグザグに配置されたキューブを縫うようにして静かに歩いて行く。  
物音のした方向へと進んで行った。

## 隊長の失態

暫くして、音のした先に辿り着いた俺は、通路をそっと覗きこむ。ただ通路を覗き込むだけの作業、そんな作業なのに、少し機械を動かすだけで心臓の鼓動が徐々に大きくなっていくのを感じた。

その鼓動はコクピットを抜けて通路の敵に聞こえてしまうのではと思うくらい木魂している。

さらに俺が覗き込んだ瞬間に青い機体が姿を現したので、一瞬息がつまりそうになった。

生憎敵は後ろを向いていたので、たぶん俺の事には気が付いていないのだろ。俺は敵を発見した事で隊長命令から解放され、その事をすぐさま隊長達へと音声通信で報告を入れる。

「敵です、発見しました！ 青いのが一機だけ、後ろを向いて立っています」

敵を発見したという居心地の悪さのせいで、俺の声はかなり裏がえっていたと思う。

そんな俺の音声通信へとすぐさま返事が返ってきた。

「わかつわ、すぐそっちに行くから待ってて」

隊長は一言、俺に告げると無線はすぐさま切れた。

そして、無線が切れた事で俺の頭の中で一つの疑問が浮かび上がったのだ。

すぐにこっちへ来ると隊長は言った？ 俺の居る所にあいつらが来る……？ こんな狭い通路に……三台も？

正直考えるだけ無駄だった、不安は閃光が過ぎ去って行くが如くに的中したのだから。

俺の後方から床に金属をすり合わせながら、恐ろしいほどの騒音を上げ、三台の機兵達が近付いてくる。

その騒音でわかる、隊長達は走っている……。

走音は演習施設内で浮き上がるように鳴り響く。

彼らは俺がこの場所に来るのにどれだけ苦労したか知っているのだろうか。徐々に腹が立って来た俺は、隊長達へと通信を入れようとした。

そんな時だ、俺の思い、先手を討つ様に隊長機から連絡が入った。

「あつ、ちよつとどいてー！ー！」

間の抜けた悲鳴が俺の真横から聞こえて来る、その声に驚き声のした方向を振り向くと、赤い機体が猛スピードで俺の方向へと迫って来た。

「へっ！」

気がつけば俺も間の抜けた悲鳴を上げていた、二つの機体は高速で衝突した為に空中を舞い。

そして、重力に引きよせられながら地面へと落下した。

衝突する瞬間に型のナンバーが俺には見えた、確かゼロが三つ並んでいたっけ……。という事は隊長が止まりきれずに俺へ衝突したという事になる。

その弾みで俺は隠れている場所から前方へと弾き飛ばされるように通路に放り出されてしまったというわけだ。

「何するんですか！」

荒々しい声が鳴り響く。

「ごめん、ちよつと操作ミスっちゃった」

「それよりも大丈夫なんか？ 通路に敵おるんやろ？」

俺は四号機の通信内容で、改めて自分の置かれている立場を再確認した。

たぶん敵からは俺の姿が丸見えなのだろう、さらに間抜けに二体も地面に転がっているのだ。

この状況を攻撃しない方が不思議なくらいだ。

俺のサイクロプスも激しくバランスを崩しているらしく直に射撃体勢を取れる状況ではない。

仕方なく、敵の方へと振り向くと、正面の敵は既に銃器を構えていた。

見るにM16のグレネードランチャー装備型。

……とても実践的である。

脳裏に一瞬衝撃が走った。

「隊長機！」

目の前の青い機体が、右手人差し指を少しずつ動かして行くのが確認できた。

そして、その指がトリガーを引いた瞬間に奇妙な音が俺の正面から鳴った。

そんな音と共に勢い良く煙を噴いた丸い物体が俺達の倒れている方向目指して勢い良く飛んで来た。

丸い物体はやがて、俺を通り過ぎると、真後ろの壁に跳ね返り二回ぐらい地面でバウンドして、静止する。

地面でバウンドしたランチャー弾が俺の視界へと帰ってきた時……。

俺の鼓動の高鳴りは既に最高点まで達していた。心臓が口から飛び出そうなくらい、俺の内側からノックしている。

その瞬間、辺り一面が激しい光源に包まれる。

「うぐあっ！」

強烈な光に叫ばずにはいられなかった……。

薄暗いコクピット内が白色で覆われる、正面からの光源だというのに、その明りは強烈で、俺の視力を短い時間奪うには十分なくらいだった。

「ちょっと、どうなってるのよ。機体が動かないわ」

「ホンマやんけ、いったいどうなってるんや？」

やがて視力が戻って来るにつれて、自分のディスプレイを確認する事が出来るようになった。

自分の視力が戻った事で、我に返った俺はみんなへ連絡を入れる。

「左下に体カメラがあるって資料に書いてありましたよ」

「そないな事は知つとんのや。なぜこうなったかを聞きたいんよ」

あの発光が疑似的な爆発になっているのだろう。案の定、俺の体力は0になっている。

次に俺はディスプレイの右上へと目をやる。なぜなら、その試合中にやられた奴等がそこに表示されるからだ。

そこには、思っていた通りに隊長機と四号機の機体番号が書かれていた。三号機は顕在のようだ。

最後尾で構えていたので、直接的な爆発には巻き込まれなかったのだろう。

俺が必至に状況を考察していると、四号機から連絡が入ってきた。

「おい！ 聞いとるんか、何がどうなって、こうなったんや？」

それに続く様に隊長機からも連絡が入って来る。



「なんか、動かないんだけど……」

三台同時に機体が動かなくなったせいか、俺達は混乱していた。そして、俺は自分の中で状況、話の順序を纏めると、隊長達へと連絡を返す事にした。

「敵の武器がM16にグレネードを装備してるタイプでした、さっき発光したでしょ？」

「つまりどういう事？」

「あの銀玉ランチャー弾やったんか……。おたくついとらんない」

四号機のパイロットの発言からは舌打ちまで聞こえてきた。

「隊長機にでも鉢合わせたって事？ 本当に運無いんだから」

そう、煙を噴いて飛んで来た物体はグレネードランチャーの弾だ。発光の仕方からして実際に爆発したわけではなく、光源の照射面積によってダメージが決まる仕組みらしい。

それにしても、一気に三人を倒すほどの威力、脅威である。

俺のはネットゲームの癖で、気がつけばキーボードの「TAB」キーを押していた。

押した瞬間ディスプレイ内に今残っている残存勢力が表示される。

## 赤いサイクロプス

こちら側の残存勢力は三号機と動かない二号機。敵側は五台すべてのナンバーが表示されていた。

更に、残存勢力の画面を見て俺は目を疑った。

「ランチャー撃つたの……隊長機じゃないですね……」

「えっ？　なんで？　隊長機以外使えないんじゃないの？」

「そうや、使えるつちゅう事は隊長つて事になるんやろ」

「ナンバーが違ふんですよ、TABキーおしてもらっていいですか？」

その後、二人は俺の言った通りに「TAB」で戦力を確認したらしく、それを俺に報告し終わると、俺は話の続きをした。

「えつとですね、俺達の全面に居るのは敵側の四号機なんです」

「四号機が隊長なんじゃないの？」

「それは考えにくいな、ウチらと状況が同じやとするなら。敵さんの隊長は零号機になるやろ」

「そんなものの？　もしそれが本当なら敵側は全員重装備つて事になるわね」

「ええ、そうですね。それを今から確認しに行きます」

「どないするつちゅうんや？　わいらもう動けへんやろ？」

「たとえ、動けなくても誘導はできますよ」

俺はそつと言った。たぶん俺の口元は軽くにやけていただろう。この状況下に慣れて来た事もある、それ以上に自分がやられた事でふつ切られた事の方が強いだろう。

「隊長、今映ってる映像って三号機さんのカメラですよね？」

「えっ？ 画面切り換えることできるの？」

「間抜けやな、ド素人が。トリガーボタンで視点切り替えんか」

俺達のやり取りの最中、三号機はずっと俺達の残骸を見詰めていた。動かなくなったサイクロプスを眺めていたのだ。

時間にして一分半、その間も敵は俺達が倒れてる通路より奥に来ようとはしなかった。

その疑惑は、俺の頭にもう一つの電流を流す事になった。

「切り替えたは、こんな機能があつたなんて……」

隊長は、俺達に言われた通りに視点を切り替えてくれたらしく、その事を俺達に伝えてきた。

どうやら移動系以外の操作は苦手のようだ……。

知らないだけか。

「それで、どうしたの？」

「この会話って三号機さんにも聞こえていますか？」

「ええ、問題無いはずよ。コクピット内でのやり取りはサイクロプスを起動させてなくてもできる仕様になってるはずだから」

「それが、どないしたつちゅうねん」

四号機の煙たい声が通信へと割り込んできた。

「敵のリーダーを確かめに行きましょう、少し気になる事があるんです」

「無謀やな、三号機一機で五体相手にどうない立ち回れっちゅうんや。挟まれたら終わりやで」

「立ち回りの心配はありません、これ以上敵は攻めてこないですから」

「言ってる意味が分らないわ、その根拠はどこにあるのかしら」

「根拠なんてありませんよ。ただ感というか、そんな感じがしたんです」

「まあ三号機君しだいなんやろな、無謀な感を信じるんも。それに敵の戦力は確かに気になるところやし」

「そんな事許せないわ、隊長として断固拒否します」

隊長は以外にも俺の提案を拒否する姿勢を見せた。まあ無理も無い話なのか……。隊長という手間、仲間一人の命であっても犠牲にする事はできないのだ。

だが、命というのであれば俺達にだって言い分はある。訳も分らず適正試験に参加させられ、試験に落ちれば即駐屯地移送。その後戦争ともなれば俺達の命は戦場で保障されないというじゃないか。

「隊長、俺達にも命がかかってるんです、隊長にとつてのボーナスと同じくらいに、駐屯地に行くのはゴメンです！」

気が付けば、通信を出していた。

そして、その通信内容にすぐさま隊長は返信を返してくれた。

「仮に、私がOKを出したとしても三号機君がOKするとは限らないわ。それに彼喋れないし」

「なんや。三号機君から承認を得れば良えんやな」

「どうやって取るつもりよ？」

「隊長はちよつと黙つとき、今回やられたのだって元はと言えばあなたのせいじゃないか。その非を責めない一号機君は大した奴っちゃで」

四号機の発言を最後に、その後隊長からの返信は返ってこなくなった。コクピットの中でシヨゲているのだろうか。

「隊長は、三号機さん次第と言いました。でも、付いて来るだけの彼をどうやって喋らせるつもりですか？」

「付いて来る事ができるんわ、スピーカーが生きてる証拠や。それなりに説明すれば合図地くるらいはもらえるんとかやうか」

そう言うと、四号機は三号機へと名指しで通信を入れた。

本当に四号機のパイロットが言うとおりに、スピーカーが生きていたのであれば、この時点で何かしらのアクションは欲しい所なのだが。

俺達の話している間も三号機はその場を動く事をせず、俺ら敗者の残骸をじつと静観していた。

話し合いの最中も敵の足音はすれども、三号機の居る通路まで来る様子はない。

「そいじゃ始めるぞ。良く聞いとけ丸メガネ、作戦に同意する場合は上下に視点を動かすんや。嫌な場合は、左右や」

四号機の提案は恐ろしく単純なものだった。その発言にあっけに取られていたが、考えてみれば恐ろしく効果的な通信方法ではある。まあ、聞こえている事が前提になるのだが。

その後、暫くの沈黙が続いた。やはり音声は届いていないのだろうか？ そんな状況に隊長が痺れを切らした様子で、通信を入れた。きた。

「ちょっと、いつまで待たせるのよ？ ラウンド終了まで後1分も無いわ」

「やっぱ、無理なんですかね？ コクピット壊れてるのかも」

半ば諦めムードだった、やはり三号のコクピットには重大な欠損がある、俺はそう思い始めていた。

そんな時だ、三号機の視点に合わせているはずの画面が大きく上下に動いたのだ。

そして、その状況にいち早く気が付いた四号機がすぐさま通信を入れた。

「なんや、やっぱ聞こえ取ったんか。わいは信じてたでー」

上下に動いたと言う事は、作戦に同意したという事なのだが。なぜ合図を返すのにこれ程までの時間がかかったのだろうか？ 多少の疑問は残る……。

「見たか、隊長決まりや。はよ支持ださんか！」

「えっ、ええ。わかったわよ。で、どうすれば良いのかしら？」

隊長の発言から聞いてもわかる、突然の状況に隊長は動揺を隠せない様子だ。

「いいですか、このままの通路を進んだらだめです、中央突破で行きましょう」

三体の抜け殻を前に、最後の兵員であろう三号機は啞然と立ち尽くしている。

今や最後の兵員、三号機、彼がこの状況で敵に倒されたのなら、その時点でブルーチームの勝利がほぼ確定するのだ。

そんな状況下で四号機の通信が入ってきた。

「丸メガネ、今体力どれくらいやねん、画面右下に書いてあるやろ」

四号機の必死の発言は、虚しく中を舞った。やはり聞く事はできても喋る事はできないらしい。

「やっぱり無理なんか」

四号機の発言が終えて直ぐ、隊長から通信が入って来る。

「いい。さつき、一号機君が言ったみたいに中央突破で攻めるからね、通信聞いてたんならキビキビ動く！」

その隊長の声を聞いたのだろう、また三号機の視点が上下に振れるのを確認できた。納得したって事なのか。

やがて、二号機は敵が居る角の通路から離れ、中央一本道を選ぶと、軽快な足音を響かせながら通路を突き進んでいった。

途中キューブの隙間から米軍ライフルを持った青い機体を確認する事ができた。

咄嗟に、肩に書いてある型番を確認する、やはり先程の奴とは違う型番だ。

続いて銃器の先端を確認すると案の定グレネードランチャーが換装されていた。

やはり敵の戦力は俺達より遥かに有利なのだろう。素人相手に容赦の無い……。

敵も三号機の赤いサイクロプスに気が付いたのだろう、三号機目掛けて銃器を構えた。だが、三号機がすぐさまキューブの影に身を隠した為に発砲して来る事は無かった。

俺はその光景の一部始終を観察すると、全員へ通信を入れた。

「やはり変ですね。敵側が一定以上の地点から攻めて来る気配があ

りません。それに先程同様隊長装備でしたよ」

「ほんまかいな。一号機君はよう見とるなー全員グレネードって事かいな」

「なんとも言えないですけど、そうなると思います」

俺達の会話中も三号機は隊長命令を忠実に守り、中央を前進していった。

やがて80メートルほど前進した時だろうか、ようやくキューブの森が終わりを継げ、正面にブルーチームのスタート地点を目視できる距離まで進む事ができた。

「ここまで来たのは良いけど、この先どうするつもり？」

俺が三号機の視点で周囲を確認していた時だ。今まで黙り込んでいた隊長から通信が入って来た、そして、俺は咄嗟に隊長へと返信を返していた。

「ええ、ここまでは想定内です。問題はここから先……」

俺が喋っている間も三号機は周囲に敵の気配が無いかをキョロキョロとカメラを動かし観察している。

そんな中、三号機は何を思ったのか、ブルーチームのスタート地点へと歩を進めたのだ。

「もし敵がいなければバックアタック……。ちょっと待って！」

それは迂闊としか言い様が無かった。ノコノコと敵の陣地へ歩き出した三号機のカメラは、左右を見渡すように動いていた。

そして、三号機のカメラは敵陣地の右角へと向いた時にある物体を映し出した。



それはとても青く、自分達の陣地だというのに片膝を地面に付き、小さい姿勢で構いるのだ。

俺が青い機体のナンバーに気がついた時には、敵の機体は自分の獲物に指を掛けていた。

咄嗟にナンバーを確認する。

隊長と同じ0ナンバーだ。

俺は慌てながら右小指のボタンに手を掛けて、通信を入れようとした。

そんな時。

スピーカーから乾いた銃声がコクピット内へと響き渡っていた。

誰もがトラウマを覚えるような重く突き刺さる音。そして、銃弾を食らった三号機の機体は、遙か後方へと突き飛ばされる。

今まで捉えていた青い機体が点の用に小さくなって行く、その後三号機の機体は地面でバウンドした為に、画面がグラグラと揺れた。その後、暫くして三号機は動かなくなった。

## ラウンド1 終了

気が付けば20メートル、その距離を一発の銃弾が走った。避ける動作も間に合わず、猛進する銃弾の直撃を受けた赤い機体は遭えなく空中を舞ったのだ。

倒れてもなお三号機の視点は青い機体を捕らえながら。肩から腕に掛けて持たれてい獲物を映し出していた。それは、今まで見た日本軍のライフルとも、米軍のライフルとも似て非なる物だ。形状からして見るにスナイパーライフルか……。

絶望的な状況に四号機の通信が飛び込んで来た。

「クソキャンプかいな！」

「何よアレ……」

「スナイパーライフルですね、型まではわかりませんが」

「なんや知らんのか、あの先端のマルズブレイキ、そして黒いオートマスナイパーは間違いない、バレットやで。」

「そんな名前なんですか？ 結構詳しいんですね」

「まあな、兵器関係は好きなんよ。あれは米軍正規採用の超長距離砲や！ 人なんか食らったら、一瞬で真つ二つやで」

「でも超近距離で使ってたわよね……」

「本来なら伏せた状態で使うのが定石やねんけど、あの様子なら型手持ちもできそうやな」

「本当に手加減無いんですね……」

「私のボーナスも無理みたい……」

「それにしても、スナイパーのキャンパー程厄介な相手もないですよ。敵も追ってこなかったんじゃないみたいです。中央におびき寄せて隊長機がそれを狩る、そういうフォーメーションだったみたいです」

そんな俺の発言を返すように、隊長から通信が入った。

「気になる事ってそういう事だったの？」

「戦力が分かっただけで十分です。次に備えましょう」

「そやかて、スナイパー倒すんにわ同じくスナイパーライフルが必要やで」

「そんな手強いものなの？ 近距離なら私達に武がありそうだけど？」

「無理や、銃器の中でスナイパーライフル程舜殺に適した武器は無いんや」

「そうですね、アサルトで性格に撃って0・5秒時間がかかるのに対して、相手型はプロ、コンマ0・1秒で撃ってくる弾は対処できませんよ」

「本当に絶望的じゃない……」

「それに……。ライフル一本しかもバーストの制約付きじゃ武が悪すぎます、どうにかならないですか隊長？」

「こんなに戦力差があるなんて私も聞いてないわよ！」

混沌とした会話を割くように、スピーカから大音量のブザー音が流れた。その音を確認してディスプレイ画面上部の制限時間を確認すると、0が四つ並んでおり、その文字の羅列は俺達に試合の終了を告げていた。

そして、そのブザー音と共に今まで三号機の主観だった画面が真っ暗になった。

画面が真っ暗になって一拍の間も許さぬ内にアナウンスが流れる。そのアナウンスの声は米軍中将マーキスの声だった。

「諸君、次のラウンドは五分の休憩の後行われる、味方側との通信は生きているので各自作戦を練るもよし休むも良しだ」

その後低い高笑いと共にアナウンスは終了した。

マーキスの高笑いを聞いている内に敵に倒された悔しさと、状況に対する理不尽でムシヤクシヤして来た俺は、気が付けばコクピットの外壁に拳を打ち鳴らしていた。

思いの他外壁は固く、骨に来る痛みだけが虚しく残る事となった。演習も兼ねているとは聞いていたものの、これ程まで戦力差があるとは、せめてグレネードでもあれば状況は変わってくるのに……。

俺はそんな事を考えながら深く椅子にもたれ掛かると、コクピットの中では大きな溜息だけが木魂していた。

はたして第二ラウンドはどうしたものか……。

## 二ラウンド目 開始

マーキス中將は五分間の休憩を取るといった。

この五分という短い時間を作戦会議に回せとっているのだろうが、正直今の状況で次の作戦を考えるだけの心の余裕が俺にはなかった。

何せ武装の差が大きすぎる、ライフル一本だけじゃやれる事が限られている。

俺が、コクピット内で頂垂れている間、隊長達はと言うと終始四号機パイロット言い争いだ。

「誰のせいで負けたと思つとんのや」

「私のせいだつて言うの？ 付いてくるしか脳が無いくせに」

正直そんな言い争いなんか構つてる暇なんかなかった。

「うるさいんですよ！ 少し冷静になってください」

適正無とみなされたら駐屯地に輸送されてしまうこの状況で、この人たちはどうしてこんな風に呑気なんだろう……。

俺は二人の言い争いを割くように俺は通信を入れた。

「次どうやって攻めますか？」

俺が会話に参加すると、先程まで言い争っていた二人の会話はぴたりと止む。

「あー、君決めても良いんじゃない？ 四号機君じゃ当てにならないし」

そして、返ってきた言葉は投げやりだ応答だった。

「賛成やな、隊長の作戦じゃ、また事故るだけや」

そんな、協調性の無い発言に俺は半ばあきれ返っていた。とはいえこの状況下で何も言わないのも惜しい、そう思い俺は作戦プランを提示した。

「それなら、各自バラバラに攻めた方が良いんじゃないですかね。多少は勝つ見込みがあると思いますよ」

正直また見方の激突を食らっても困る。それに、固まって移動したところで、グレネードを一発通路に撃たれれば、それだけで全滅しかねない。

「せやな、ならワイは自由にやらせてもらうわ」

「そうね、私も自由にやらせてもらおうかしら」

以外にも作戦はあっさり受け入れられ、第二ラウンドは各自の判断に委ねる形となった。

「決まりですね」

「決まりやな」

「ちよつと待って……」

「なんや、隊長？ まだ何かあるんか？」

「二号機に乗ってた人、リタイヤだって……」

隊長の口から思いも掛けない言葉が発せられた。

「今、本部から連絡が入ったんだけど。戦闘に参加する意思を見せなかったから、コクピットから降ろされたみたいよ」

「えっ、じゃあ二号機はもう動かないんですか？」

「多分そうなると思うわ」

「なんやそれ、せなら本間もんの隊長でも連れてけーへんか」

「何よそれ、私じゃ不服みたいな言い方じゃない」

「今頃気付いたんか！」

四号機の発言の後、何か鈍い音がスピーカーから流れてきた。その音を最後に暫く無言の時間が流れる。

といよりは、鶏冠に触れた隊長にこれ以上関わりたくないというのが本音だ。

まあ、それ以上に気になる事が二つ程あるのだが。

一つはリタイアした場合どうなるのかという事だ。これは機会があれば隊長に聞いてみるとして。もう一つ、重要なのは、三号機の扱いだ。

隊長達みたいにもともに連絡を取り合えるわけでもないのに、如何せん対応に困る。

首を振る事で一応の合図は取れるものの、気を使っている間にグレネードだ……。

考える時間も過ぎ去って行き、休憩時間の終了間際、真っ暗だった画面がスタート地点の映像を映し出した。映し出された映像を見た四号機から興奮気味に通信が入ってきた。

「おー、もどってるやんけ」

「当たり前でしょ、このシステム作るのにどれだけ労力を使ったと思ってるのよ」

俺達の操縦しているサイクロプスと呼ばれるロボットは、一ラウンド同様、奇麗に整列してスタート地点に並んでいる。

肩に書いてある番号が同じという事は、俺達が操縦しているＴＳ  
Ｃは先程と同じ機体という事になる。

俺の考えはかなりの確率で的中しているだろう。

三号機の腹部には先程の戦闘で出来た銃痕がクッキリと残っており。銃弾との摩擦で出来た丸い黒ススの痣を腹に抱えているからだ。本当に容赦の無い事だ。生身の人間なら今頃、下半身と上半身が分裂している所だろうに……。

それ以上に恐ろしいのは、このサイクロプスと言われる機兵の方か、対戦車用ライフルの重いブローを食らっても、ヘラヘラしてやる……。世界にこんな技術があったとは内心驚きだ。

世界の最新技術に関心していた俺は、先ほどの隊長の一言が少し気になっていた。そして、その気になる事を聞くために隊長へと通信を入れる事にした。

「隊長って開発者が何かだった……」

俺の発言と共に、甲高いブザー音が鳴り響く。

そのブザー音は俺の発言を遮断し、第二ラウンドの開始を俺達へと宣言していた。

やはり、皆は俺の発言を聞き洩らしたらしく、開始早々四号機のパイロットから通信が入ってきた。

「そいじゃ、ワイは左隅から攻めるは。ついて来るんわ構わへんけど、邪魔だけはせーへんといてな」

その発言をし終わると、四号機は左隅のキューブへと移動を開始した。

続く様に三号機も四号機が移動していった左隅へと移動を開始する。半分以上まで追い付いて俺と隊長の立ち尽くしているスタート地点を見返すと。また、四号機の方へと走って行った。



銃撃の影響なのか、心なしが移動が少しフラフラしている様に見えたが、気のせいなのだろう。四号機号が完全に通路に入っただのを見届けてから俺も行動を開始した。

「了解。俺は右隅から攻めるよ、隊長も一緒にどうです？」

「えっ！？ 良いの？」

「あんまり気にしないでください」

この機会しかない、いままココで聞くべきだ。

「隊長って開発者が何かだったんですか？」

その質問に隊長は快く答えてくれた、自分が話題に乗った事で浮かれているのだろうか？ それとも一ラウンド目に起こしたヘマを帳消しにしたかったのだろうか。

「うん、そうよ。ココの責任者の助手をしているんだから」

隊長は自信満々に答えていたのだが、結局の所助手なのである。

出来る事なら開発者から直接話を聞きたかった所ではあるのだが……。

「えっ、助手をやってるんですか？」

嫌味っぽく通信を返すと、俺の意見に続く様に四号機からも連絡が入った。

「そうや、そうや、こんな変な実験に無理矢理参加させやがってからにー、オレの内定返せや、コラッ！」

「ごめんね、最初はこんな事の為に使いたくなかったんだけどね」

四号機パイロットの激しい口調に負けたかのように急に隊長の声のトーンが下がった、先程の自信は何処に行ってしまったのだろうか。

「そんなのは、どうだってええねん。問題は結果や結果、結局こないな事に使われとったら無意味っちゅう話や」

確かに四号機の意見にも一理ある。

そして四号機のパイロットが話を続けようとした時だ。四号機の無線の奥から銃声らしき音が聞こえてきた。

銃声の音はリズムよく二回鳴った。そして、聞きなれた日本軍のライフルのバースト音が続けて聞こえてきた。

一連の音から判断するに、四号機側は交戦中みたいだ。

「ちい、三号機がヤラレよったで……ドクソが！」

敵側の射撃制度はかなり高いらしい。ライフル弾二発で一体を倒すには二発とも頭部に当てる必要がある。四号機側の状況が掴めないのも何とも言えないが、敵側は射撃制度を上げるためにバーストも解除しているみたいだ。

「今は隊長を責めるの止めた方が良くないんじゃないですか？」

俺は一言、通信を入れると。軽い舌打ちの後に四号機からの無線連絡が止んだ。

隊長からの連絡もそれで降無かったので、ロボットの足音だけが不気味にスピーカーから木霊した

## 二ラウンド目 終了

右のキューブを進んで45メートルくらいだろうか。

前方から不気味に聞こえて来る、金属音に気が付き俺達は足取りを止めた。気が付けば一ラウンド目にグレネードを食らった通路の前で立ち止まっていた。

状況から判断するに、この先に敵が居るのは明らかだ。二機で先手を打てば余程の事が無い限り倒される心配は無いだろうが。

「隊長、この先敵がいるので気を付けてくださいね」

「わかったわ。敵を見つけたら照準を合わせて……どれだったっけ？」

「右の人差し指です」

俺は隊長に通信を入れると、合図を出し、敵が居ると思われる通路へ勢い良く飛び込んだ。

案の定、青いTSCがライフルを構えて立ち尽くしていた。機体の数は一機、ナンバーも前回と同じ。俺が出て来るのを待っていたかのように、グレネードランチャーのトリガーを握っている。

俺はその姿を見て占めたと思った。この状況、この近距離、遙かに俺達が有利だ！

俺は急いでライフルを構える動作をみせると、その光景に焦ったのだろう青いサイクロプスは大慌てでグレネードからライフルへと武器を切り替え始めた。

俺は敵が武器を切り替える前に射撃を開始する。

右側の人差し指に付いているトリガーボタンを押すと、ライフルは綺麗な銃声を三回連続で鳴らし、九発の弾丸は波となって敵のサイクロプスを襲った

俺が射撃を開始してすぐ、隊長の援護射撃がも入って来た。

正直期待はしてなかったが……。

案の定、碌にリコイルコントロールもしない隊長の射撃は、俺の後ろで遙か上空を撃ち続けていた。

トラックボールでの射撃はやはり難しい、それに加えて三点バーストだ。

九発撃つたというのに敵の腕と足に一発しか当たらないじゃないか。

こんなはずじゃなかった、俺は焦っていた。

いくら撃つても埒が明かない。

弾が敵に当たらない。

何よりも焦る原因となったのは時間が経過しすぎている事にある。武器変更の最中に倒す算段が。敵はすでに変更を終え、俺達へとライフルを向けているじゃないか。

そして、二発単発でトリガーを引くと、吸い寄せられるように、敵の弾は俺の機体の頭部へと当たった。

金属音が二発分木霊した

さらに続けて二発……。

暫くしてディスプレイの右上に俺達の名前が表示されるのに時間はかからなかった。

その直後、四号機から通信が入る。

「おっつー、大変やったなー」

どうやら左側を攻めていた連中はすでに全滅していたようだ……集中していて全く気がつかなかった。

今回も全滅、このまま行けば三ラウンド目も全滅するのは火を見るよりも明らかだ。

「隊長、これ動かすの始めてでしょ？」

苛立ちが隊長へ唐突な質問を投げかける。

「そつ、そんな事ないわよ！ さっきだってホールで動かしてたんだから！ そりゃー、戦闘は初めてだけど。あなた達よりはキャリアあるわよ」

隊長の話だところなる……。

先程のホール内でサイクロプスのデモ機を動かしていたのが隊長なのだと……。

空高くジャンプして格好良く宙返りをしたのが隊長なのだと……。

更に乱れぬ直立姿勢で着地したのが隊長なのだと……。

「あれ動かしてとったの隊長やったんか、偉い格好良く決とったなああ言う動きワイらも出来へんのんか？」

四号機の意見は最もだ。

最初のラウンドで動作確認をした時の事だ。移動速度やジャンプ力を確かめてみた。

だが速度はデモ機に及ばず。ジャンプ力ですら2メートル前後だ。それに引き替え、デモ機は凄かった。目測でもわかる、デモ機は駆動面で演習機の二倍程の性能があるんじゃないのかと思えるくらい、軽快に動いていた。

「ああ、あれね。演説の時はプログラムで動かしていたからできたのよ」

「プログラム？」

「……この機体も、プログラムで動かす事って可能なんですか？」

「ええ、勿論可能よ。物は全部同じはずだから」

隊長はシレッと言い放った。  
可能だと。

そして隊長のその発言を最後に甲高いブザー音がコクピット内に響き渡ると、瞬劇の二ラウンド目が終了したのだ。

その後マーキスのアナウンスがコクピット内に流れ、先程同様五分間の休憩が取られる事となった。

隊長はこの五分という短い時間を利用して俺達に特殊プログラムの説明をする事になった。

## 作戦会議

隊長から一通りの説明を聞き終えた後、暫く無言の時間が流れる。本来サイクロプスにはリミッターがつけられており、プログラムを使用する事でリミッターを任意解除する事が出来るようになってるらしい。

大体の起動性能が二倍になるという事で、普段のジャンプ力が2メートル強なら4メートル以上まで飛び上がる事が可能なのだという。

無言の空間を切り裂く様に隊長から通信が入った。

「で、どうするの？」

「隊長、このキューブの上って登れないですかね？ 確か5メートル四方だって言っていましたよね」

「うゝん。流石にキツイかもしれないよ、ハイジャンプでも4メートルくらいしか飛べないから……」

やはり、隊長の発現は厳しいという物だった。二倍そこそこで届く距離ではないらしいのだ。他の方法を考えるべきか。

「解りました、他の方法を考えま……」

「あつ、ちよつと待って。登れば良いんだよね、少し考える時間くれないかな？」

「ええ、それは構いませんけど」

その後隊長は通信を切るのも忘れて考え始めたせいで、俺達は休憩時間中隊長の念仏

じみた独り言を聞く羽目になった。コクピット内に奇怪な言語が

飛び交い、遙かに理解できる範疇を超えていたので、何に突っ込みを入れたらいいのやら……。

無線ぐらい切ってくればいいのに……。

「何やつちゅうねん、あーウザいわ……」

「隊長に聞こえたら大変ですよ。推薦で前線に移送されるかも」  
「あつあつ、そら大変やわ。少し静かにしとくかいな」

隊長が念仏を初めてから早二分くらいの時間が経過しようとしていた。今だ隊長の中で良案が出ているわけでもなく、今だ独り言はコクピット内に木魂していた。

「ノイローゼになりそうやわ。マーキスと良い、高島ちゅう科学者と良い。この施設内には真面目な人間はおらんのかいな」

「そんな事言わない方が良いんじゃないですか？ 隊長だって俺らの為に考えているんですから」

「せやかて……」

「でもあれかー。Rコマンドを使ったら壁に激突するし」

「Hコマンドだけじゃ届かないし……」

隊長が考え始めてから、見る見る時間は経過して行き、今までブラックだったディスプレイの映像がスタート地点の映像を映し出した。

「何や、もう五分たったんかいな」

「隊長、答えはまだ出ませんか？」

結局時間内に答えは出なかったらしい、俺はその事に焦りを感じながら、隊長を呼ぶ声のトーンも次第に大きくなっていった。



「体長！」

俺は三回ぐらい大きな声で隊長を呼んだらう。

三度目でようやく気がついたらしく、今まで念仏を唱えていた隊長が正気に戻った。

「ごめん、ごめん。でっ何かなー」

「作戦ですよ、答えは出たんですか？ 登れそうなんですか？」

「うん、やってみようね」

隊長の発言は簡素極まるものだった。詰まる処答えが出ていると受け取って良いのだろうか？

何処に転んでもこれが最後なのだ。人としてゲーマーとして最後の試合くらい一矢報いたいものだが、隊長次第か……。

やがて、コクピット内にブザー音が鳴り響くと、俺達のサイクロプスは起動可能な状態となる。

ブザーが鳴り終わった事で最終ラウンドが開始されたという事を俺の心の中に伝えていた。

試験のクリアラインがどれくらいの高さなのかは分らない。

仮に一勝する事で入隊出来るというのならこの試合は落とす事が出来ない。

だがそれも難しい話だ。敵との兵装の違いは歴然で、更にこの狭い通路の多い地形は爆発物が大いに威力を発揮する。そんな中で正面から突っ込んで勝機などあるわけが無い。

掌の汗も大分落ち着き、試験開始直後からキリキリと突き刺す胃の痛みも今では大分落ち着いた。

今敵が目の前に出てきた処で驚きはしないだらう。ココまで来た以上最後まで戦ってやる！

反撃開始！

最終ラウンド開始直後隊長から通信が入る。その声、張り切り方から自信の程が伺えた。今回はどうやら期待しても良いみたいだ。

「それじゃーやってみよっか。三号機君こっちに来て！」

隊長に言われるがまま三号機は動き出した。そして隊長は三号機をスタート地点正面のキューブへと誘導すると。キューブに向かい合うようにさせて静止させる。

「キーボードの（ctrl）キーを押してからTを押して前進」

隊長は三号機の位置を慎重に確認して、通信を入れた。

元気の良い隊長の声がコクピット内に響き渡った。たぶん、チームを組んで初めてだろう、隊長がこれ程までにイキイキしているのは。

三号機は響き渡る声に命令されると首を上下に振った。その後プログラムコマンドを入力したのだろう、キューブに背を向ける状態で密着する形で止まった。

「今度は（ctrl）キーを押してKで前進してね」

体長に言われるがまま行動する三号機は、キューブに背を向けた状態で片方の膝を地面に付けると、その姿勢のまま動かなくなった。三号機の行動を静観する俺はというと、TSCの繰り出す細かい動作を見て心の中で関心していた。現代のロボットはここまで細かい動作をする事が出来るのか。

「それじゃあみんな、三号機君の上に乗るからね。良く見ててね」

隊長のその言葉で作戦の全貌が見えて来た。隊長は三号機を踏み台にして、キューブの上に登ろうというのだろう。

そんな事を考えていると隊長は通信を終えて、三号機の方へと進んで行く。

やがて、隊長は三号機の肩に登るとバランス良く直立した姿勢を取った。

「オツケー。三号機君、その状態で少し前進して」

体長に言われるがまま、動く三号機は左中指のボタンを押したのだろう、さっきまでの片ひざの姿勢から直立姿勢を取った。その光景は庄巻の一言に尽きる。俺の前方では三メートルを軽く超える口ボットの巨兵が出来上がっていたのだから。

「それじゃーいっくよ」

隊長の少し抜けた掛声がコクピット内に響きわたっていた。

その掛声の直後、鳥の様に空高く舞ったTSCは6メートルの高さまで上昇すると、軽快に施設内の空を飛び、キューブの頂上へと華麗に着地した。

華麗とは裏腹に、踏み台にされた三号機はまるで電池が切れてしまったかの用にクシャリと地面に崩れ落ちた。

キューブの頂上へと着地した隊長の機体は俺達を見降ろしながら小さくガッツポーズをしている。

「あんな事もできるのか」

俺は隊長を見上げながら小さく呟いた。

一連の作業の余韻も無く、隊長から通信が入る。

「どどん来てね、ぼさっと立っているとやられちゃうわよ」

俺はその言葉を聞いて、一ラウンド目の悪夢を思い出した。

ココまでやって倒されたくないものだが……大丈夫だろうか。

内心の不安とは裏腹に、活気の良い声が、コクピット内に響き渡る。

「丸メガネ、ワイも頼むわ！」

今まで静観していた四号機が要領を飲み込んだらしく、通信を入れたのだ。

三号機はその通信内容に合図を返す様に、機体の頭部を上下に動かした。

どうやら知らない内に丸メガネが定着してしまったらしい、本人は丸メガネという渾名に疑問を持たないのだろうか？ まあ、今はそんな事はどうだって良いか。どうせ喋れないし。

要らぬ事を考えている内に四号機の機体は空中を華麗に舞っている。そして軽快に金属音を辺り一面に響かせながらキューブの頂上へと着地した。

見とれてる内に、地上には二機のTSCが残されていた、俺の機体と向かい合うように立っている三号機の頭部カメラが俺の機体を捕らえたのだろう。ある一点で頭部の動きが止まったので、俺は慌てて通信を入れる事となる。

「三号機さん、俺もお願いして良いですか」

俺が通信を送った後少しの間が流れたが、キューブの壁に寄り掛かる三号機は頭部を上下に揺らし、俺に打ち上げる意思を知らせてくれた。

その後、二人を追うように三号機の肩に乗った俺は、機体のプログラムコマンド入力した事により、6メートル近くの空中を舞う。もしこれがパワードスーツか何かなら、生身の状態で爽快感と重力からの開放感を味わっていた処なのだろうが。今この瞬間は遠隔操作である事に後悔するしかなかった。

それとは裏腹に三号機は大忙しである、俺達が踏み台にする度に崩れ落ち機体を一々起こすと、また次の機体を空中へと持ち上げる。さらには最後に残された事によつて、自分はキューブへと登れないのだ。

最後の間はたぶんその事を考えての事だったのだろうが。全く三号機のパイロットには済まない事をした……。

最後の一人が着地した事を確認したのだろう、隊長から通信が入る。

「あらっ、最後はキミだったのね。登れたのは良いんだけど、この後どうしよっか……」

啞然とする隊長を見かねて四号機は通信に割り込んできた

「敵の頭上におるんや、このまま狙撃したらええやないか」

「ええそうですとも。敵が軍隊だっていうのならこちら側はゲリラ戦で挑むまでです!」

俺は今までにないくらい、張り切っていた。ココまでやれば流石の現役軍隊でさえ、予測できないだろう。それに奴らはたぶんあの陣形を崩さない、それが軍隊ともなれば尚更だ。

最初にランチャーを撃ってきたサイクロプスがそうである、目の前に何体のロボットの残骸があろうが、残骸は彼の気にする所じゃないのだ。自分が任された陣地内に敵が入ってきた、だからランチャーを撃った。ただそれだけの事なのだ。

詰まる所、ラウンド毎に二号機がやられないのも、そんな彼らの理念が原因なのではないだろうか。

俺が敵ならポイントとして美味しい二号機は逃さないが、考えを纏めている内に隊長機から通信が入る。

「前に進めばいいのかな？」

「ええ、お願いします。一番最初に一掃された右隅のキューブまで移動しましょう」

俺は一言隊長に通信を入れると、隊長は動き出した。キューブの上で少し助走をつけてから上空へ飛びあがる。

キューブの上から更に２メートルの高さを隊長機が優雅に飛んで行く。

それは、人間では到底考えられない光景で、一瞬下を見ただけで足が竦むような行動もＴＳＣ達は平気で成し遂げてしまった。

やがて奥のキューブへと渡り終えた隊長から通信が入って来た。

「どんどん付いて来ないと。置いてっちゃうわよー」

隊長の通信が終わると共に、俺たちは次々とキューブからキューブへ渡り始めた。

俺が隊長機の後ろに続くようにジャンプし、四号機が俺の後ろを付いて行く。

「下の通路で良え、丸メガネも付いて来いよ」

四号機はジャンプする直前通信を入れた。下で構えて、茫然と空を見上げる三号機が気になった様だ。無論俺も気にならないわけではない。

忘れていたわけでもない。

ただ四号機に先手を取られたただけだ。

その通信連絡を聞いた三号機は頭部を上下に動かすと、了解したという意味を皆へとしらせた。そして、次々に飛び移り俺達の後を追うように、キューブの間、下の通路の移動を開始した。

5メートル四方のキューブ、通路の幅は3メートル弱。

軽い助走だけでも余裕でお釣りが返って来るレベルの跳躍で、更に、前ラウンドの様にキューブ通路を縫って行くよりも遙かに速く。40メートル地点まで進むのにも数十秒しか時間がかからなかった。

打ち上げ作業のタイムロスにお釣りが返って来るくらいに。

右側40メートル地点と言えば一番最初に一掃された場所でもある。

俺が華麗な跳躍を終え、次のキューブに着地すると。先に到着していた隊長から通信が入った。

「一号機君、敵が居たよ！」

## 運命の三ラウンド - 1

俺は隊長のその発言を聞くと慌てながら通信を返した。

「触らないでくださいね。気がつかれると大変なので、隊長は待機しててください」

「そうやな、またへまされても困るわ!」

「何よその言い方、私が何時へましたっていうの」

「初めから! 最後までや!」

「二人ともいい加減にしてください! このラウンドは重要なんです。四号機さんも隊長をあまり刺激しないでください」

四号機の軽い舌打ちと共に、通信が終了した。

俺は、隊長の所まで歩み寄ると、隊長の視点と同じ様になる場所を探して止まる。

そこからは、確かに、微かだがキューブの隙間から敵のTSCの頭部を確認する事が出来た、距離にして15メートル程、ライフルで慎重に狙えば射抜くのも不可能では無い距離ではあった。だが、正直もう一步。不確定要素の方が遙かに多い。

「どないするんや。射てまうか?」

俺が、その通信に気が付き四号機を見ると、手に持たれていたライフルは敵の方向を向いていた、なので彼は照準を合わせた状態で通信を入れて来たのだろう。

……正直驚いた。

今にも引き金を引き、すべてを台無しにしてしまいそうな彼を見て慌てて通信を入れた。



「いや待ってください、まだ微かに見えている頭じゃ確実じゃないです。もっと確実に倒せる状況じゃないと……」

「せやかて、これ以上近づいたら気が付かれてまうやろ」

確かに四号機の言う通りでもある、かと言ってこのまま博打をするわけにもいかないのだ。

俺は苦渋の決断を前に2ラウンド目の事を思い出していた。

正面から目の前の青いTSCに飛び込んで行った。遙かに有利な状況下の中で、操作慣れしていないという理由だけで、頭部二発……返り撃ちだ。

今回も有利な状況には変わりはない。だからと言って先制攻撃を外した場合、前のラウンドの二の舞を踏む可能性は高い。

決断を迫られる緊迫した空気に光明を射すかの如く、俺達の真下のキューブで物音がした。

無論、敵ではない。下のルートで俺達の後を追って来ているのはただ一人、三号機だ。

俺は敵を視線で捉えるのを止め、真下に居る三号機を覗き込むと三号機は何やら支持を待っている様子だ。

そして、俺は一拍の間も待たず、全体に通信を入れる事にした。

「彼に、頑張ってもらえないですかね？」

「彼って……三号機君の事？」

「どないするんや？」

「三号機さんに、敵の後ろに回りこんでもらうんです」

「なるほど、陽動作戦ちゅう事か」

「危なくないかな？ 一人でも戦力がある方が良くないでしょ？」

「隊長がソレを言いますか……。彼には敵を引き付けてもらうだけなので安全です。それに敵の位置も把握できているので、問題は無

いとおもいます」

前方の敵の位置だけなら丸見えだ。これが作戦を考える時にどれだけ有利な事か……。

この状況なら三号機に指示を出して敵の背後まで誘導させる事も簡単にできるのだ。

三号機の頭上で作戦を練る俺達の通信に答えるように、三号機の頭部が上下に揺れるのが確認できた。

「どうやら、三号機さんは陽動に参加してくれるみたいです、後は隊長が容認してくれば直ぐにでも実行に移しますけど」

「私は、別に……。イイワヨ、やりましょう。これ以上コケにされてたまるもんですか！」

隊長は少し口籠ると、直ぐに口調を強気へと直し作戦を容認する意思を見せてくれた。

その後、俺は皆に作戦の段取りを説明してから実行する事になった。

「それじゃ、四号機さんお願いします」

「おうよ！　丸メガネ目の前のキューブの角を左に進んでから次の角を右や」

四号機の粗暴な陽動が始まった。三号機は四号機から指示を受け取ると、慎重に動き始める。

なるべく、敵に気がつかれない様に歩み遅く。ソロソロと動き出すと、四号機の指示通りに角を曲って行く。とは言え、その慎重な動きからは彼の不安が見て取れた。

彼のソロソロとした動きは若干の足音はすれども、隊長が走りだした時のような騒音を出す程でもなく。青いTSCも彼が隣の

通路に入る事に気が付く余地もなかっただろう。

暫く歩き、やがてキューブを挟んで敵と横一列に直線状に並んだ時だろうか、微かにしか鳴らない三号機の足音に青いTSCが気が付いたらしく。

地面に金属を擦り合わせながら、隣で鳴る微かな音を頼りに自陣の方向へ動き始めた。

三号機が歩く通路へと敵が迫って行く。

だが、それもすべて作戦の内、計算された事なのだ。今まで正面を向いていた敵が、他の通路を見に行く為に俺たちから背を向けた。そう、この状況を俺達は待ち望んでいたのだ。

徐々に進んで行く青いTSCは、俺たちから距離こそ離れて行くものの、徐々に狙える範囲が増えて行った。

そんな敵のTSCを見てだろう、隊長から通信が入って来た。

「今チャンスなんじゃないの？」

確かに絶好のチャンスだ！

先ほどまでは微かにしか見えなかった頭部が今は肩まではっきりと確認できる。

やがて、肩までし確認できなかった青いTSCは今じゃ上半身全体を確認する事ができる状態にまでなっていた。

「皆さん、やりますか？」

その合図を待っていたかの様に、擬しそうにライフルを構えていた四号機がライフルの引金を引いた。そして、その四号機の行動に吊られるように隊長もライフルを構え引金を引くと、敵目掛けて射撃を開始した。

最後に二人の行動に後れを取らないよう、俺も射撃へと参加し敵へ一斉射撃という弾丸の雨を浴びせる事に成功したのだ。

敵へ浴びせられた弾丸は十二発、標的への命中確認をする前に敵の青い機体は膝を折ると地面へ崩れるように倒れこんだ。

どうやら今回は無事倒す事が出来たみたいだ。

俺の隣で倒れこむ敵を見たのだろう、隊長の機体が、また小さくガッツポーズをしているのが見えた。

「やったね、一号機君」

「そうです、やりました……」

十二発打ち込んでいたものの、三人合わせて命中したのはたったの四発だ、その中でも一発頭部に命中したのが大きいらしい。

一斉射撃には参加していた隊長も結局の所、天井を撃つていたのだから、万が一、倒し切れなかった時は隊長を突き落として逃げる覚悟だった。

## 運命の三ラウンド - 2

「隊長ガッツポーズってどうやるんですか」

「コマンド（ctrl）Gの後に左小指のボタンだよ」

隊長の通信内容通りコマンドを入力すると、俺のTSCはキューブの上でガッツポーズをしたらしい。

握った拳が俺の画面に小さく映り込んだ。

更に俺の隣で続くように四号機も隊長のマネをしていた。

全く調子の良い奴だ……。

暫くして三号機が俺達の居るキューブの真下へと戻ってきた。

これだけやって、やっと人数が並んだのだ。敵兵一機倒すのに、奇襲、陽動。結構な戦術カードを使ったものだ。とは言え、休んでいる暇なんてない。

「次は左側に居る敵兵ですね」

「前方に行けばいいじゃない」

「警戒している敵に突っ込む馬鹿はいませんよ」

「馬鹿で悪かったわね」

「隊長の事じゃないんですけど……」

今現在倒した敵は初回俺達をランチヤーで一掃し、更に2ラウンド目に俺達を四発の弾丸で静めた名手だ。他の敵機が同じ兵装をしていたのなら、やはり彼がブルーチームの隊長だったかもしれない。

そう見紛う程の腕だったのだから。

「やっと一人やー、マジキツイわ」

俺が溜め息を付く間もなく、隊長が動き出した。軽快に機兵の足音を鳴らしながら他のキューブへと飛び移る。

瞬く間に隊長の機体は小さくなっていった、その光景を見て俺達も行動を開始する。

やがて先を進んでいた隊長が新たな敵兵を発見したらしく、通信を入れてきた。

「一号機君、敵がいたよ」

「隊長タフですね。こっちはもうヘトヘトですよ」

「こついう時は女が一番強いんだから」

少し強い口調で通信を返す隊長の所へ、遅れながら到着すると俺も自分の目で敵兵を確認した。敵までの距離も先ほどの敵機と同じくらい空いている。敵機の頭部は周囲を確認するように少しばかり左右に動いていたものの前方ばかり見ていたので、俺達が彼の頭上、少し離れた所で待機している事はまだ知られていないようだ。

だが、様子がおかしいのも事実なのだ。

先ほどの敵機よりも挙動可笑しく、あたりを見回しているのだから。

もしかしたらキューブへ着地した時の異音に気がついたのかもしれない。

そんな敵兵は俺たちが登っているキューブへと近付いて来るじゃないか。

敵兵の予想外の行動を見て四号機から通信が入った。

「そやけど、このまんま角曲がったら三号機と鉢合わせへんか？」

「えっ、マジですか！ 彼今何処に居るんです……」

俺は少し驚きの声をあげると、三号機的位置を確認した。

「ワイはレーダーで味方の位置を確認してるもんやと思っとったんやが……」

確かに、四号機のパイロットの言う通りだ。俺達のようにキューブを飛び移って移動できない三号機は、俺達よりも遙かに移動効率が悪い。

入り組んだキューブの森は角ばかりで、俺達を必死に追っかけて来た三号機は今俺達の真下に居た。

悲運というべきか。そこは曲がり角ばかり異様に存在する一本道。状況を知らず呑気に歩く三号機へ、俺は慌てながら通信を入れた。

「三号機さんそっちに敵が来ています、適当に隠れられる通路を探してください」

慌て口調の通信が三号機に届いたのだろう、三号機は通路のド真中で静止すると、頭部を左右に動かし始めた。

どうやら自分が隠れるに相応しい、角を探しているのだろう。

今も直隠れる場所を探している三号機に耐えかねて、四号機のパイロットの怒声がコクピット内に響き渡る。

「はよ隠れないか!」

だがその意気込んだ声も虚しく鳴り響くだけ。その声と同時に期に青いTSCは角を曲り終えると、三号機の姿を発見したみたいだ。三号機もその姿を見つけたらしく、左右に動いていた頭部がある一点で止まった。

その直後さらに、通信が割り込んで来る。

「にげてーーーーー!!!!!!」

女性特有の甲高い声。

それに敵の姿に合わせて隊長の声だ、三号機は相当驚いたのだろう。今まで進んでいた方向から間逆へ方向転換すると全力で走りだした。

その背中が柄空きで、敵から見れば撃ってくれと言わんばかり。

そんな三号機の姿を見て青いTSCも追うように走りだした。敵機と三号機との距離は30メートルくらいあるだろう。俺と敵との距離はキューブ二つ分といった所で、敵機はみるみる俺達の居るキューブへと迫ってきた。

通信を出してる暇なんか全くとって良いほど無く、敵の足音のみが下の通路に鳴り響く。

その音を聞いて。既に俺の体は答えを出していたみたいだ。思うよりも早く俺は行動を起こすと。

後に響いたのは、激しい衝撃故に、金属同士がぶつかり合う激しくも鈍い音だけが虚しく木魂していた。

落下音と共に目の前に出てきた障害物、敵は避ける暇などなかったのだろう。急に目の前に出てきた障害物に弾き飛ばされた敵機は進行方向とは間逆の方向へと吹き飛ばされる形となった。

三号機の足音と共に金属の擦れる音が辺り一面から鳴り響き、やがて擦れる音は止み、機兵一機の足音が通路内に虚しく響いている。

俺はキューブから飛び降りた為に、今、目の前には敵がいる。そして、俺と同じ格好をしているのだ。いや、飛び降りた事により俺の方が若干起き上がるのに時間が掛るかもしれない。

自分が先か、敵の青いTSCが先か……。そんな事を考えていると。俺の頭上から銃声が飛び込んで来た。

キューブの上で待機していた四号機が援護射撃を入れてくれたのだろう。敵は倒れこんだ姿勢のまま動かなくなった。



「生きとるかー」

「御蔭さまで何とか生きてます」

気の抜けた四号機からの通信に背一杯の気力で返事をしている。そんな間にも俺の機体は徐々に起き上がると、やがて操作可能な状態へと戻った。

バランス、装甲、耐久力、化け物じみたロボットだよ全く。俺が起き上がった事で安心したのだろう、三号機が俺の居る所へと戻ってきた。が、やはり無言だ。本来なら「大丈夫ですか」の一言も欲しい所ではあるが。

そんな事を考えている間にも三号機は俺の機体を肩に乗せると、キューブへの昇る為の台座になってくれた。

全くもって親切な奴である。

俺がキューブの頂上へと戻ると、直ぐに通信が入ってきた。

「お手柄やったな」

「お帰り、大丈夫だったみたいね。精密機械なんだからあまり無茶しないでよね」

「ええ、気御付けます……」

キューブ天辺に無地着地した後も俺の鼓動は高く、血液の流れが速くなっているせいで旨く思考が回らない。俺は今ココに立っているものの、もし援護射撃をしてくれなかったのなら俺はそのままリタイアしていたのだろう。

### 運命の三ラウンド - 3

フラフラ、いや機械は無事だ、直立仁王立ち、茫然自失と立っている。フラフラなのは俺の方だ。普段使わない頭と度胸をフル回転で使ったために、思考が著しく低下してるんだ。

正直、中の人の状態まで伝えるのは難しいだろう。だから、今だって隊長は勝手に先に進んでる。

「あの人戦闘が苦手なわりに、移動だけは早いんやから……」

半ば呆れた調子で四号機は通信が入ってきた。

俺はその通信を聞いて深く溜息をついた。

「全くですね……」

確かに、移動だけは早い。次の敵が何処に居るかが分かるかの様に振舞うその移動には、まるで付いていけそうにない。

そんな事を考えている間に、隊長は既にキューブ四つ分先を進んでいた。

俺達の居る場所からキューブ四つ分直進した場所で止まった隊長は、先ほど同様辺りを見回していた。どうやら敵を探しているみたいだ。

大分落ち着いて来た俺は、今の状況考察する事にした。頭数なら俺達の方が有利になった。だか俺には腑に落ちない事が少しだけある。

三号機を助ける為に敵の頭上から落下物として出現した俺の機体は、何も知らない敵側に取っては奇怪な光景だっただろう。

それはもう、魔法を使われたような。ゲームなら明らかなチート行為。だが、それももう通用しないだろう。

俺達の居る場所はバレた。キューブの上は、もう安全地帯じゃないのかも知れない。

俺が焦るのにも理由がある、この機械は倒しても直、情報だけは漏れるからだ。

俺の思考はまたしてもフルに回転し始めていた、通信用のボタンを押すと、なるべく隊長を刺激しないように通信を入れる。

「隊長、俺達がキューブの上に登ってるって事、敵にばれてるかもしれません」

「えっ！ 何で？」

隊長からの返事は予想通りのものだった。そして、俺が今の起きている状況を隊長に報告しようとした時だ。通信連絡から微かな悲鳴が聞こえてきた。

「キャッ!？」

その声は明らかに隊長からの通信で、俺はその声に気が付くと隊長が居るキューブの方向へと視点を移動した。視点の先、隊長の機体をカメラが捕えた。

どうやら、機体は動いている。多分、迂闊に顔を出したために敵に見つかったのだろう……。

「大丈夫ですか？ 迂闊な行動は避けてください」

「本当ね、何かもう上に居る事バレちゃってるみたい……」

「ホンマかいな、ワイもそっち行くさかい待つとれや」

四号機はそう言うと、隊長の居るキューブへと移動を開始した。四号機のパイロットも敵の様子が気になる様子、やはり即席チームじゃ纏まった行動は取りにくい……。

四号機が前方へ移動した事により、俺も四号機の後を追う形になった。一応辺り一面、自分の確認出来る範囲で、他の敵が居ないかを確認する。

念のための行動とはいえ、こういった行動が重要なのだ。本の二、三秒、周囲を見回すだけ、周りに不審な敵影も無く、改めて前方へと視点を移すと四号機はすでに移動を終えていた。どうやら無事隊長と合流出来たみたいだ。

少しばかり溜息がコクピット内に流れる。

「俺も、そちら側のキューブへ移動を開始します」

俺は一言無線を入れてから、機体を動かし移動を開始した。少しばかり助走を付けて、キューブからキューブへと渡る。先ほどまで無事にできていた事。視点を若干下にしてキューブと通路部分を見極めて飛び上がる。

その直後だ、隊長から通信が入って来た。

「えっ、今来るの？ それはちょっと待った方がいーんじゃないかな」

その口調は訝しげで、俺の取った行動がまるで間違いであるかのような発言だ。とはいえもう飛んでしまったのだから仕様が無い。

俺は仕方なく前方の着地点を確認して、着地態勢を取った時だ。前方から奇妙な音が鳴った。

その音は第一ラウンドでトラウマを覚えた音。そして、気の抜けた音に似合わない威力。

考える間も無く俺の視点に煙を噴いた、丸い物体が飛び込んできた。

隊長達を狙っているはずなのに、目測を誤って飛んで来るランチヤー弾は俺と空中直撃コースで勢い良く飛んで来る。

このバランスを取らなきゃいけない重要な時期に……なんで飛んでくるんだよ……。

案の定、ランチャー弾は俺の機体へとぶつかった。

## 運命の三ラウンド - 4

俺の機体はその反動のせいで着地点で滑ると。地面に背を向け転落だ。視点は天井を見上げ、逆様である証拠に演習施設の照明が良く見えた。

やがて機体が地面へと落ちた衝撃で一瞬ディスプレイに砂嵐が紛れ込む。

そして、正常な状態にカメラの映像が戻ると。俺が着地するはずだったキューブの頂上が眩く光りだした。どうやらランチャー弾が爆発したみたいだ。

「大丈夫？ 何か当たったみたいだったけど？」

「ああ、また地面に落ちる羽目になるなんて」

「ねえ？ 人の話聞いているの。聞こえてるならちゃんと答えてよね」

「えっ、ハイ、すいません。体力は異常ないみたいです、後は物理的に壊れてなければ動けると思うんですけど」

「問題無いやろ、対戦車ライフル食らっても三号機はヒョイヒョイ動いとったで」

四号機の言う通り、恐ろしくタフな機械だ……。5メートルの高さから落ちたというのに、何事もなかったかの様に俺の機体はまた起き上がった。

一通りの通信が終わると、俺の居る通路に三号機がやってきた。俺を見つけて一定の距離を置き止まると、頭部をキョロキョロ動かししていたので、多分俺を観察しているのだろう。無言なのが尚更、今の俺には痛かった……。

「どないしよ、また昇って来るんか？」

「いえっ、大丈夫です。発見されてしまった以上、上と下でそんな

大差ないでしょ」

俺が通信を終え、ボタンから指を離したとたん。また前方からランチャー弾の発射音が聞こえてきた。

どうやら敵さんは、キューブ上に居る隊長達へ射撃が届かないものだから嫌気が差して、グレネードランチャーを使つて一掃しようとしているみたいだ。

多少、撃つ方向や角度を調節しているのだろう。先ほどとは明らかに違う場所から発射音が聞こえた。

「うほっ、アブナッ。今度は右から流れ玉や……」

「呑気な事言わないでください、一発でも落ちたらそれで終わりのんですから」

「もう、向こう側ばかり卑怯じゃない。こつちにも遣しなさいよ！」

「何いつてるんですか？ 隊長は持つてるでしょグレネード。それよりも敵の位置わかりますか？」

「ちよつと待つてね、今確認するわ」

次に隊長達から連絡が来るまでに少しばかり間があった。その間の中にランチャー弾の爆発音が紛れ込んで来た。爆発は俺達の居る処のはるか右側の方向で鳴り、暫くして消えた。

明後日の方向に飛んで行ったランチャー弾の光は俺達の視界には入って来なかった。たぶん、キューブに登っていたのなら太陽の閃光に似た光を拝む事が出来たのだろう。

「敵の位置把握できたで。アイツ、俺らの真下でグレネードランチャーを工夫して飛ばしよるんよ」

「えっ、真下ですね。方向は左側で大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ。あまり顔出せないから早く来てね」

そう言つと隊長達からの連絡はまた途絶えてしまった。通信してきた声に多少の嘲笑が感じられた事から隊長達も、当たらない物だと高を括っているのだらう。

「わかりました、直ぐ行きますんで少し待っててください」

一言隊長へ連絡を入れると俺達地上班は敵を倒すべく移動を開始した。

俺の後ろには三号機が付いて来ている。たぶん隊長よりは援護に期待できそうなのだが、実際どれくらいの腕なのかは、撃ち合いになつてみないとわからないのだ。

「ああ、あと。敵引き付けておいてくださいね」

「えっ、引き付けるってどうすれば良いのよ」

「せやなー、ジャンプしてもしとれば良えんやないか？ 隊長なら、おちよくつとるように見えるわ」

「ちよつと、それどういう意味よー」

「名案ですね、激しい動作音で俺達の足音が& a m p ; # 2 5 6 2 0 ; き消されますから」

暫く考え込む間があつただらう、やがて隊長の機体が空中へと舞い上がると激しくその場に着地した。その音は思つたよりも大きく俺の期待を遙かに上回るものだった。

「その調子でお願いします。次いでなんで四号機さんも参加してください」

「えっ、わいもやるんか」

「出来る限り交互に踏みならした方が効果的なんで……」

「しゃーないなー……」



やがてキューブの頂上で二機のロボットが激しく動き出した事により、敵は呆気に取りられている事だろう。唯一の誤算があるとするならば、ジャンプした事により隊長達の機体がジャンプした瞬間だけ見える事だった。ジャンプした所を狙撃されては元も子もない。とは言え真下の敵くらいには見えていないだろうが。

俺は急いで隊長達の居るキューブ真下へと移動すると三号機へと通信を入れた。

「03号機さん、その隅っこに居る敵を倒します。俺が先に出すので援護お願いしますね」

そして、通信ボタンから指を離すと共に行動を開始された。今も直、俺の真上では隊長達が激しく踏みならす事で眼下の敵を引き付けている。

敵も自分の武器をライフルに切り替えたらしく、命中率を高める為にバーストを切った単発の銃声が奥の通路から聞こえて来た。

「きゃっ。……早くなんとかしてよ」

「ええ、直ぐ終わります」

敵も少し纏まって行動していたならこんな状況には陥らなかったのだろうが。そう、御前らの敗因は俺達アマチュアを甘く見た事だ。

俺が通路に顔を出した時、敵の青いTSCは自分の頭上に居る標的目掛けてライフルを構えていた。

が、俺が通路に現れた事により、大慌ての敵機は地上の標的に照準を合わせざる負えなくなったのだ。更に一拍の間を介して登場した三号機により標的を定めるのが困難になった敵機の銃身が微かにブレるのが見て取れた。

気がつけば引き金を引いていた。俺の射撃に合わせるように後方

からも銃声が聞こえて来る。

三号機の援護が無事に入ったのだろう。

やがて発射された弾丸の波は敵を覆うように過ぎ去って行くと、敵の青いTSCは静かに地面に膝を付き、そのままの勢いで地面へと倒れこんだ。

ここまで来るのに既に四分が経過していた。ディスプレイ中央上段に表示されているタイムバーは既に一分を切り、試合終了の時刻が近付いて来ている事を俺に教えた。

それにしても、自分が動かしているのは指だけのはずなのにこの疲労感は何なんだろうか。

「あつ、倒してくれたんだね。ありがとー」

「ええ……何とかまりました……」

「何か息荒いけど大丈夫？」

「問題ありません」

「なら良いんだけど」

隊長は通信が終わると疲れ果てた俺を尻目にまた動き始めた。

俺が問題無いと言ったのがいけなかったのか？ 少しは気を使つて欲しいものだ……。

体長は先ほどランチャー弾が飛んで行った方向へと向かつて機体を動かすと、キューブの上を飛び跳ねながら移動して行った。

やはり隊長の移動は早い、俺達を置き去りにして早くも右端だ……。この移動の速さ、手際の良さには内心呆れを覚えるくらいだ。どうせ、敵を倒すのは俺達なんだから、もう少し落ち着いて行動してくれても良いのに……。

そんな事を考えている内に隊長から通信連絡が入って来る。

案の定、敵に発見されたのか……。

そんな思考が俺の頭を過った。

「何か変なんだよね。敵が倒れてるっていうのか……誰もこの機体には触ってないでしょ？」

「TSCの型番を教えてくださいませんか？」

「ちよつと待って」

変な事もあるものだ、隊長の通信連絡を待つ間、今まで何があったのかを少しばかり振り返っていた。

可能性として考えられる事は三号機の独断行動による敵との戦闘くらいで。そんな彼も引き金を引けばその分音が外部に漏れるわけ……。

「……TSCの001だって」

「やっぱり辺ですよ、右側で戦闘したのって一回だけですよ」

「あつ、ちよつと待って、敵さんの後ろに何かあるみたい」

「ホンマかいな、ちよいワイもそっち行くわ」

気になった地上組も隊長達と合流する事になった。

詳しく言えば隊長達と俺達の間には高さ5メートルの段差があるのだが……。

やがて、隊長の言う地点に顔を出すとそこには確かに敵の残骸が壁に凭れ掛るようにして倒れている。彼に一体何が起きたのだろう。

「無残な姿やなー、誰がやったんや？」

「一号機君、敵機の後ろに何か転がってるんだけど何か分からないかな？」

隊長に言われ、残骸の中心あたりを見回すと、確かに敵の背中に丸く銀色に輝く物体を確認する事が出来た

「確かにありますね？ 丸い銀色の物体の様でなんですけど。何か多少煤を被っているみたいです」

俺は一泊間を置くと、自分の頭の中に雷が落ちたのを感じた。そして先ほど何が起きたのか。頭の中に鮮明な映像が蘇る。

「……ランチャー弾じゃないですかね？」

「ほむ、そいやー、さっき飛ばされとったな。ちゅう事はチームキルって事かいな」

俺達の会話の内容に隊長と三号機は面を食らっている様子だ。

「つまり……どういう事？」

予想通りの反応が隊長から帰ってきた。まま、仕方が無いと言えばそれで終わりなのだが。

「簡単に言つと仲間割れです。爆発系の武器は広範囲に威力が及ぶんで味方もらとも吹き飛ばす可能性があるんですよ」

「やつちまったなー、可哀想に敵さん戦犯かー。撃った奴も撃たれた奴も御気の毒」

四号機の浮いた声がコクピット内に響きわたった。こんな境遇じゃなければきつと今にも噴き出していたのだろう。

俺達の方が遙かに気の毒者なのだが。

「そう言えばあつたわね、そんな事。煙り噴いて飛んでつたやつでしょー」

「そうです、それが見方に当たったんですよ」

「グレネードでチームキルって、どんだけリアルに作られとんねん

！」

「えっへん、凄いでしょ！」

「えばるなや！」

四号機がすぐさま天狗になる隊長へと突っ込みを入れた。

俺はそんな二人の姿を見て少し気が抜けた。

これで、残るは敵は隊長一機。包囲して掛ければ勝てるか…

…。

だが最後の一機が問題だ。包囲するにも逃げられては意味が無い、それに加えキューブの道は入り組んでおり、直線ばかりの一本道だ。素人がスナイパーライフルを使えば苦戦を強いられ。

玄人が使えば一瞬でチームを全滅させる事の出来る地形。

たぶんこの先が一番の正念場になるだろう、俺は自分に言い聞かせるように言っと。最後の力を振り絞って身を引き締めた。

## 運命の三ラウンド - 5

「あとは敵の隊長機だけです、スナイパーライフルを持っているので気を付けてください」

「厄介な奴が結局残ったんやなー」

俺が作戦を提案しようとした時だ、四号機から通信が入って来た。明らかな御見合い状態に舌を噛んだ。

「ちょっと確認してくるわ」

どうしてこの人達は……。

「ちょっと、待ってください。危険ですって！」

こういう時はいつもなら隊長が先に動くのだけど。下に転がっている銀色の弾をまだ見つめている様子だ。自分たちが作った物に見とれているのだろうか……。

それよりも今は、四号機だ。俺の静止を聞かずに進む四号機はやがてブルーチームのスタート地点前方のキューブへと辿り着いた。確かに時間も無い、迅速に行動しなければ敵の大将は倒せないだろう。だからこそ今は慎重に行動してほしかったのに……。

「おるでー、敵さんの大将やー！」

下を見回して敵リーダーの姿を確認したのだろう四号機から通信が入ってきた。

「何やってるんですか？ 撃たれますよ！」

「大丈夫やって、しゃがんで、露出少なくすれば、ワイの勝ちや」

その通信を最後にスナイパーライフルの甲高い銃声が辺り一面に鳴り響いた。

銃声は演習場内のあらゆる壁に反射し、四方八方から音が反響して伝わってきた。

その音と同時にディスプレイの右上に四号機の機体番号が表示された。案の定狙撃されたのだ。その表示と音に気が付き、今まで動く気配を見せなかった隊長がやっと動き始めた。

「ぬぁー……ドクソが……ぁぁぁっ！」

激昂した四号機の叫び声が通信で流れてきた。無理もない、あの形状のライフルじゃ直撃一発で俺達は墜ちるだろう。それに加え、こちら側は最低でも二発以上敵に弾を当てないといけない。何とも理不尽な話だ。

「一体何があつたの？」

「敵リーダーに撃ち抜かれたんですよ」

「あぁやつぱり……」

隊長は一言四号機に哀れみの声をかけたが、その言葉は今のこの状況には不釣り合いな物だろう。今は何よりも敵のリーダーに専念するべきだ。

「お前らの位置から、スタート地点見えとるよな？」

「えっ見えるんですか？ この位置から？ キューブ二つ分もあるじゃないですか。地上からじゃまるで把握できませんよ」

「お前や無い、三号機の画面や」

「ややこしいですねー」

「ちょ、おま今敵将映ったぞ！」

そこは丁度、敵のスタート地点へ続く最後の一本道で。直角に曲がる角付近、俺は隊長の機体を見上げていた。

倒された機体のカメラは機動を止めるので多分四号機のパイロットは三号機の画面を見ていたのだろう。

俺はその通信を聞いて、すぐさま視点を通路の方向へと向きなおす……だが一步遅かったみたいだ。

乾いた銃声と共に発射された弾丸。その重さに押される形となり後ろのキューブへ激しく叩きつけられる三号機の姿は俺の画面にマジマジと移り込む結果となった。

そして、俺の視界、前方に微かな青い敵影が映る。

自分が撃たれても大丈夫なように、キューブに体を半分以上隠し銃身だけをこちら側に向けていた。

スナイパーライフルの形状から見てオートマチックなのだろう、

装填まえでの時間はそんなにかからないはず。

咄嗟の判断で逃げようと、ボタンに手をかけた、だが、一足遅かったみたいだ。本当なら四号機が通信を送った時に隠れるべきだった。

ディスプレイの画面に砂嵐が紛れ込む、そして画面が真っ暗になり、暫くして俺達を眼下に見下ろす隊長の視点へと変更された。

それは同時に俺の戦いが終了した事を現していた。

俺の戦いは敵に撃たれた時点で終わったのだ。

敵のリーダーはかなりの名手なのだろう、微かに胴体が映っただけで俺達を打ち抜いた。これが自分のやりなれたゲームで対戦しても多分結果は同じだったはず。



「逃げてください、敵はかなりの強敵です」

まるで死人が吐く戯言のように、俺の声は沈みきっていた。

「どうしたの？ 一体何があったの？ 何をやらかしたの……」

気がつけば3機倒されたこの状況で体長は混乱していた。無理も無い話だ、四号機がキューブ上で倒されてから俺達がやられるまで五秒弱、一瞬にして見方が全滅したのだから。

「私どうしたら良いかな？ 多分勝てないよ……」

隊長は今もなおキューブ上でアタフタとしている、多分女の感という奴なのだろう。幸いな事に隊長の居る場所は敵のスタート地点から二つ目のキューブで。敵の隊長から運良く死角になっていた。隊長は今も直喚いていたが、正直どうだって良い話だ。これ以上俺が何かした所で戦況が変わるわけでもないのだから。

とはいえ、放っておけるわけもない、今まで戦った仲間、最後まで戦おうとしている仲間を見捨てる事なんて俺にはできないのだ。そんな思いの果てで、マークス中将の一言が俺の頭を横切った。

「隊長、グレネード持ってますか？」

そう、隊長機にはグレネードが備え付けられているはず、マークス中将が言っていた事だ不安が残るが、本当に存在するなら、これほど心強い武器も無い！

「えっと、あつと、たぶんあるとは思っただけどーっ」

「使い方が分らないんですね」

隊長の返答は予想通りのもだった、更に時間がなくあせっていた俺は隊長へと雑な返答を返す事になった。この時点で残り時間はすでに五秒を切っていた……。

「右薬指のボタンを押して、トリガーボタンです！ 隊長の視点から1つ先のキューブ、影に敵がいます！ そこめがけて速く投げてください」

「早くせんか！」

四号機の罵倒と、俺の雑な解議の中。その声に答えるように隊長の赤いサイクロプスは動き出した。

腰の右側に手をやる、そして、気がつけば出かい握りこぶしいの中、銀色に輝く物体を捕まえていた。

何処に隠し持っていたのか、まるで分らない。

すぐさま、握り拳の銀色を正面へ投げつけと、キューブ一個分飛んでった先に吸い込まれるように落下して行った。

後には眩い閃光だけが残っていた。

そして、その閃光を最後に、試合終了を告げるブザーが鳴り響く。

そのブザー音と共に俺達の。

激動の。

適正試験が、今、終了したのだ。

## 適正試験終了後

### 適正試験終了

コクピットの椅子に深く凭れ、疲れ果てた俺は深い溜息を付いた。今はクツシヨンの感覚が心地良かった。果たして試験は合格したのだろうか？

試験が終了後、少ししてコクピットのハッチに掛けられていた口ツクが解除される音がした。ガチャリと音を立てた後、真っ暗なコクピット内部に一筋の光が差し込んだ。

「おつかれさまです」

差し込む光のせいで少しばかり目をやられたが、直に環境に慣れると声の主は顔を現した。

何て事は無い。声の主は俺をこの閉鎖空間へと閉じ込めた主、技術者だ！

「以上で試験は終了です。試験結果が後程伝えられると思いますので、それまで宿舎で待機しててください」

技術者の声に耳を傾ける。そして一通りの話しの内容を聞き終えると、軽く会釈してから席を立とうとした。

コクピット内のソファアーから立ちヨタヨタと立ち上がると、急に目の前が暗くなって行くのを感じた。

この非日常的な環境と、それが与える極度の緊張感に長く居すぎたせいで、今更になって付けが回ってきたのだらう。俺は少しばかり立ち上がると、急に力が抜け、そのままの勢いでまたでソファアーに座り込んでしまった。

そんな俺の姿を見て、技術者が心配そうに俺を見つめて言った。

「大丈夫ですか？ 手を貸しましょうか？」

「ええ、すみません。少し立ち眩みがしたもので」

その後、技術者に担がれる様にして外へと出た俺は、数十分ぶりに自分の足で地面に立った。

少し懐かしい感覚だ。

未だにフラフラと覚束無い足の膝は、面白い程に笑っていた。全てが終わった今ですら、その実感がまるで無いかの様で……。

「本当に大丈夫ですか？ 保健室へ案内した方が良いのでは？」

「問題無いです。直治まりますから……」

「何かあったら言うてくださいね、係りの者が対応しますから」

その一言を言い終えた後、技術者は演習施設の奥へと姿を消していった。演習施設の奥には乱雑に置かれた機器がある。その機器の脇にはモニターやら複数のスイッチが付いた配列板やらが置かれてあり、今回の徴兵が如何に緊急であったかが良くわかる。

俺がコクピットの脇で膝を抱えて立ち竦んでいると、脇から聞いた事のある声が聞こえてきた。

その声は良く聞いた事のある物のどうにも相手の顔が浮かんでこなかった。

ぎこちない関西弁に混ざり話相手は弱々しく敬語を使っている。

そして、コクピットの脇から出てきた彼らは俺の姿を見つけると、軽く手を翳し俺の方へと挨拶をした。

「おったで、あんさんが大将やる？」

「大将じゃわからないですって？ 川辺さん」

全くもって事態を飲み込めない俺は、二人の姿を見て目を丸くしたが、特徴的な関西弁は今まで飛んでいた俺の意識を呼び覚ます結果となった。

ああ、こいつ四号機のパイロットだ……。という事は隣に居る若干丸いメガネを掛けている奴が例の三号機のパイロットって事になるのか？

多分そうなのだろう、彼らが俺らと一緒に戦った、短い時間の戦友！ そんな彼らは今少し揉めていた。

「駄目ですよ、先に自己紹介しなきゃ！ 自分から先に名乗らないといけないって親に教わらなかったんですか？」

「そない言っんやったら、あんさんから名乗ったらええやないか」

少し、の間が流れた。そして、丸いメガネを掛けた小柄の男性は俺の方を振り向くと少しばかり頭を下げて言った。

「僕の名前は萩原晃助です。今回は度々迷惑を掛けてすみませんでした」

それは、気持の良い程の挨拶で。口調も弱々しいながらも歯切れが良くとても聞きやすかった。が、ここまでの挨拶が必要なのかと言えば少し疑問ではある……。

「えっと、俺は正道進一です。萩原さんは三号機を操縦していた人ですよ」

「……本当にすみません、足を引つ張って……」

「そんな事ないよ、今回は君の力がなければあそこまで戦う事ができなかつたんだから」

「あんさんは良くやった、今回の働きには本当に感謝しとるんよ。」

皆

「紹介が、遅くなったな。ワイの名前は川辺や、宜しくな」

川辺という陽気な関西人が名前を名乗った事で一通りの自己紹介

は終了した。それと同時に、演習施設のドアが開いた。一同一斉にドアへと視線を移すと、その先には自衛官の姿があった。

ここは大規模実験施設だと言うのに、今だ迷彩服を着たままの彼らは、一目で自衛官である事がわかる。

そして、ある程度俺達の居る所へ近づいて来ると、俺の方を向いて大きな声で言った。

「諸君お疲れ様、私は神准尉だ。君達の戦いは見せてもらった」

その顔を忘れるはずもない。その声も。間違え無い、今朝大学宿舍の玄関まで俺を迎えに来た自衛官だ！

「私見だが、諸君は良く戦ったと思う、圧倒的劣性を物ともせず勇敢に戦った。その事は上にちゃんと報告しておこう」

「なんやと、もともと無茶な組み合わせ、せんかったら良かったんやろーが」

「落ち着け、川辺。ここで問題起こしても何の利益も無いぞ」

俺の言葉を聞いて、川辺は軽く舌打ちをした。

「さて、話が御済の様で。諸君には試験結果が出るまでの間別室で待機してもらう事になっている。係りの者が案内するので付いて行くように」

その後案内された部屋は無駄に広く、ホテルの一室といった具合にベッドが二つ並べてあった。本来ならこの部屋で陰気な黒フードの二号機パイロットと一緒に待機する羽目になったのだろうが。当の本人はと言うと、試験不参加という事で早々に駐屯地送りだそうだ。

それにしても広い、そして何もやる事が無い……。試験結果って  
いつ発表されるんだよー。

## 結果待ち      - \* -

それは採用結果が発表されるまでの数時間。

何もやる事の無い三人は、宿舍の一室に集まり、無邪気な談話をしていました。

そして、話題は自然と三号機に残る疑問へと移り代わっていったのです。

「そっぴゃ、何で萩原は、無線連絡使わへんかったんや？」

唐突な川辺の発言ですべてが始まった。

「もしかして、通信機構壊れとったとか？」

「えっ、それは僕が聞きたいですよ。皆さんどうやって連絡取り合ってたんですか？」

質問を質問で返すとはこの事だ。

「それはさあ、配布された資料に書いてあったじゃん」

「あれに書いてあったんですか？ ほら、高島さんが流した操作説明も雑で、僕が単に聞き逃しちゃっただけだと思って……」

躊躇する、萩原、明らかに様子がおかしい

「確かに通信は雑だったよね。でも、萩原くらいだったらちゃんと事前に操作の確認してそうだけど」

「それがーっ……」



「何やモジモジして」

「僕資料忘れちゃって……」

話を聞く二人の頭から「！」が噴き出した。  
先程貰った資料をどうやれば忘れるのか。

「急に呼ばれたもんだから、慌てちゃって。自分の席に置いてきちやっただけです」

「そら大変やなー、あれ結構重要そうやし。それに情報漏洩とかもあるやろ？」

「あー確かに、漏洩はやばいねー。それにあれだけでも暇潰しになると思うよ」

「えっ、ちよっ、僕、取ってきますね！」

その後、勢い良く部屋を飛び出す、萩原の姿はみるみる内に小さくなっていった

「以外に抜けとるんやなー」

「小心者なだけだと思いますよ」

「そうか？」

## 長い廊下

四方を白い壁に囲まれた空間に俺は居る。あの後、一日に二度も敵つい顔を見る羽目になった俺は、榊准尉の支持の元、控え室に案内された。

控え室とは名ばかりで、軍人宿舎の一部を開放して一時的に使っているのだ。試験終了後の扱いは良く、演台でマークスが吐いた言葉がまるで嘘のようだった。

そして、今俺は、宿舎のベツトに横たわり試験の結果を待っている。できる事なら終了後直ぐに通知してくれてもいいものを、極秘施設所属の選考ともなるとそんなに早く決めるわけにもいかないらしい。

寮は二人部屋で、川辺と萩原は他の部屋に案内されたのだと言う。それにしても、あの勝負、どちらが勝ったのだろうか……。

最終ラウンド、善戦したとは言え、やはり結果は気になる。最後に隊長の投げたグレネードが敵のリーダーに当たっていれば良いのだが……。

モヤモヤとした気持ちの中、試験で起きた事を思い返しながら物思いにふけっている中、控え室の扉を叩く音が聞こえた。ノックの音はリズム良く三回鳴り。扉の外から自衛官と思しき男の声が、室内へと響き渡った。

「正道進一、高島施設長がお呼びです」

この窓一つ無い室内へと淡々とした声が入って来る。

どうやら、この宿舎の壁は相当薄いようだ……。

俺は、返事を返すと、扉を開けた。

開けた先には屈強な自衛官が立っていた。

すぐさま、自衛官の後ろから見慣れた関西人が顔を出してきた。

この様子からして、俺と一緒に戦った仲間全員が呼ばれたのだろう。

「よっ、大将。どうやら試験結果が出たみたいや」

相変わらずの喜作な笑みを浮かべながら川辺が俺へと喋りかけてきた。更にその後ろから丸いメガネが顔を出す。

「川辺さん、誰もそんな事言っていないじゃないですか。タダ呼ばれただけですよタダ」

「なに言うとんのか、呼ばれたんやから結果の通知に決まっとるやないか、採用や！」

川辺と萩原が自衛官の後ろ、寮の通路で少しばかりの口論を始める。その光景を半ば煙たそうに見ていた自衛官は、軽く咳き込むと二人へ強烈な視線を送った。

強烈な自衛官の視線に気がついた二人は口論の途中で意気消沈して黙り込んでしまった。

### 応接室へ向かう道

その後、表情一つ変えない自衛官の後ろを言われるがまま、付いて行く俺達は、少しばかりの世間話をしながら応接室まで続く長い廊下を四人で歩いていた。

結局呼ばれたのは三人。途中リタイアの二号機パイロットに加えて別室で戦闘に参加していた隊長には、戦闘の後結局、会う機会が無かった。

隊長は一体何者なんだろう……。縁があればこの先会う機会もある

るとは思つが……。

「なあオッサン、ワイら一体なんで呼ばれたんや？」

多分、川辺はこの長い通路に痺れを切らしたのだろう、俺達を先導する自衛官へ問を投げかけていた。

その光景はまさに試験前のデジャブだ。

自衛官はその言葉に答えるように、細目で俺達の表情を伺うと鉄面の口を少しばかり開け、地鳴り程の声を廊下へと響き渡らせた。

「理由を知りたいのなら生憎だ。私は呼ばれた理由を聞かされていないからな」

「何やオッサンが勿体ぶってるんで期待したんに……」

自衛官の言葉を聞いて川辺は渋ると、両手を頭の後ろへ回して天井を見詰めた。どうやらお手上げという意味らしい。

ここまで、情報が出てこないと川辺じゃなくても不安になるものだ。

もし採用なのならここまで勿体ぶる必要もないわけで……。

「大丈夫だよ、あそこまで善戦したんだから……」

勇気付けようとした俺の発言に萩原が口を挟む

「そうでしょうか？ 確かに善戦しましたが、結局一回も勝てなかったじゃないですか」

萩原の一言で場の空気が一気に重くなった。

俺達の淀んだ空気を察しながらも先頭を歩く一人の自衛官は、あの扉の前に付くと足を止めた。扉は宿舎の部屋と同じ木製の押し戸

で、目で見ても分かる新鮮な塗装に、二スの微かな匂いが、この施設の歴史の浅さを物語っている。

自衛官は扉で軽く三回ノックをすると、自前の声を響かせた。

「正道進一、以下二名を御連れしました」

自衛官のその言葉を待っていたかの様に、扉の奥から聞き覚えのある軍人の声が廊下へと返ってくる。

そして、自衛官は扉を開けると、俺達を中へと招き入れた。

その後、全員が応接室の中へ入ったのを確認すると、ビシッと決まった敬礼と挨拶を見せた。

## 応接室の三人

今俺の目の前には三人の男女が居た、二人は朝見た事のある顔、そして、声なのだが。女性は今回初めて見る。髪はセミロングのストリートで肩まで掛るくらい、高島という科学者と同じ白衣を着ている事から科学者の一員なのだろう。多分、年も俺達と然程離れてはいない、それに目が少し悪いのだろうか萩原同様メガネを掛けていた。だがフレームは細目の四角で萩原よりはセンスが良い。マーキスと高島は初めから応接室中央に置かれた対面式のソファ―に腰を深く持たれていた。ソファ―の後ろ、入口の直ぐそばで啞然の立ち竦む俺達を見て、黒人の中将は口を開けた。

「ああ、君。少し外で待っていてくれないか？　それ程時間はかからないさ」

中将の言葉は俺達の前で未だ敬礼の姿勢を崩さない自衛官に浴びせられたものだが、中将の

「それ程時間はかからない」という言葉に少しばかりの安堵を覚えた。

こんな殺気立った空間に長時間も居られない、気がくるつまう。

自衛官が退出した後、応接室の中には六人だけが取り残され、狩る側と狩られる側の立場が一本の亀裂の様にハッキリと分かる。

啞然とした俺達を見た、ソファ―に座る主導者は少しばかりの笑みを浮かべると俺達に問いかけた。

「諸君等も早く座ってはくれないか？　話が進められないだろ……」  
中将に言われるがまま、対岸の席に座る俺達は前方から浴びせら

れる冷めた視線を感じて直固まった……。

俺の横、順番に座った戦友も何処となく居心地の悪さを感じているようで、いつも以上に肩幅が狭く見えた……。

試験のチームメンバー全員が座り終えたのを確認すると、対岸のソファーに座る白衣、高島の一言ですべてがはじまった。

「さて、君達は何故ココに呼ばれたか分かるかね？」

高島の口からも吐き出された言葉ですら、やはり理解に苦しむもので。俺達はお互いの顔を見合わせると、また暫くの間無言の時間が続く事となる。

その無言の空間を汲み取るように、先ほど間で二人の重役の後ろで待機していた女性が、トレーに乗せたコーヒーを各自の席へと置き始めた。

「コーヒーを入れました」

「すまないね」

一言、助手らしき女性に声を掛けてから、高島は自分の席に置かれたコーヒーを啜る。

「彼女は研究の方は今一なのだが、何かと気の利く女性だね」

「高島、話がズレているぞ」

「ああ、すまない。出来の悪い助手の話は又今度、君に聞いてもらうよ」

俺は、肩を竦めながらも終始この高島という男を観察していた。助手の目の前で悪態を垂れているので、助手の表情を伺って見たのだが顔を顰める様子も無い。

要領良い助手、そこまで出来が悪い様には見えないのだが。

高島は、コーヒーがまだ半分以上入っているカップを自分の手前に置くと、俺達の強張った表情つを伺って、深い溜息をついた。

「まあ、予想通りというべきなのだろうがね……。あんな事をしたんだ」

高島はそう言うと、自分のチリチリの天然パーマを指で弄り始めた。その高島の表情は何処となく上の空だ。

「マーキス、君が呼んだのだから君の方から話せば良いんじゃないかね？」

高島に言われ、マーキスは自分が飲もうとしていたコーヒーのカップをテーブルに置くと、少しばかり咳き込んだ。

「やはり、私が言わなければいけないか？ 私は冷戦時代に生まれた保守的な人種だ。こう言った最新の機械構造とやらには不向きなのだが……」

「ふむ、僕も同じ時代の生まれだが」

まるで話の進まない状況に、重い空気に痺れを切らしたのだろう。俺の隣に座る川辺が勢い良く席を立ちあがると、コーヒーカップの置かれた机に握り拳をハンマーにして撃ち付けた。

机は鈍い音を上げ、まだ一口も口を付けていないコーヒーは机へと零れ落ちる結果となった。

「なんや、何々や。オッサン達、ワイら呼びつけんと、その理由は言わないんか？ 用がないんやったらワイは自分の部屋で休ませてもらっわ！」



「落ち着け川辺、今あの人達を罵倒したって俺達に不利に働くだけだつて」

俺は川辺の肩を掴んでいた。川辺を何とか席に座らせたが為の言葉、この状況を穏便に収めたかったのだ。

川辺が声を荒げた事により、萩原は石膏作りの像の用に固まった。心なしか顔色が白く見える、完全に血の気が引いているみたいだ。

こういった状況に萩原は不慣れな様だ。

無論得意な人間の方が少ないとは思うが。

俺達が座らされて話が始まってからも未だ席を座る気配を見せない高島の助手は、コーヒーを運んだトレーで顔を半分程隠し完全に防御の姿勢を取っていた。

当の重役二人はというと、川辺が威嚇しても全く動じる気配を見せない。

瞬き一つしないマークス中將は冷めた視線を俺達に送り。高島チーフは自分がしている金色の時計を見つめていた。

「そろそろ話を進めて良いかね」

## 選考結果！

茹で上がるタコに、冷や水を掛けたのは高島の方だった。時計を見ている事を考えると、時間を気にしているのだろう。彼のスケジュールが詰まっているのだろうか？

川辺の肩を強く押し何とか席に着かせると、川辺は納得の行かない顔で舌を鳴らした。

「やはり、僕の方から話を進める事にするよ」

そう言う和高島は暫くの時間を取った。それは二、三秒という時間で、その間に話の内容を考えたのだろう。

応接室の時計、秒針が着実に時間を刻む中で話を纏め上げた高島はまた口を開いた。

「まずは、試験御苦労と言っておこうか。あの兵装、戦力差で君達は良く戦ったと思うよ」

その言葉で俺は少し胸を撫で下ろした。

「結構厳しい状況でした、本当なら……」

俺は、その先の言葉を口にしようとした時、体中から冷や汗が吹き出して来るのを感じた。誘われる程に浮かれて口を出したのは不味かったか。

「本当なら君は三ラウンドも米兵部隊の餌食になっていたはずだ。だが、互角以上に戦えた、それは何ぜだね」

「なんや、オッサン達。自分らの部隊がボロクソにヤラレたんがそ

んなに悔しいんか？」

「米軍がどうなるうが私には関係ないよ。顔に泥を塗られたのはマークスの方であって私じゃないからね」

高島の言葉で、俺と川辺はマークスの顔色を伺った。マークスと視線が合うとマークスは明るい表情を見せた、その表情からは逆に恐怖すら感じられる。

その、明るい殺気に押されてテーブルに置かれたカップを見つめる事しかできなくなっていた俺は、行き先の見えない状況、流れを変えるべく自分から質問してみる事にした。

「確かに、マニュアルには無い操作をしたのは事実です。ですが…隠しコマンド無しに米兵と互角に戦える連中が何処にいるんですか？ 武器も兵装も二枚も上で真っ向から行って勝てるっていうんですか？」

もう開き直るしか道が残されていなかったのは事実だ、他に良い方法があるって言うのなら聞いてみたい。

俺の開き直りの間に予想外の答えが返ってきた。

「実は……」

「実は、二チームだけ居るのだよ。真っ向勝負で二本以上取ったチームが」

マークスに割って入る高島の答えに俺は啞然とした、一チームなら未だしも二チームも……。

正々堂々と……。

「一チームは実力で、一チームはTSCの特性で勝った」

「でも、俺達だって特性をフルに使って……」

「特性をフルに使って一勝も危ういか？ 私の部下達だって同じ条件だったんだ。今日初めて機兵を操縦する相手に開発側しか知らない特殊コマンドを使って、それで危ういか……」

マーキスの言葉を疑うしかなかった、精密射撃をして来る米兵達が素人だとはとても思えないからだ。

それ以上に自分の適応能力の無さを否定したくなかった。

絶望に打ちひしがれる俺に、思わぬ所から助け舟が流れ込んだ。

「マーキス、そうは言う物の君達のチームは演習前に事前に操縦テストをしているだろ？ 二号機の件に隊長不在。それにあのチームはFPSというゲームジャンルの全米チャンプをキャプテンとして招き入れたそうじゃないか」

「隊長は居たではないか。隊長が居たから善戦できた」

「あくまでも代理で戦っていただけ、彼女に戦闘能力は無かったよ」

急に始まった内輪揉めに目を疑った。そして、高島の言う事が正しいのなら、スタート地点でスナイパーライフルを構えていた敵リーダーは全米チャンプという事になる。

高島は仲間同士の間に来た亀裂にも全く動じた所を見せず、少しばかり俯くと自分のコーヒーを飲みほした。

「鈴木君コーヒーのお代わりを貰えるかね？」

高島は飲み干したカップを助手へと渡そうとしたが、何故か助手は銀色に輝く丸いトレイで自分の顔を覆っていた。そして、高島の声に気が付くと慌ててトレイを本来の使い方に戻し、部屋奥の給湯室へと姿を消した。

「まあ、以下を踏まえた上で採用結果を下そうと思うのだが……」

「つまり、特殊コマンドを使ったのがいけなかったって事ですか？」

俺達がソファ―に座ってから既に十分くらい時間は経過していたものの、痺れを切らすには十分な時間だ。この威圧感が作り出す特異的な空間の中、早く解放されたいが為に少しかり軽口を叩いていた。

「絶望的な状況だからこそ希望を見出さなくては駄目だよ、戦士なら尚更だ。君には宣伝するべき場所が沢山あると言うのに、君も社会に毒された典型的な日本人なのかね」

俺の軽口に、突っ込みを入れてきたのはマークスの方だ。残念ながら下手に出た俺の言葉に嫌味を重ねられる結果となったのだが。

「良いだろ、事前に決めた事なんだ。君がこれ以上口を挟むと話がややこしくなるよ、マークス」

高島はマークスへ執達すると、また話を続けた。

「君達は特殊な条件下で良く戦った。特殊コマンドもプラス材料として今回は受け入れた上で判定を下そう」

高島の口から不意に出たプラスという言葉に少しかり心を踊らされた。偶然にもトラブル続きの俺達に与えられた特別措置なのだろう。

「故に判断した結果、この中から二人、入隊届は手配してある」

二人という言葉に反応せざる負えなかった。

「ちょ、ちよつと待ってください、チーム全体を採用するんじゃない……」

俺は机に両手を付き立ち上がると、動揺しながらも二人の重役へ懇願する視線を送った。

「誰がそんな事をいった？ 自衛官か？ 君達の隊長か？ 採用枠がそれ程多くないのだよ。一万人を超える学生を収容するだけの設備もな無ければ、君達を軍人に仕立て上げる教官の数もそれほど多くない、空軍、海軍、陸軍、各士官の手を借りたとしても精々500人が良い所」

俺の視線に応えたのはマークスの方だった。そして、マークスの言葉が本当なら採用倍率は20倍、採用されなかった人は可哀そうだが前線送りになってしまうという事になる。

この施設でモグラになって安全圏を確保するには相当の運が必要だという事だ。

「そこで本題だ。君達の中で一人は残念ながら、地方の駐屯地に行ってもらうのだが……。皆ももうわかってるだろう」

マークスはそう言うと、視線を対岸のソファ一隅へと送った。俺もマークスと同じく視線を合わせると、そこには冬眠中のハムスターの用に未だ小さくなる萩原の姿があった。

「君ももう分ってい居ると思う、試験中もそうだったね。自分の立場が危うくなっても何も言わなかった」

水を得た魚の用に喋るマークスの言葉が痛かった。萩原が試験中通信を使わなかったのは事実だ。だからと言ってそれが彼の責任になるのだろうか？ おかしい、萩原が通信を使えなかつたのは、マニ

ユアルをホール内の自分の席に忘れて行ったからだ。ココまでは彼の責任、だが、何もわからず、コクピットに放りこまれて碌な説明も受けずに試験開始……適応出来なかったので要りません……そんな理不尽話あつてたまるか。

何よりも前線に行く仲間を尻目にノコノコ自分だけ安全な場所待機なんて出来るわけもない。

「ちょい待ちーや、何ボケかましとんのや。丸メガネが戦闘中喋れんかったのも、そちら側の責任やないか！」

憤慨する川辺の罵声がマークスへと浴びせられた。詰まる所、これが本題なのだろう、通過者とそうでない者を分ける事、区別する事。自分たちが後で批判を受ける事を極力避けるため、それが俺達三人を此処へ呼び寄せた最大の理由なのだろう。

もし萩原だけが用済みなのなら個別に呼び寄せれば良い話なのだから……。

「そうですね、俺達はチームで戦ってたんです。それに隊長にも話を聞いてみたんですか？　俺達の作戦は彼無では成立しませんでした」

「全てだ。すべてを考慮した上での決断だ。無論君達の言う隊長の意見も参考にした、その結果誰でも出来る事と私は判断したのだよ」

## 結果待ち - 2

お前も何か言わへんか、こいつらの思い通り動かされても良いていうんかいな」

川辺は萩原の胸倉を掴むと、勢い任せに掴み上げた。川辺が掴み上げた事により萩原の体は、半ば中ずり状態になった。

「お前、このままやったら生身で戦争に参加せないけないんよ。それでも良えんか？ 冷たい弾丸を演習の時みたいに受けたいんか！ 真っ二つになりたいんか！」

川辺は掴み上げて、なお怒声を浴びせた、それは彼の友情なのだろうが明らかに逆効果だ。萩原の眼からは今にも涙が溢れそうになっていた。

「よせつて、今更揉めたって仕方ないだろ」

俺は川辺の肩に手を乗せて言った、仲間割れを避けたかった。本当なら、俺の仕事ではない。逆上する部下を静めるのも彼ら重役の仕事なのだろうが、高島は上の空で自分のコーヒカップの返りを待っているし。

マーキスの口元は半分笑っていた。

この状況の何が面白いつていうのか。

「大将、揉めてもしゃーないか。えっ？ 偉く冷たい事言うんやな」

肩に手を乗つけた事により、川辺を引き付けたつもりだったが、川辺の血走った目に鬼の形相には思わず身構えてしまう。



「そうじゃない、今更熱くなっても解決しないんだ。萩原の目を見てみるって」

「えっ、あっ、ああ」

川辺は俺から萩原に視線を移すと、今まで力任せに置いていた胸倉の拳を緩めると、萩原は人形のように崩れ。目からは覇気も、生気も感じられず、そこに横たわるのはまさに、生ける屍の姿だった。

「まあ、そういう事だ。これが事実、まるで軍隊に向かない、根性が無い。そういった輩は一度地ベタを這いずり回らなければ治らないのだよ」

消えかかる火に油を注ぐ様にマークスは半分笑いながら俺達に言葉を浴びせた。

奴らが勝手に作り上げた法案に付き合わされて、下手をすれば死ぬ……。俺ですら拳に力を込めていた……。

そんな時だ、給湯室の扉が開き、不安定にトレーを持つ高島の助手がまた現れた。

「遅くなってすみません、一からコーヒー落としていたら時間架っちゃって」

ヨタヨタと歩く助手は、自分の定位置に戻ると、高島へとコーヒーを渡した。

「熱いから気を付けてくださいね」

「落としたてのコーヒーは一段と香りも強く味も深い、待つだけの価値はあるね」

高島は助手からコーヒーを受け取ると、一口付けながら味と香り

を堪能し自分前へとカップを置いた。

隣で繰り広げられた会話、まるで別次元だ……。  
力、熱を奪い去って行く。

「それより、高島さん何の話してるんですか？ 前の二人顔赤いし、一人は真っ青ですよ……」

「マーキスが少し意地悪をしていたんだよ、良い大人だと言つのにみっともない」

「そうなんですか、どんな意地悪ですか？」

「ほらさっき言っただろ？ この中から一人落とすと」

そう言つと、高島は俺達を見回した。

「真っ青に萎れた彼が不採用になつたわけだが、その傷をマーキスが突いているんだよ」

「酷いですね。長い間軍隊に係ると高島さんも血が鉄になっちゃいますよ」

「そいつは良い、くだらない情に流されなければ何時も以上に研究が捗りそうだ」

そう言つと、高島は上機嫌に笑みを浮べた。丸で別の世界で話す会話に暫し呆氣に取られていた。

「ちょっと静かにしてくれないか。今良い所なんだ」

マーキスが訝しげに高島達を見つめると、助手は煙たげに顔背けた。

その後、先ほども声を小さくし、高島との会話を再開した。

「それで彼どうして不採用なんです？」

「ああ、言わなかったかね？ 試験中もずっと無口な奴がいるって」

マーキスは、隣に構わず話を進めようとしていたが、声を小さくして配慮する助手に変わり、高島は変わらぬ声量なため、遭えなく出鼻を挫かれる事となった。

「えっと、無口の萩原君でしたっけ……」

「そう彼だ、コミュニケーションが取れないとチーム内では使い物にならないからね」

高島のその言葉を聞いたとたん、助手は間抜けな声を上げた。

「おい。いい加減にしないか！」

「遅れながら申し上げます」

苛立ちが頂点に達したマーキスへ、姿勢を直した助手の声が衝突する。

「何かね今更」

### 結果待ち - 3

渋るマーキスへ、声を整えると鈴木助手は話を続けた。

「三号機の通信システムの件で言い忘れた事があります」

「本当に今更だな。アイツはもうリタイアと決めているんだ、どんな反論も聞かんど。高島と相談して決まった事なんだからな」

俺は目の前で始まった痴話言に目を丸くした、助手の前で座る高島も止める気配を見せず、唯々自分の目の前に置かれたコーヒーに舌鼓を打つだけだ。

「いいか、内容だけなら聞いてやる、その変わり直ぐ終わらせろ、私をこれ以上怒らせるな！」

助手は苛立ったマーキスの声に圧倒されながらも話す内容を整えている様子だった。この助手が自分の身を訂してまで三号機の件に突っ掛る理由は何なのだろうか？ 今マーキスを怒らせる事に何の意味があるのだろうか……。

「三号機のコクピットに欠損が見られたんですね、操作系に関してです……」

マーキスは助手の言葉を聞くや、鼻で笑い飛ばした。

「何だねそれは、私はそんな報告を受けていないし高島からも聞いていない」

「特に通信系統に異常が見られたんです、後で報告書を上げるつもりだったのですが……」

助手の言葉に啞然とするしかなかった。啞然としているのは俺だけじゃない、川辺も萩原も目を丸くして、目の前の有り得ない光景をただ凝視し、突飛な会話の行く末を見守るしかなかった。

俺達は萩原から聞いている、萩原が試験中会話に参加できなかったのは彼が操作資料を忘れたからだ。そして、小心者の萩原は試験中に説明を受けた事以外の無駄な操作は一切行わなかったと俺達に自分で言っただ。

今一番驚いているのも萩原本人だろう、これが意図的に仕組まれた事であっても、偶然に起こりえた奇跡であつたとしても流れは確実に俺達に見方をしていた。

「妙なハツタリを言うんじゃない、そんなピンポイントにエラーが出るわけないだろ」

「ですから、後で報告書を出すって言ってるじゃないですか！三号機君の結果を出すのはその後も良いと思いますけど！」

頭の固いマークスに対して助手の言動も徐々に熱を帯び始めていた。

「報告書などいくらでも偽装出来るものだ、そんな物に惑わされて判断を誤ったとなれば一生の恥だ。やはり君の意見は認められない」

「ですが……」

「お前、鼻屣してるんじゃないのか？ チーム」

「ちよつと待ってくれないかマークス、私は彼女から報告を受けているよ」

決まりかけた結論に、思わぬ所から支援が入った。マークスが「高島と決めた事だ」と強調して言っていたせいで、高島は今まで静

観していたと思っていたのだが……。

だからといって助かったとも言い難い。把握した上で結論を出したと言われれば結局そこで終わりなのだから

「あつ、えっ？ お前さつき話をした時何も言わなかったではないか」

「お前とは失礼だね、この施設では私の方が地位が上だと言つのに……。上官に話す事と同じだと思え！」

「それはすまない、私が悪かった……」

高島はマークスを一括した。見るからにマークスの方がお偉いさんだと思っていたのだが、そうでも無い様だ。まさかこのボサボサ頭の科学者がマークスの上官になるとは……。

「君が話を進めすぎるからいけないんだ。私は言ったぞ、結論を早まるなと」

「つまりエラーは本当にあつた事だと……」

気がつけばマークスは額から冷や汗を流し、吐く言葉もシンドロモドロ、助手が戻って来る前の覇気の面影は何処にもない。

「私、思ってますよね。あの状況で味方に合図を送る方法を見つけた彼のポテンシャルは素晴らしいと」

支持の出し方を説明したのは川辺なのだが……。

高島に続く様に助手はマークスへと追い打ちを入れた。嫌味つたらしく、チクチクと刺さる助手に、言葉に、マークスは何一つ返事を返す事が出来なくなっていた。

「俺からも彼を推薦します、多分この中の三人、あるいわ隊長を入

れた四人の中で彼が一番機械の操縦に慣れていると思いますけど」

今このチャンス逃すわけにはいかない、その思いが俺を喋らせたのだろ。気がつけば俺も萩原の弁明をしていた。

「ワイからも頼むわ、こいつ本当はもつと明るいやつなんや」

俺の後に川辺が続いた。マークスは直戸惑う表情を見せたが、額の汗を拭い、視線を萩原に合わせると鬼の形相で睨みつけた。

「だからと言って、コイツが通信システムを使った証拠にはならないではないか、エラーだって偶々だったのかもしれない」

マークスにも軍人指揮官としてのプライドがあるのだろう、四方八方から飛び込んでくる反論を退けるとすぐさま体制を整える。

出来る事なら完全に体制を整える前に、逃げの口実を造られる前に、潰したいところなのだが。

## 入隊届け

俺が不意に視線を萩原達が居る方へ合わせると、ソファアーの中心に座る川辺が自分の肘を使つて萩原の体を少しばかりド突いているのが見えた。川辺にド突かれた事で我に返つたのだろう、今まで何をされても、何を言われても全く喋る気配を見せなかった萩原の口が少しばかり動いた。

「あつ、あの……僕……」

地の底から聞こえて来そうな、掠れた声に周り皆が驚いた。マーキスの威圧が相当効いているのだろう。

「何かね、全く聞こえないんだが」

萩原の怯懦な態度を良い事にマーキスは直、威圧を続けた。

「静かにしてくれないですか？ 萩原さんの声が聞こえないんですけど」

助手の言葉からは憤りすら感じられた、自分の意見を受け入れてくれない上司への怒り、ここまでやったのに未だ引つ込み思案な萩原に対しての怒り。この二人に対して憤りを覚えているのは確かだ。状況を見かねて萩原の隣に座る川辺が耳に手を当てると、何やら言葉を吹き込んでいる。何を吹き込んでいたかは分らない。だが、川辺が耳から手を退けると萩原は勢い良く立ち上がった。

「あのっ僕、ボタンを押してたんです」



川辺以外の全員の頭から「？」が噴き出した。全く内容がつかめない。萩原は場違いな発言だと思ったのだろう、直立したまま視線を川辺へ戻していた。

「そうや、言ったれ」

少しばかりの間が流れ萩原は何かを閃いたらしく、先程自分の言った発言の補足を始めた。

「通信用のボタン押してたんです」

相変わらず怯懦な者の、先ほどよりは幾分聞きやすくなっていた。だが、そう甘くないだろう。

萩原の意見一つでこの男が引きさがるはずかない。

「ほう、それはどのボタンの事かね？ コクピットのキーボードには109のボタンがある、更に両サイドの操縦用を合わせると120以上もボタンがあるのに、君の言う通信用ボタンとはどれの事かね？」

何と意地の悪いことか、マークスの発言を聞いて萩原は又硬直した。だが先程とは少し様子が違うようだ、手の平を拳にすると力強く握っていた。それに、萩原が知らないはずは無いのだ、試験終了した後には俺達に本人が聞いて来たのだから。

暫く沈黙した時間が流れていた、硬直状態のまま萩原はボタンの配置を思い出したらしく、閃いた素振りを見せるとまた喋りだした。

「え、えっと、右小指のボタンですよ……」

確かにそうだ、弱々しい言葉は自信が無いようで当てずっぽうに

聞こえるが、答えは合っている。

マーキスは萩原の言葉を聞いて深く溜息を付いていた、観念したのだろうか。

「もう良いだろうマーキス、彼本人の口から出たんだから疑う余地は無い」

慎重に言葉を選びながらも高島は喋った。既に部屋に見方が居なくなつたマーキスは、1人だけ道化と化していた。

「高島、だからと言って採用枠の数は変わらないんだぞ？ 定員500名、大体の目星は付けてある。序盤から情に流されて人を選んでいてはこの先人選が危うくなるではないか」

「断言しよう、今回だけだと。それに、助手の顔も立ててやってはくれないか？ 彼女は研究は今一なんだが目利きは良くてね」

「研究だつてちゃんとやっています」

そう言つと鈴木助手は高島の肩に手を乗せると力任せに握つた。ミシミシと音を立て助手の指が高島の白衣に減り込んで行く……かなり痛そうだ。

横で燥ぐ二人を気にする事も無くマーキスは静かに俺達の方を見つめると大息を付いた。

「やれやれ、今回だけ助手の面を立ててやろう」

俺達はその言葉に胸を撫で下ろした、俺達がこの施設に残る事が決まつたのだ。

「まあ、今ある採用通知は二人分しかないんだ。萩原君と言つたかね？ 君は後で私の所に取りに来てくれるかね。マーキスに頼むと

何をしでかわからないからな」

高島の嫌味を聞いてマーキスは軽く舌打ちをすると、何処となく残念そうな表情を伺わせていた。

「マーキス、後で余分に出来た採用通知にサインを頼むよ、僕のサインだけでは効果が無いからね」

「上官の命令となれば仕方がない」

「さて、これが君達二人の採用通知だ、持って行くと良い」

そう言つと、高島は徐にソファアの脇から A4サイズの封筒を二通取り出した。

そして、二通の封筒を机に並べて置いて見せた。封筒には俺と川辺の名前が書いてあり、机の上に置いたと言つ事で、自分の封筒を自由に取って行つてくれという事なのだろう。

「じゃあ、お言葉にあまえて」

「その封筒を受け取るという事は軍隊の一員になったという事、扉を開けて外に出たが最後もう客として扱われないと思え」

封筒に手を掛けた時、低い声で威圧するようにマーキスの声が聞こえた。この先俺は軍人になるのだ、昨日まで引き籠りがちな学生ライフを満喫していたというのに、翌日には無理矢理軍人だなんて……。

「そんなん構わへん、徴兵でも軍人には変わらんのやったら給料やつてちゃんと出るんやろ？」

川辺は受け取った封筒を団扇の様に使い相変わらずの態度を見せた。半ば開き直った態度にマーキスは目を丸くしていた。

「それは……出るだろ給料くらい」

「ワイは内定貰ってたんや、そろそろ田舎の親に仕送りせなあかん歳やし、給料もらいながら世界最高峰のロボット技術を見られるんや、こんな旨い話なしそう無いわ」

川辺は上機嫌に心の内を言ってみせた、どちらにせよ浮かれる川辺を煙たく思っただのだろう高島は少しばかり咳き込むと言った。

「ああ、君達そろそろ出て行ってもらえるかね？ 私にだって分刻みの予定がある、これ以上一つのチームに付き合う時間はないからね」

気がつけば俺達が応接室に入ってから既に三十分という時間が流れていた、それに、願っても無いチャンスだ。この噓せ返るような威圧感から早々に退散出来るのだから。

俺はマーキスの小言がまた始まる前に席を立つと、連鎖する様に二人も立ち上がった。深くお辞儀をし、不慣れ故にやっと耳で聞き取れるような小さい挨拶を重ね、応接室の出入り口へと向かった。出入り口の重い木製扉に手を掛けると、後ろから高島の声がした。

「ああ、川辺君だったかね？」

その声に驚き川辺は慌てて応接室の奥へと目をやった、未だ位置を変えずソファーに座る高島へと視点を合わせる。時間が無いという割にはのんびり構える三人は優雅に訪れたコーヒーストレイクを楽しんでいる様にしか見えなかった。

でも、俺達との話が始まった直後高島は確かに時計を見ていたし……。

「なんっすか？」

川辺は相変わらず敬語を使わない、ぶっきら棒な返事が室内へと響き渡った。

「君は少し短気だね、その性格は考え直した方が良い、この先障害になるからね。それと目上の人間には敬語を使えよ」

変らぬ口調で話していたが高島の眼はまるで笑っていなかった。背筋に寒気が走る視線はマーキスの威圧以上の効果を持っている。叱られているのが俺では無いのにこの威力とは……この男、普通の科学者じゃないな……。

まるで、学校の先生が吐くような正論に川辺は面を食らいながらも今度は礼儀正しく御辞儀をした。

「す、すみません……気を付けま……す」  
「解れば良いんだ、解れば」

高島のその言葉を最後に俺達は一目散に応接室を後にした。

## 隊長の正体

地下の廊下、通気口から吹き抜ける生暖かい風に、カサカサした換気扇の音が不気味な雰囲気醸し出していた。

「せやね、大将」

「なんだ？」

「ワイーっただけ気になる事があるんやけど」

「でっ？　なんだ？」

応接室から廊下に出た時の事、俺達を案内してくれた自衛官は、腕を後ろに組み微動だにする事無く仁王立ちで中から俺達が出てくるのを待つていた。帰りもエスコートしてくれるのかと思いきや、手に持った封筒を見ると「自分たちで帰れ」だ、行きと帰りで扱いがまるで違うぞ。

というわけで、俺達三人自分の待機部屋までの道のりをトボトボ歩いているわけなのだが……。

「助手のネーちゃんがあそこまで話に入り込む理由ってなんやったんやるか」

川辺は何処となく上の空で、頭の後ろで手を組むと俺に疑問を投げかけた。

「さあな、唯のお節介だったんじゃないのか？　黒人の中将嫌いみたいだったし」

その川辺の問に答えを出したのは、意外な人物だ。俺を外せば廊下内に残るのは無口な丸メガネだけになるので、意外とも言えない

が。今までまるで喋る気配を見せなかった萩原が応接室を出た瞬間にテンションを巻き戻した……立ち直りが速い……。

「皆さん、あの声に聞き覚えはないんですか？ 僕一発でしたよ」  
「アッー」

俺の記憶が脳内で再生されていた。そして、今日の試験中に聞いた一人の女性の声が頭の中で蘇る。一瞬で声の照合は終わった、電撃が走り抜け、過ぎ去ってから直ちに叫びにも似た声を轟かせていたのだ。

「なんや、大将、急に大声なんて上げよってからに」

「そうだ、隊長だ……」

「何や隊長がどないしたって？」

「川辺さん鈍いですねー、高島さんの後ろでトレー持ってたの隊長ですよ」

未だ声の主が掴めない川辺に萩原は補足説明をした、ピンポイントで説明を聞いても直川辺はパットしない顔をしていた。どうやらまだ納得がいかないらしい。

「そんなわけあるかい、あのとろい隊長が勇敢なネーちゃんてたまるかいな」

「あつ、でも隊長科学者の助手やってるって言ってたし……」

「川辺さん、もしかして惚れたんですか？」

「そんなわけあるかつボケー」

確かにあの助手を名乗る女性は隊長だ、間違いない。だが、一つだけ腑に落ちない事がある。隊長は俺達を助けてくれる、それはチームリーダーとしての情、これで間違いない。

なら高島はどうだ？ あそこでマーキス中将与揉める事に利益なんてあったのだろうか。

「隊長が萩原を助けるのは分かるんだけどさー、高島チーフが鈴木助手の嘘に口裏を合わせたのはどうしてだったんだろう？」

徐に出た俺の問は結局空振りに終わった。結局誰もわからないのだ、人情で助けた助手と違い明確な理由も思い浮かばない。もしかしたら高島はマーキスの事が嫌いなのかも知れない。あるいは気まぐれか、本当にコクピットに異常があったのかもしれないし。

考え込んでいる内に気が付けば宿舎だ。軽く挨拶を済ませると俺は自分の部屋で待機する事になった。二人分のスペースで造られた大きな部屋だ……。

応接室の帰り道、結局明確な答えは出なかった、三人の間では気まぐれという言葉で納得せざる負えなかったが、どうにも腑に落ちない。

部屋のベットに寝っ転がると、身体が沈む感覚が心地よかった。



## 始まりの朝

気が付けば朝、鳥の囀る声さえ届かない地下の奥深くで、三度目の朝を迎えた。一通りの選抜が終え、落ち着いたのが昨日の夕方。運ばれた学生の数凡そ一万人、その中から五百人選抜するのに二日間。奇才な戦術を使った御蔭で、最初の方に選抜された俺達は碌に外出許可も下りない宿舎の中で暇な日常を過ごす事になった。やる事といったら昼寝くらいしかないんだ、テレビが置いてあっても砂嵐じゃ意味が無い、川辺達との会話も初日でネタが尽きちまつたしよお。

……と言つても、それは昨日までの話。今日の入隊式が終われば一通りの娯楽施設は全面開放になる。

期待に胸を膨らませる中、俺の部屋にノックの音が飛び込んだ。俺はその音に声を張り上げて返事を返すと、扉を開けた。そこに立っていたのは試験当日から見慣れた顔だった。

「よう大将、そろそろ始まるで、入隊式」

「あれっ、それって自衛官の人が呼びにくるんじゃないんだ？」

俺の言葉を聞いて川辺が少しばかり顰めた面を見せた。どうやら俺の発言に可笑しな所があったらしい。

「駄目ですねー。正道さん、貰った入隊届見てないんですか？」

川辺の横から、見慣れた丸メガネが顔を出して来た。

そして、俺は自分の部屋の奥に置いてある入隊届に目を通した。

「ふむふむ。入隊式当日は九時までに中央ホールに来るように……」

「今何時だっけ……？」

「もう十分前やで、はよ行かんと遅刻してまうぞ。入隊そうそう懲罰なんて御免やからな」

その後、大慌てで準備を済ませた俺は、何とか時間内にホールへ潜りこむ事に成功した。

周りを見渡して見る、この研究施設に運ばれた当初、辺り一面を埋め尽くしていた学生の面影は何処にも見当たらない。今このホール内に居る人達は、あの理不尽な試験を受け、高島達から素質有りと認められた猛者ばかりだ。猛者の中には華奢な女性の姿も見受けられるわけだが。

その後、二人の足音がホール内に鳴り響くと皆壇上の方を凝視した。愈々入隊式が始まるようだ。この入隊式が終了すると同時に俺は軍人になる……。

## 入隊式

諸君の様な若い力がこの施設で軍役に付く事を私は誇りに思う」

その後、無事に開始された入隊式、軍代表としてマーキス中將から激励の言葉で幕を開ける事となった。

つい先日まで、平和なキャンパスライフを送っていたというのに、気が付けば軍人だ。世界は本当に馬鹿げているよ。

「君達にはサイクロプスシステムのスペシャリストとして、これからの日本を支えて行ってもらいたい」

でも今はこれで良いと思っている。生身で戦場に出る事にならなくて良かったのだから。

そう言えば一つだけ気になる事がある、徴兵で引き裂かれたネットゲーム仲間の所在だ。

「この式が終わり、晴れて軍人として活躍して行く事を期待している」

俺は良い。だってこうして軍隊の中でも飛びつきり安全な舞台に配属になったのだから。でも、島根は違っただろう。

「大将、おい大将。人の話聞いとるんか？」  
「んっ？ あっ？」

椅子に座りこみ考え込む俺に、聞きなれない渾名が耳へと飛び込んできた。こんな渾名で俺を呼ぶ奴は一人くらいしかない……。

「どうしたんだ？ いきなり」

「寝呆けとるんとちゃうか？ もう入隊式終わってまったで」

その発言に驚き表を上げると、案の定ホール内には俺と例の二人しか残っていなかった。

「あつ……ごめん……」

「解れば良いんや」

「それより皆さんこれからどうします？」

「そうやなー、昼飯には少し早いが、食堂にでもいってみんなか？」

「良いですけど、本当に少し早いですね……」

「大将もそれでええか？」

「んっ！ ああ、大丈夫」

「なんや、大将浮かん顔して」

川辺達は相変わらずの調子だった。喜作な川辺に慎重派の萩原、この二人だって連絡を取りたい相手はいるだろうに……。

「なあ、ちよつと良いかな？」

「なんや？」

「この施設つて外に連絡する手段無いだろ？ 携帯電話だつて没収されてるし……」

「なんや？ 家族にでも連絡とりたいんか？」

「家族に連絡取りたいですねー、僕なんて碌に別れの言葉も言えなかつたんですから」

「お前には聞いとらんわ」

「手紙を出せば良いんじゃないの？」

この場に似つかわしくない女性の声と共に、俺の頭に衝撃が走っ

た。慌てて振り向くと、白衣を着た女性、手には実験データを収めたファイルが握られていた。

分厚い…… あのファイルで俺の頭を叩いたのか……。

「おつ、隊長やないか」

「その言い方はやめて。私には鈴木直子というちゃんとした名前があるの」

「相変わらずやな」

「それより鈴木さん、どうしたんですか？」

「ホールに鍵をかけようと思ったたら、まだ人が残ってるじゃない。近づいて様子を見てたのよ」

急に乱入してきた、助手の発言で頭に掛った靄が取り払われた気がした。手紙を出せば良いんだ、何でこんな簡単な事に頭が回らなかったんだろう。

「手紙の出し方は施設事務の人に聞いてね、一階に事務室があるはずだから」

その後、鈴木助手に一言御礼を言った俺達は事務室にへと足を運ぶ事となった。

軍の施設という事もある、無愛想な軍人がお出迎えするののかと思いきや、受付をしていのはいたって普通、スーツ姿の女性だ。

軽く挨拶を済ませると、気持ち良いくらい爽やかな返事が返ってきた。その後、人数分の便箋に縦書様式の用紙と注意書きが書かれたプリントを手渡してくれた。

注意書きには、軍の最重要機密であるサイクロプスについての一切の漏洩を禁止するという旨が書かれていた。当たり前の事なのだが、漏洩防止のために書いた内容を一部始終覗かれるのは良い気持

ちではない。

女性の事務員から貰った手紙道具一式を手に持ったまま、事務室を後にした俺達は、その足で食堂まで行く事となった。

「所で正道さんは誰に手紙を書くんですか？」

「ん？ ああ。家族関係は勿論だけど、どうしても連絡取りたい奴が居てね」

「なんや、彼女でもおるんか？」

「そなんじゃねーよ。男だ男……たぶん……。」

「性別もわからん奴に手紙書くんか？」

「ネットで知り合ったゲーム仲間だよ、長い付き合いだけど直接会った事一度も無いんだ」

川辺も萩原も、何か珍奇な物を見るみたいに目を丸くした。

「何だ？ 黙りこんで、俺変な事言ったか？」

「いやっ、大将って間抜けだったり急に律儀になったり、変な奴やなと思ってんな」

「同じく！」

食堂までの道程を暫く会話をしながら進んで行く。

笑い話、泣き話が其処ら中から聞こえて来る。

感情をそのまま曝け出したり、笑顔を作って悲しみを堪えたり。

学生が抜けきらないまま軍人となって、これからの二年間をこの施設で過ごすのだ。

そんな俺達に階級はまだ無い。

## エピソード

### 入隊6ヶ月後

施設での生活にも慣れてきた頃、俺宛に一通の便箋が届いた。

訓練前の空き時間。俺はその便箋を持って、施設何で唯一、緑豊かな中庭へと足を運ぶ事にした。

旧友から貰った手紙、気分的にそうしたかったのだ。

円形状に作られた施設の中庭で便箋の封を開けると、白い手紙が一通だけ入っていた。

\*

元気にしてるか？

まさか厳しい軍隊訓練の中で、書く手紙の相手が一通分余計に増えるとは思っても見なかったよ。

ゲームの中では、あんなにキビキビ動いていたのにさ、いざ自分があの状況に立たされると妙な気分になるもんだよ、まったく。

恐怖でも無い、だからと言って心の奥から湧き上がる悔しさとかそんな類の物でもないんだ。

唯、与えられた訓練科目を必至にこなす毎日で、入隊当時聞かされた戦争の二文字が今では幻聴のような気がしてならない。

このまま戦争も無しに、元の生活に戻れば良いのに。

それと今度、何処の部隊に所属しているのかくらいは教えてくれよな。

島根 純より

懐かしきネットゲーム仲間から貰った手紙、この騒動でやはりあいつもそれなりに苦労しているのだろう。

一陣の風すら吹き込まない中庭で黄昏ていると、俺の頬にひんやりした何かが触れた。俺はその感覚に驚き、振り向くと、俺の横には一人の少女が立っていた。

「君は？」

「あつ、ごめんなさい、急にこんな事して。驚かれましたよね？」

「少し……びつくりしたかな」

「私、草加って言います。真剣に何か見てみたいで、声掛けづらくって」

「そうなんだ。でつ、俺に何の用？」

「正道さんですよ？ 演習第三班の」

「何で僕の名前を知っているの？」

「えー、結構有名ですよ、戦術の奇公子っていう二つ名は」

ひんやりした何かよりも、不意に出た自分の言葉に俺は驚いた。

施設内で半年間過ごしたとはいえ、まだ顔を知らない仲間も多いのだ、この草加という少女も例外では無い。俺は今初めて彼女に会ったのだから。

「私は演習第二班なんですよ」

「……！」

「もしかして……今日の訓練で戦う……」

「はいっ」

中庭に元気の良い声が響き渡った。



訓練内容にも幾つかあるが、サイクロプスの主な任務が前線に立つ事なので、必然的に実技演習が多くなる。

「これ差し入れです」

少女は、目一杯冷えた缶ジュースを俺に渡した。どうやら先ほど俺の頬に触れたものは、この缶ジュースの様だ。

「訓練が終わったら、また中庭に来てくださいね。話たい事があるんです」

少女は俺に一言告げると、颯爽と走り去っていった。

その後、静かになった中庭の中で、先ほど貰った缶のジュースの蓋を開けると。次の訓練で戦うであろう第二班を倒すべく、俺は戦略を考え始めていた。

中庭のベンチに凭れながら。

終わり

## エピローグ（後書き）

どうでしたでしょうか。

電送機兵サイクロプスは？

こんな小説でも楽しんでいただければ幸いです。

この後の続編の目処はたっていないませんが

話は続けて書いていきたいと思っています。

続編が出たときなど、また読んでいただければ幸いです。

それでは皆さんまた会う日まで（・・・）ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5649e/>

---

電送機兵サイクロプス

2010年10月8日15時55分発行